

下伊那テーゼ 50 周年記念フォーラム

いま、改めて公民館の役割を考える

2015. 10. 24



報告集

主催：下伊那テーゼ 50 周年記念事業実行委員会

共催：社会教育・生涯学習研究所

後援：飯田市公民館主事会、下伊那郡町村公民館主事会
阿智村教育委員会、阿智村公民館

目次

フォーラムの記録

実行委員長あいさつ.....	1
来賓あいさつ.....	4
経過報告.....	5
対談 「下伊那テーゼを現代に活かす～地方創生時代と公民館～」.....	7
事例研究「今日の公民館実践における主事の悩みと役割」.....	16
総括講演「下伊那テーゼ 50年のいま、その実践理念をどう生かすか」..	41
参加者当日感想アンケート.....	49

フォーラムを振り返って

参加者の受け止め.....	55
寄稿 「下伊那テーゼに学ぶ公民館のあり方」福森敏也.....	90

下伊那テーゼ 50 周年フォーラム開催にあたり

下伊那テーゼ 50 周年記念事業実行委員会
委員長 木下巨一

1 県内公民館と公民館主事の動向

「公民館主事の性格と役割」、通称「下伊那テーゼ」が発表されて今年で 50 年目を迎えます。

私はテーゼが発表されてからさらに年月が経過した、今から 27 年前の 1988 年 4 月、伊賀良公民館主事となりました。当時飯田市には青年会活動を経験して公民館主事となった長谷部三弘さん、大学で社会教育を学び長く公民館主事を務められていた故伊藤安正さんなど、公民館や社会教育一筋の大先輩が職員として在籍されていました。また、長野県下にも若い公民館主事たちを叱咤激励してくれるベテランの公民館職員の皆さんが多くおられ、私を含めて県下の若手公民館主事たちは、そういう諸先輩の背中を見ながら公民館主事の仕事に取り組んでいました。下伊那の各町村にも、ベテランの公民館主事の皆さんが多くおられ、公民館の仕事を肴に熱く語り合ったことが思い出されます。

しかし、2000 年前後に長野県の公民館運動を職員の側から支えて来られた諸先輩の多くが公民館の現役を去られ、これまで長野県の公民館の蓄積してきた長野県の公民館活動の継続が大きな課題となりました。1996 年から 1997 年に、私は長野県公民館運営協議会の主事会幹事長を務めていましたが、公民館が直面している課題を全県的に論議することが必要と考え、「生涯学習時代の公民館の在り方研究会（通称：あり方研）」の発足を提案しました。ありがた研には、すでに退職された先輩主事である山ノ内町の柄澤清太郎さんと県内公民館主事たちが参加し、約 1 年間メンバー同士で論議を重ね、1999 年「これからの長野県下公民館及び県公運協の在り方の提言」を提出しました。

その後、指定管理や社会教育・生涯学習部門が首長部局に移管されるなど新たな動きが起こる中、2010 年に長野県公民館運営協議会は再び「あり方研」が組織され私もメンバーの一人として 1 年半の議論をまとめ、2012 年に「長野県らしい公民館に磨きをかけよう」という提言書を提出しました。

このように振り返ってみると、公民館をめぐる動きが大きく変化する節目に、何らかの取り組みを進めることができたことは、全国で一番公民館の設置数の多い、長野県ならではの公民館に対する期待や可能性があったからであるととらえています。

2 下伊那テーゼ 50 周年実行委員会の取組

昨年 10 月、阿智村公民館の大石さん、櫻井君という 2 人の公民館主事が、下伊那テーゼ 50 年を記念した事業を行いたいと飯田市公民館に訪ねてきました。このことがきっかけとなり、「下伊那テーゼ 50 周年記念事業実行委員会」を立ち上げ、飯田下伊那 6 市町村と教育事務所から 13 人が参加し、12 月 17 日に初めての会を開催しました。

実行委員会では当初から、本日のフォーラムの開催をまとめの機会と予定していましたが、このフォーラムに至るまでのプロセスを大事にしようと、この間 3 回の学習会を行いました。

今年 1 月 27 日は、元所沢市社会教育職員で、現在阿智村在住、社会教育・生涯学習研究所長を務められている細山俊男さんを講師に、下伊那テーゼが生まれた時代の社会や公民館を取り巻く時代状況を学習した後、参加者全員で下伊那テーゼの原文の輪読会を行いました。

3 月 16 日は、元松川町公民館主事で、下伊那テーゼづくりにも関わられた松下拡さんを講師に迎え、阿智村公民館の社会教育実践と下伊那テーゼ誕生の頃をつなぐ学習会を行いました。

5 月 14, 15 日は長野県公民館運営協議会主事研修会・総会が飯田で行われたことから、研修会の基調を下伊那テーゼとし、初日全体会では前阿智村長で、下伊那テーゼ誕生の頃最年少の公民館主事であった岡庭一雄さんと細山俊男さんに登壇いただき、座談会とミニ講演を行いました。2 日目は分科会の一つを「改めて主事の役割を考える」とし、前日の全体会での論議を受けて、阿智村と飯田市の公民館主事の事例を通して、公民館や主事の役割について考えることを目的に論議しました。

1 月と 3 月の学習会には飯田市と下伊那郡各町村から 30 人近い公民館主事が、また 5 月の主事研修会では県下各地から集う 180 人近い公民館主事が参加してくれました。

実行委員会の発足当初、「下伊那テーゼ」という言葉そのものもほとんど聞いたことのないメンバーもあり、ほとんどのメンバーは本文を読んだことはないところからのスタートでした。

3 下伊那テーゼを現代につなぐ

実行委員会による学習会を開くまで、飯田市と下伊那郡各町村の公民館主事は年に 1 度交流研修会を開く程度で最近はほとんど交流がありませんでした。また、公民館主事の経験年数についても特に町村の場合短期化の傾向が表れているようです。その意味で下伊那テーゼの生まれた時代と現在を比べると、公民館の活動を支える公民館主事の経験、力量の蓄積は大事な課題の一つであるととらえています。

一方、少子高齢人口減少社会を迎えて、国は「地方創生」を旗印に、住民の自治的な活動の活性化による共助の取組みの伸長を図るため、地域コミュニティに注目した政策を打ち出しています（総務省：まちづくり団体の組織化、国土交通省：地域防災拠点、経済産業省：買い物困難者のための流通拠点、厚生労働省：高齢者見守りのための地域拠点等）。

しかし国の社会教育調査でも公民館の設置数は大きく減少しつつあり、また市町村の直営から指定管理への移行の動き、教育委員会から首長部局への移管の動きが長野県内においても始まっているなど、公民館や職員側に国の動向を受け止める力が伴っていないのではないかという危機感を感じています。

地方の活性化に期待する国の動きは、国が責務としてきた国民の基本的人権の保障を、国民自身の責任に転嫁しようという思惑や、国の統制下のもとに国民を組織していこうとする権力的な動きとも連動しており、無批判的にこの動きを受け止めるものではないことは当然です。

しかし住民の立場から考えれば、暮らしをめぐる様々な問題が顕在化している今日において、それらの問題を自らの力で解決していく学びや自治が求められている時代とともとらえることができ、権力的な動きに向き合い、自治的に取組んでいく契機ととらえることもできます。

本集会は、島田修一さん、岡庭一雄さん、松下拡さんという下伊那テーゼ誕生時に公民

館主事として関わった諸先輩と、現役の公民館主事たちの今日的な実践とを結び、下伊那
テーゼに込めた当時の諸先輩の思いを私たちが受け止め、これからの公民館や公民館主事
の活動につなげていくことをねらいとして開催します。

参加者の皆さんの積極的な発言で、本集会が盛会となりますことを祈念し、あいさつに
代えさせていただきます。

来賓祝辞

阿智村議会 議長 高坂美和子 様

本日はこの地に多くの皆様をお迎えして下伊那テーゼの50周年のフォーラムが開催されますことを地元の議員として大変うれしく、さらに誇りに思うところです。本当にありがとうございます。

阿智村もご他聞にもれず、少子、人口減少は進んでいるところですが、今までも住民主体の村づくりということで、公民館活動を積極的に進めて参りました。そうは言ってもなかなか住民主体の形成は困難さ、難しさを抱えながらいるものですから、議会でも下伊那テーゼをコピーし、学習会とまではいかなかったものの、皆で読んでみようと思ひ、取り組んだことがあります。そうした形の中で、村の社会教育がさらに発展することを考えながら現在もやっているところですが、こうしてこの地を選んでいただき、下伊那テーゼをもう一度表に出し、住民の力を高めていく、そんな取り組みがされることを本当にうれしく思っております。

私も遅れてきて、地元の参加が少なく寂しいところもありますが、皆さんのこのエネルギーを糧に、私どもも引き続き頑張りたいと思いますので、しっかりした学習をし、私どもも学ばせて頂きたいと思ひます。本日はどうもありがとうございました。

経過報告

～ここまで何を学んできたのか～

下伊那テーゼ50周年記念事業実行委員会 事務局 大石真紀子

実行委員会ではこの1年間、学習会と打ち合わせを続けてきました。議論の中で事務局の私が考えていたことは1つです。この取り組みを現代の主事がより良い仕事をしていく力にするにはどうすればいいか。そのために主事同士の関係をどうつくれるのかという点です。しかし手応えはつかめないまま引きずられるように進み、力不足を痛感する1年でした。それでもフォーラムを前に、この1年間に聞き、感じたことを見つめ直した時、3つのことが見えてきました。

1点目は住民とどう話すか、どう聞くか。どう向き合うかという課題です。

5月に実施した長野県公民館主事研修会において、飯田市のある主事は異動した後にも地区の方から悩みを相談する電話があったことにふれ、次のように述べています。「(事業などを通じて)あの主事に言ってみたら何か変わるかもしれない。とか話を聞いてほしいなという関係ができてくるんじゃないか。そこに生活の場にある課題とか地域の人たちが本当に感じている悩みが隠れている」。また松下拡さんは「住民の声をどう聞くのか。話の中にある実態を見落としていないか」とおっしゃっています。主事と住民が、また住民同士が、信頼関係を結び、その関係自体が住民一人ひとりの生き方を変え、生活の一部になっていく。それが公民館なのではないかと考えます。

2点目は教育の中立性とは何かです。

3月に実施した学習会において、阿智村公民館の主事はリニア中央新幹線の開発問題を例に、課題を学習会のテーマに取り上げること自体が行政に対立すると受け取られることへの葛藤を報告しました。政治的議論のある問題などについて学びたいと住民から要求されてもテーマとして取り上げにくい感覚は多かれ少なかれ主事の中にあると思います。実際、住民の中でも意見の分かれるところです。ここで考えることは「教育の中立性とは何か」という問題です。細山俊男さんは1月に実施した学習会において教育の中立性について「住民の自由な学習を保障すること」と話しています。

何より大事なことは自らの命や生活に関わる問題を住民自身が学び考えることです。これは住民自治と民主主義に関わる基本です。その学習を保障する役割を公民館は担っているのだと思います。そのことを自覚し、自らの感覚を問い直し、行動していくことが大事なのではと感じます。

3点目は「社会を見る目、基本的なものの見方」とは何かです。

岡庭一雄さんは「基本的なものの見方が大事」と話し、松下さんも「社会をどうみるのか」という話をしています。この点はこれまでの現代の主事の話の中ではあまり語られておらず、実感しにくいことかもしれません。これは法律や社会的制度を知っているということではありません。科学的に社会を見るとはどういうことか、そして社会を構成する1人として自分はどこに心を寄せ、どのように生きていこうとしているのかが問われているのではないかと思います。

これらの点を私は一連の取り組みから学びましたが、当時の主事にとっては主事会がこうした学びを深める場であったのだと思います。松下さんは会うたびに「主事会には行っているか？」と私に聞きます。そこからも当時の主事会がいかに大きな役割を果たしていたかは察するところです。

普段、主事会に行かない私は今回の取り組みを通して、飯田下伊那の主事と初めて出会いました。ある主事は以前の学習会では「忙しい、事業をこなすので精一杯」と話していました。しかし今回のフォーラムの打ち合わせの発言からは、その中でも大事にしていることや価値を感じていることがあり、住民との関係もちゃんと考えていることが見えてきました。ただ時としてその感覚に無自覚であったり、言葉にして共有したいと思っていないだけなのだと感じました。自分たちが良い仕事をしていくために、どういう主事会を営んでいけばいいのか、みんな考えていくことが大事なのだと改めて感じます。

今日は50年前の主事と現代の主事、そして全国からたくさんの方が飯田下伊那に集まりました。時間と空間が集まったかのような今日のフォーラムにおいて、一人ひとりの学びが、明日へ、さらには50年後の未来へつながるといいなと思います。

対談 「下伊那テーゼを現代に活かす～地方創生時代と公民館～」

登壇者 岡庭一雄（前阿智村長）

石井山竜平（東北大学大学院教育研究科准教授）

石井山 下伊那テーゼ50周年という大事な節目にこのような機会を与えていただき、心から感謝しております。

こちらから見ますと、そうそうたる方々がここに集まってらっしゃって、非常に緊張しております。また、本日は、全国から社会教育の関係者の方々がお越しいただきましたが、そのなかには、お聞きしましたら、今年に入って社会教育の仕事を始められたばかりの方もおられるように聞いております。ですので、50年前にまとめられたこのテーゼを未来にどう活かしていくかをめぐって、できるだけ平たく、45分という短い時間ですが、岡庭さんからお話を聞き出す、そのことに努めて、聞き手を務めさせていただきます。よろしくお願いします。

私は現在46歳でございまして、下伊那テーゼは私の産まれる4年前ですね。ですので、私にとってこれは歴史的、過去の文書であります。しかし今回、あらためて読み直させていただきまして、思いましたのは、これはきわめて現代の問題に通じる、すごく普遍性の高い内容の文書である、ということでした。また、私自身の社会教育についての理解が、ようやく少しだけ下伊那テーゼに追いついたかなと思うところがありました。そのことを少しだけ話をさせていただいて、それから岡庭さんから話をお聞きしたいと思います。

現在私は大学で、社会教育についての授業をすることを仕事にしております。社会教育とはどのような教育・学習なのか、その特徴をどのように伝えと解りがよいのか、常に考え続けておりますが、ここしばらくは、こういう言い方を最初にしております。「誰が学習の中身を決定するのか、編成するのかというのが、学校教育と社会教育では決定的に違う」という語り方をしております。

つまり、学校教育の場合には、学習内容は学び手や教え手の関係のない所でほぼ決まっています。大枠としては教育基本法、具体的には学習指導要領に詳細に記されています。つまり、学び手、教え手と関係のない所で学習内容が決まっている。学び手の「このことを学びたい」という思いや、教え手が学び手の様子を見ながら「この子の今にはこういう学習を用意すべき」と判断からは、離れたところで学習内容が決定されているというのが、いわゆる学校教育のスタイルです。

それに対して、私たちが社会教育とよぶ実践では、学び手が「このことを学びたい」ということを学ぶ。学び手に近い立場の者が「こういう学びが今必要ではないか」と汲んで提供することが、やりようによっては可能である、ということが社会教育の大きな特性であり、可能性である、ということを最初に話しております。

今回、下伊那テーゼを読み返してみますと、まさにそのことが端的に、私の言葉よりもはるかに鮮明に、より深く書かれていた、というように感じました。

さらに注目したいのは、ここで示されている社会教育の仕事は、住民が学びたいという要求にただただ応える、というだけではない、ということです。世間一般をきちんと研究した人間が、そして住民の暮らしにきちんと入り込んだ人間が、その様子に

鑑みながら学習を編成する。つまり、主事こそが学習編成の主体であり、そのことを果たすために相当の識見、日常の研鑽が必要であることが、至極当然のこととして書かれている。そのことに注目して書きましたのが、今日のレジュメの7ページの、今回のフォーラムへの期待です。

「ここに示されているのは、地域における学習内容は地域の外で組まれたものが持ち込まれるものではなくて、国民大衆の運動や、そこで取り組まれている学習をしっかりと学んだ者によって住民の暮らしの実態に沿って、きめ細やかに編成されるべきものである。それこそが公民館職員の仕事である」ということである。「こうした学習によって目指されているのが、人間らしく生きるための権利である。それを侵す者を乗り越える力である。より全面的な人間精神の発展を保障する条件を作り出す。新しい社会を創造する力を養うことである。」

つまり、学習内容は誰が編成するのか。それは住民の至近距離にいる者であり、かつ、より社会をきちんと研究している者である。そのことの提起こそ、この下伊那テーマで最も大事に受けとめなければならないところなのではないか。そのように、私はこの機会に読みなおす中で、あらためて感じた次第です。

この点をめぐって、近年、様々な問題が現れております。多くの方がご承知だと思いますけど、例えば、埼玉の俳句問題でありますとか、市民活動センターの問題など、住民の自由な学習、ないしは自由な発言、表現というものを公が堰き止めにかかるという動きが盛んに目立ち始めている。昨今がこうした状況であるのに対し、この50年前の文書は、むしろ、時流をしっかりと読みながら人間の自由な学習や発達や表現や行動を守り育てていくのが、社会教育の仕事であると明快に書かれている。

こうした内容の文書として、このテーマを理解していいのかという確認を、私は岡庭さんからまずはお聞きしたいと思います。そして、そう理解していいとするならば、当時若き主事職員であった、岡庭さんはこのテーマをどのように受けとめ、どのように仕事につなげてらっしゃったのか、その実態についてお話をしていただきたいと思います。長い前置きになりましたが、どうぞよろしくお願いいたします。

岡庭 みなさんこんにちは。下伊那テーマの50年の学習会が私の村で開かれるっていうのは、私にとりましては誇り以外の何物でもありません。大変有り難く思っています。全国から大勢の方にお越しいただいていることに大変感動をしているところです。石井山さんから下伊那テーマについてどう取り組みをしてきたかとのことですね。

私は地元の高校を出まして、地元の役場に就職をしました。あの頃は中学校の同年性の半分くらいが高校へ行って、半分くらいが東京や名古屋へ行って、という時代です。高校卒業しても、大学へ行くとか、外へ行ってしまう。地域に残るといのはほとんどいない時代でした。その中でせつかく地域に残ったという事と、私自身小さな農家のせがれですから、生活上の問題、社会的な問題に対する関心が非常に高かったということもあり、村の政治に関心をもっていました。

役場の職員になって、一番最初に取り組んだのは、労働組合の青年部の活動です。青年団とか4Hクラブとかの活動とかにも参加して、地域の青年の活動に取り組みました。最も私が影響を受けたのは、労働組合なんですね。その当時、下伊那の中でも町村の職員の労働組合がこの山の中の各町村にできていたというのは珍しいことな

んです。下伊那町村の職員が集まって郡職連という、下伊那全体の町村職員の連合体がありました。その中に青年部があって、ここにいる桐生さんとか、もう少し上のかつて青年運動をやっていたような皆さん達が、役場の職員になって、労働組合の中心になっていたわけです。そういう活動の中へ入っていく中で、大変影響を受けることがあったのです。

当時は役場の新しい職員採用は女性の職員ばかりで、男は採らない時代でした。三六災害があって、ポール持ちがおらんくて、災害のお陰で、かろうじて私は役場の職員になりまして、1年間災害の現場の仕事をしました。そのあと中学校の建設の工事があって、そのために教育委員会に移ったのが、この公民館の仕事をやる入り口なのです。

ちょうどその頃は、各町村の公民館の主事であった皆さんが、労働組合の青年部の中心部隊でもありました。そこで主事会というのがあると聞いていて、憧れを持っていました。私の村は合併してすぐだったものですから、公民館の仕事はほとんど片手間のような状態で、年の大きな主事の方もいたんですが、郡の公民館の主事会にはほとんど行ってなかったんです。たまたま主事会の通知が廻ってきて、関心があったので、私が行きたいと言ったら、「付き合いもあるからお前さん行ってくれ」と言われて、主事会に行きました。

私自身が最も影響を受けたのが、その町村職員組合の青年部の活動と主事会。「二水会」といって、第2水曜日にやっておりました。そこで各公民館の皆さんの活動を知ることができて、主事会そのものは農村問題や婦人問題の学習など毎週やっていました。終わった後は、百鬼会とか言って、夜一杯飲んで氣勢をあげる会がありまして、それにも顔を出させてもらいました。特に私は島田さんからの話をかなりお聞きして、厳しく鍛えていただいたと思っております。実は私は公民館主事という辞令はもらったことがないんです。自称公民館主事。住民辞令で8年間やっていたという状況なんです。やっているうちに役場の方も辞令出さずにやっているのが当たり前になったという感じです。

下伊那テーゼの議論が始まった時は私が22歳くらいの時です。下伊那テーゼと私との関わりでいうと、自分自身の自治体労働者というか、公務労働者というか、一人の人間としてどう生きていくのか、という3つの問題というものをこの下伊那テーゼで学ばせて頂いたと思っています。私そのものにとりましては、この下伊那テーゼは血や肉と同じもの、そういう感じで、一生を戻るとするとこの下伊那テーゼに戻る。そういうような感じで今まで52年、村長も含めて自治体職員を務めてきました。下伊那テーゼというのは基本におかれて仕事や活動をやってきたと思っております。

石井山

私はてっきり岡庭さんは、かつて正規の社会教育主事であったと思いこんでいましたが、実は「自称」だったのですね。しかし、組合と主事会の関係の中でこの下伊那テーゼをご自身の血や肉にしてこられてきたということで、岡庭さんのその後の生き方に大きな影響を与えてきた文書である、ということが改めて確認できました。そこで教えて頂きたいのが、下伊那テーゼを具体化するとはどういうことか、ということです。テーゼには「住民の生活世界をきちんと知る」とあります。一方で、「社会や国民の運動」、そのことをきちんと学ぶ、この両者をやっていかないことには住民の

学習を編成することはできないとテーゼにはあります。具体的に当時の主事会が現場でどういう取り組みをしていたか、もう少しお伺いしてもいいですか？

岡庭　大石さんがこの中に書いていますが、基本的なものの見方が大事だとか、松下さんが、社会をどう見るかが大事だ、と。今石井山さんからご質問があった2点の原点にあるものは、一人の人間として、この社会に生きる人間として「どう生きるべきか、どういう考え方を持って生きるべきか」っていうのが基本にあって、学習権の問題であるとか、地域の課題をどうするかというのがあると考えます。問題や課題が先にあるのではなしに、自分自身が主体的にどういう生き方をしたいのか、というところがないと2つの問題を正しく捉えていくことはできない。その中で、じゃあ、公民館の主事会や労働組合あるいは青年の学習会等で何を学んだかっていうことが大切です。そのところが一番大事だと私は思っています。

当時はものの見方の学習会とか社会発展をどう見るか、というような学習は安保以後下伊那の中でも非常に盛んだった。そういう中で学んだのは、社会発展の法則というか、この弁証法的な社会の発展の法則、自分自身が歴史を変えていく、そういう責任と力を持っている。そのことを基本において生きていくという事が、その時に造られてきたと思っているんですね。社会を発展させていく勤労者、国民の、農民の幸せのために働いていく、そのことが社会をきちんと発展させていくもとになっていくんだ、というところを学んできたと思っています。うまく言えないんですけど。

石井山　この短時間では厳しいのですが、この点、もう少しお聞きしたいです。先ほど岡庭さんは、先輩たちの集会を、憧れを持って見ていた、と言われましたが、おそらくその憧れというのは、歴史を変えていく責任と力をそれぞれ自覚している集団であったということなのでしょうね。そこに感化されながら、共に学んでいくという関係性があったということだと思いますが、そうした職員集団は、住民の方々にどのように関わってらっしゃったということなのでしょう。住民の方々が学習要求を吐露されるのをただ待つのではなく、積極的に関わって引き出していく、そういう営みが下伊那の職員集団の中にあつたとするなら、そこを是非そこを教えて頂きたいのですが。

岡庭　その中で学んだことは、「住民の暮らしの中から出てくるさまざまな問題を学習課題に挙げて、共に学習しながら現実の状況を変えていく力を創っていくのが公民館の仕事だ」と言われて。「学習課題」と「生活課題を学習課題」と言った場合に、生活課題については顕在されている生活課題がある。誰が見てもこの人はこういうことで困っているんじゃないかという課題もあるし、言葉でいえる課題もある。しかし、考えてみれば、そういうの??話に潜在的な課題があるわけで、要するにいろいろな状況の中で表に出てこない、出す事が出来ない問題。それから自分自身が物の見方や考え方、洞察力が弱くて、しっかりした課題として捉えられない課題、「潜在的な課題」がある。顕在的な課題を学習し、それを発展させていくことは、それは当たり前の話なんだけど、それだけでは実は人々は幸せを実現していくことはできない。

例えば、私が公民館を始めた頃に大きな課題だったものに、若いお嫁さんの問題があるわけです。当時の阿智村は工業が発展していませんでしたから、農業が中心の農村なんです。だいたい家の中心は、舅さんと姑さんが持っている。ほとんど親父が持っているんですね。財布の主要な所は舅さんが持っている。自分の夫は土方仕事に行くわけです。冬は土方に行って、夏は農業をやる。土方で稼いだお金はだいたいお父さんの所へ預けるわけです。若い夫婦の生活資金は、ほとんどは舅さん、姑さんのところへ頼まないとお金が下りてこない。農村はそんなに豊かではないですから、衛生用品一つ買うにしても、子供のミルクを買うにしても、辛い思いをして買わなくちゃならん。子供の乳にしても「なんでおっぱいが出ないんだ。」ということになってくる。どうしても必要になると、実家へ行ってお金を工面してもらって買って買う。自由に使えるお金がほしいというような要求は若いお嫁さんたちは持っているんだけど、表へ出てこないわけですよね。その所が解決しない限り、農家の女性の悩みの問題は解決しないわけです。

それをどういう形でこのような潜在化している物を顕在化させて学習課題にしてくかという仕事です。それは誰かが媒体とならないと顕在化させることはできない。そこで考え出されたのが「リレー日記」ですね。リレー日記で名前を書かないで、今日自分の思ったことを書いて廻したらどうだろうかという話になるわけです。そのところで赤裸々な悩みがリレー日記に書かれてくる。具体的になると小さな集落ですから、どこそこのお嫁さんだってことがすぐわかってしまうから、お嫁さん同士ではわかったっていいわけですけど。それをきっちり捉えたうえで、一般化してみんなで話し合う。それをテーマにしていくのが公民館主事の重要な仕事。そういう農家のお嫁さんたちに辛い、悲しい思いがあるということをきちっと、とれるだけのヒューマニズムっていうか、ちゃんとした眼を常に公民館主事は養わなくてはならない。そうした力を養う場所が実は公民館の主事会です。そこのところで、松下さんなら松下さんがやっている婦人の学習。松村さんなら松村さんがやっている高森町の学習。それぞれの町村でやられてきたことに我々は学びながら、自分の村の中でそういう展開をするわけです。

農家の青年の問題はどう解決するか。例えば、きゅうりの農家があるのですが、加工用の、漬物用のきゅうりを作っていた。せっかく作っているのに、豊作の時は買ったたかれるような状況で、ではどうしたらいいか。そういう問題を学習する。学習の中から農家の青年たちは加工をし、貯蔵をして、塩蔵して売ったらどうかと考えた。一次加工をして売れば漬物屋さんにも買ったたかれなくて済むのではないか。さらにどういう形で実現していくかという学習がある。そうした学習要求をどこで公民館主事が感じ取るかということ、農家の青年の農業をやっている現場で一緒に働いたり、話をすることによって、潜在化している課題を顕在化して、それをみんなで実現していこうじゃないかということになってくる。だから机に座っていたのでは、潜在化している課題をつかむことはできない。ですから、当時の下伊那の主事たちの多くは、青年と寄り添う、女性の悩みと寄り添う、そういうところがあった。その時に一般の住民の人とちょっと異なる眼で見る、科学的なものの見方とかいうものを公民館の主事会の中で鍛えていく。共同学習や自己学習の中でそういう眼を鍛えていく。ということがやられてきた。それが結果としての下伊那テーマだったんだと思います。

石井山 下伊那テーゼというのは、これから目指すべき目標が書かれたのではなく、すでにそういう積み上げがあつて、描かれた中身であるのですね。そして、それだけ切実なお一人お一人の潜在化された学習課題に気づいていくためには、その人達の生活世界を共にすることに相当のエネルギーが使われていた、ということなのですね。

ただ、特に前半のお話で感じましたのは、農家の嫁たちの愚痴を聞いていくという作業は、考えようによつたらとてもリスクな作業ですよ。表に出す事ができないような愚痴を聞き集め、そこに全体を貫く地域課題を見出し、全体で問題を共有化する、というようなことは、なかなか古い村の人間関係の中では、その過程で様々な問題が生ずるのではないかと思います、そこはどのようにクリアされていったのでしょうか。

岡庭 戦後は様々な民主主義に対する運動が始まってくるわけですが、その中で、かまどの改善運動だとかいう生活改善運動が展開されてくるわけですよ。そこで地域の婦人の組織の中心は部落や町村の婦人会でした。婦人会のもうひとつの側面として婦人学級がありました。生活改善とか、健康の問題とか、保健衛生の問題とかなんですよ。私が公民館主事になったのが19の頃です。私が何をやったかという、保健婦さんについていった。部落の婦人会っていうと、保健婦さんのテーマが多いんですよ。そこで保健婦さんの住民とのやり取りをずっと聞いているわけです。本当大変だったんです。また教育映画を上映しました

当時は家族計画というのが大きな課題だったんです。男の人、夫の不理解のために妊娠してしまい、人工中絶がすごく多かったんです。人口中絶をするのはお金がいるんです。さっき言った、舅さんにお金をもらわなくてはならない。そこで、自分で何とかしてしまいたいと亡くなってしまう方が何人かいた。高いところから飛び降りて、子供をおろそうとする人もいた。そういう中で、女性の皆さん達がコンドームを旦那にどうやって付けてもらえばいいか、実はそのことが婦人学級の主要なテーマなんです。そういうのを我々は聞いている。例えば産婦人科のお医者さんに避妊の仕方をどうしたらいいか話をしてもらおう。そういう中で、それらしき話が出てくるんです。そういう話は絶対男には話しにくい話。婦人学級の次に若妻学級。若いお嫁さんたちのための若妻学級。割とそれも盛んにやっている。その中ではさっきのリレー日記のように現せられないような話が、ぼっぼっと出てくる。それはその中だけの話で終わってしまう。それをどう全体のものにしていくかという話が非常に大事になってくる。

石井山 言葉を失ってしまうくらいの重たいお話でした。見えにくいところに何とも切実な課題が当時あったか。そうした問題を表に出し、村全体が気づいてもらうということ、皆さんでされていらっしゃった。

岡庭 それを集落の中の全体の問題にしていくと同時にそういう個々の問題を地区の問題、村全体の問題にしていくことが大事になっていくわけです。ちゃんと学習活動を展開していく地域は解決していくが、全村的な解決にならない。そこで女性の中心になったメンバーの人たちが、全村中の課題にしたいということで、婦人集会を行うわけです。そこでは農家の家族制度とかの問題について一般論化して、みんなで乗り越えていこうじゃないかという学習が行われる。今阿智村で社会教育研究集会というのをやっているのですが、社会教育研究集会というの、個々のグループで学習しているのを全村的な課題として展開していくために全村集会としている。婦人集会も各地でやられてきたことですが、ほとんど私の所は女性、婦人の皆さん達が自分達で実行委員会を作って、分科会をやったり、レポートを出したりと。そういう事の相談相手になるのが公民館主事の仕事でもあるんですね。女性の人たち自身が自分たちの手で集会を企画し、運営していく。その中で女性の人たちがしっかりと地域を動かしていく。地域を変えていくっていうそういう自信のようなものを付けていく。

石井山 今のお話の中に、さまざま問題を抱えて孤立していらっしゃった方が、地域を変えていく主体に育っていく道筋があったなと思いながら聞いておりました。婦人集会とは、そういう会なのですね。全体の課題にしていく手段として大規模な学習会が当時盛んに取り組まれていて、しかしそれはあくまで住民主導で創られるもので、そこを支援していくのが公民館職員。そういうような役割分担だったと。

時間を忘れて聞いておりましたが、実は残りの時間がごく僅かになっております。最後に一つ、少々聞きにくい話題をと思います。

下伊那テーゼのある意味限界ということについてお聞きしたいと思います。このたびは50周年ですけど、30周年のタイミングでも、下伊那テーゼの振り返りがされております。そのときの資料を見てみましたら、下伊那テーゼが出された時期、枚方をはじめとする、さまざまなテーゼが出された。そこでは、行政意図とは離れた所にある住民の学習要求を大事にしていかなくはない、という事が共通して書かれているわけですけども、その姿勢が鮮明であればある程、その前後に職員の不当配転が現れてくる。そのことが20年前にも話題にされています。奇しくも今、住民の学習が行政的にせき止められる動向があちこちで現れている状況がある。この阿智、ないしは下伊那において、そういったリスクというのはなかったのか。あって越えてこられたとするなら、それはどのようにしてなのか、そのあたりについて教えて下さい。

岡庭 下伊那テーゼと一緒に頑張って創って頂いた皆さんの中でも、公民館の仕事を永久にやっていた人はいないわけですし、典型的なのは島田さんの配転問題というのがあるわけですね。これは、下伊那テーゼの限界とかという話ではなく、常に権力との関係の中においてはきっちりとした社会教育をやっていけば、対立が出るのは当たり前だし、それを下伊那テーゼそのものに明らかに書いてあるわけですね。要するに「反逆性」のないところに教育や学習は存在しない。

「教育っていうのはそもそも現実社会に対する反逆的なものである」と書かれているわけです。それは権力と当然対峙するわけです。今の社会や階級社会である限りは

当たり前の話ですね。その中で下伊那テーゼには、教育に対する権力の介入から中立性を守り高めていく、その仕事も実は公民館主事の仕事だと書かれているわけ。ただ単に与えられたところの中で学習活動をやるのではなしに、そういうものに対してどのような形でそれをはねのけて、新しいものに創り上げていくのかも公民館主事の仕事としてある、と書かれているわけです。その時の公民館主事の力関係で権力との勝ち負けとの話になるわけです。

全体的には住民がどのような形で教育の中立性を守っていく力をその活動の中で創り上げてこれたかどうかという事なんですよ。もし守れなかったとするならば、力が弱かったという話でないかと思う。このところが重要な話で、公民館主事という教育専門職だけではそれを乗り越えていけない。それを乗り越えていくのは、自治体労働組合運動や住民が行う、本来基本的には社会を発展させていく運動っていうものがないと、ただ単に公民館主事の教育の中立性だけでははねのけていくことはできない。住民の運動と、自治体労働組合運動というのはそのところで力を発揮しないと単独だけでは教育の中立性を守っていくことはできない。

今は公民館の地域づくりが話題になってまして、「地域づくり＝公民館」という認識の中で、地方創生の問題とかこれからもやられてくるだろう。しかし、公民館というのは、地域づくりの中にありながら、イコールであってはいらないと思います。私もやってきましたが、実は今やっている地域づくりの中では全ての人たちがその方向で動いていけば幸せになれるわけではない。その中で差が出てくる場合もある。そうした点に眼を向けて、地域づくりをきちんと全ての人たちが幸せになる方向で動いているかどうかを見極めるところがなくてはなりません。そういう力が中にないと地域づくりはこれから正しく発展していくことはできない。というように私は思っております。反逆性そのものを守っていくだけの力をどこでどう付けていくか、常に考えながらやっていくことが、公民館には求められていると思います。

限界があるとするならば、努力の限界であって、下伊那テーゼの限界ではない。下伊那テーゼはそういう点からいうと今日での困難をどう乗り越えていくのか、地方創生というような形でやられてきている地域づくりに対して、住民が主体的に地域を変えていく、そういう力を付けていく、地域づくりを展開していくためには下伊那テーゼで唱っている「住民の主体的な力の形成」を中心にしっかりと置かないと、地域づくりの運動っていうのは発展していかないと思います。

石井山　さまざまな問題を起こしそうな事業に関しては、委縮してしまつてなかなか動かないという判断が全国的には広がる中で、そこをすり抜けようとするのではなくて、そこに対立があるのは当然であり、そのことをきちんと理解をするように住民が育っていないといけない。そしてそれを育てるのが社会教育の仕事であるし、あわせて、行政がそういった反逆性をきちんと認めていけるような組織であり続けるためには、労働組合運動の発展が極めて大きなポイントである。そのことを改めて確認させていただいたように思います。

予定の時間が過ぎてしまいました。実は、事前の岡庭さんとの話し合いの中では、この他にも皆様にお伝えしたい話題がたくさんございました。例えば、多数決は良くないという話題がありました。住民の中には一つの方角性を考えていこうとした時に

は必ず反対派と賛成派があるわけですが、数が多いというだけでそれを選んでいくことではなくて、その両方の意見をきちんと認めていきながら、そこを超えていくだけの科学的な知、それがとても大事だ。それをやっていくのが公民館の仕事である。ということで、ただ住民生活の中に入っていくだけではなくて、そこに「科学」を持ち込んでいくことの大事さを強調されていました。

ここでいう「科学」とは、ということなのか、など、この場でお伝えいたしたいと思うことはまだまだたくさんありますが、時間の関係でこの時間は終了でございます。ここままで引き出しきれなかったことについては、これから先の時間帯において確認できればと思います。まずは第1部の終了ということで、下伊那テーゼに私たちがあらためて繋がるきっかけのところをリアルにご提示いただきました岡庭さんへの、感謝の拍手でこの場は閉めたいと思います。岡庭さん、どうもありがとうございました。

事例研究

「今日の公民館実践における主事の悩みと役割」

ファシリテーター 松下 拓（元松川町社会教育主事）

事例報告者 鈴木勇氣（飯田市羽場公民館主事）

望月貴生（松川町公民館主事）

下岡祥平（飯田市松尾公民館主事）

安野涼介（阿南町公民館主事）

松下 ご紹介頂きました松下です。よろしくお願いします。先程お二人の対談をお聞きして、下伊那テーゼってまあ難しい文章を創ったもんだ、と改めて懐かしく思い起こしたわけです。お二人が話されたことを軸に、基盤において、今の公民館活動はどんな活動が進められているか、その中で何を学びとして、確認していけるのか。将来を見通していけるのか。そういうところにこれからのこの時間が設けられているように思うわけであります。

先程のお話し合いの中で、一口に申せば生活課題を学習課題にするとはどういうことか、生活課題、生活課題と誰もが言っている、学習課題とも言っている。これがきちんと結びついて深まるとはどういう事なのか。そこに実践の難しさがある。それを住民と共に顕在していこうとする、公民館主事としての悩みや課題がある。そんなふう先程の話から具体的に考えさせられたわけであります。どのようにしたら生活課題が明らかになるか、あるいはそれが生活主体としての、生活者として、学習主体者としての学習課題として結びついていくのが、その辺をどのように具体的に考え、展望していったらいいのか、あまり理屈っぽいことを言うと言発しづらくなりますから、気には留めずに感想をあったら加えながら、気楽に発表して頂きたいと思います。では鈴木さんの方から発表をお願いします。

鈴木 「羽場公民館イクメン講座の実施内容」

皆さんこんにちは。飯田市羽場公民館で主事をしております、鈴木と申します。今年で配属されて3年目になります。今日はそうそうたるメンバーがお揃いという事ですが、失礼ですが、僕、名前も顔も分かりませんので、気楽にやらせてもらいます。よろしくお願いします。

手元に資料を用意してもらったんですけど、今日はパワポを使いながら話をさせて頂ければと思います。私の方からは、イクメン講座の実践を通して会話からの気づきとありますけど、実践の報告をさせていただきます。

まず始めに羽場地区の概要をご説明します。飯田市中心市街地の南西にありまして、商店が並ぶというよりも、住宅地が並んでいるようなそんなところ。人口はだいたい5千人。世帯数は約2千戸。というようなところで、山の麓の方には梨やリンゴの農園地帯があったりとか、また、区画整理事業によって住環境が最近すごく整備されて、きれいな町並みが並んでいます。みなさんご存じかと思いますが、松川切石大橋が開通しまして、すごくアクセスも良くなってきている地域です。

ここで羽場地区の人口の変化を見ていただきたいと思います。実は全体的に減ってきてはいるんですけど、点線で描かれております羽場町1, 2, 3丁目という所はすごく

住環境が整備されて、アパートも多く、転入者が多い地域になっております。公園も2丁目にあります。

ここである日の地区の方の会話をご紹介します。相手は自治会長の方だったんですが、次期役員のやり手が見つからなくて困っているという話がありました。その地区は人が多いところなんですが、「若い衆には声をかけにくいんな、アパートの衆も多いし」となかなか顔を合わせる機会がないというようなことをおっしゃってありました。ここで若い人たちの地域づくりへの関心の希薄さが地区の課題になっていると感じました。

突然ですが私のことを紹介させていただきます。私は、昭和58年生まれの31歳、もうすぐ32歳になるんですが、愛妻が一人、愛娘が一人、この写真の右側に映っているのが僕の娘なんですが、とってもかわいいです。昨年の6月に伊賀良から鼎地区に引っ越しをいたしました。ちょっと悩んでいる部分ではありますが、主事さんて、子供と遊ぶ時間がなかなかとれない、飲み会も多いし、奥さんにちょっと気まづいなと日々感じておりました。引っ越したばかりで地区に知り合いはほとんどありません。ですので、地区の行事に参加しづらいなと感じておりました。でもここで暮らしていくには地区の知り合いをたくさん作りたいし、地区の行事にも本当は出たいと思っておりました。もしかしたら、羽場の若い人も同じ思いの人もいるかも、若い人が参加しやすい講座をして話を聞いてみたいと思いました。

実は去年駒ヶ根で参加した学習会で、今日見えておられる松本市の手塚さんが教えて下さったことです。公民館主事には4つの顔があるという話をいただきました。その中の一つの顔に住民としての顔があるという事をお伺いして、自分の住んでいるところ、自分の感じている地域課題を自分の担当している地区に当てはめてみようと考えた所がきっかけであります。

ではどんな講座にしようかというところで、若い人が興味を持って参加できるテーマ、それから、共通の課題を通じて地区の仲間ができて地区の活動に興味を持てるようなこと、それから子供をキーワードに、自分のいる地区の地域づくりについて関心を持ってほしい。と思っておりました。そうだ。イクメンをしようと思いました。

まず最初に相談させてもらったのが、松村由美子先生という方なんですが、隣の丸山地区に住んでいらっしゃる方で、丸山地区で民生児童委員をされていらっしゃいます。それから昔から羽場・丸山公民館の乳児学級の講師をしていただいております。社会教育にも明るい、何でも相談できるような先生です。この方にちょっとこんなことをしたいんだけど、と相談をしたところ、「いいじゃん、面白いじゃん」と後押しをして下さいました。一緒に内容の話し合いをしました。

まず昨年度、プレ講座という事で、「Let's イクメン講座～子どもの笑顔を独り占め大作戦！～」というようなテーマで講座をやってみました。この時工夫したことは、男性はビビリというか、一人でこういう講座に参加することは苦手だという事があるので、家族全員で参加できるような内容がいいかなということです。ただ、お母さんにも自分の時間を、リラックスできる時間を持って欲しいなという思いがありましたので、一緒に来るんだけど、お母さんは別室でアロマの保湿クリームを創ってもらったりとか、他のお母さんたちと話をしてもらったりとかいうような内容にしました。この時の参加者からは、「普段できない遊びができた」とか「他のパパと交流できた」お母さんからは、「子供と離れて、ゆっくりした時間を過ごした」というようなアンケートを頂きまして、「来年度もイクメン講座に参加したいですか」という問いには、皆さん参

加してみたいというお答えを頂きました。

H27年度、今年度の第1回は、4月に行われました。お父さんたちは体を使って子供としっかり触れ合おうと、右上の写真にありますように、普段できないような新聞紙を使った遊びをしてみようと内容を決めました。26年度のプレ講座と同様に、お母さんには別室で、という事で、この日はお母さんたちにはヨガをしてもらいました。

第2回は8月に実施をしました。先にお父さんと子供で、竹で水鉄砲を創るという内容です。自分で水鉄砲を創る機会は最近ないかなと思って、内容を組み立てて、できた水鉄砲を使つて的当てゲームをしました。下の写真になりますが、その後、参加者全員でバーベキューをしました。お父さんたちは頑張って肉を焼きます。お母さんたちは待っています。食べる時にくじ引きトークをし、話をする時間をいっぱいとることができました。くじ引きにテーマが書いてあって、それについて一人一人話をするものです。参加者に主体的に参加して欲しいなという思いがありましたので、本年度第1回の会で、次回やってみみたいことを参加者に提案をしてもらいました。それがこの付箋が張ってある紙なんですけど、バーベキューだったり、水遊び、それから講師を呼んでの子育て講座、これは意外で、「あ、意識が高いな」というように思ったんですけども、そんな意見も出ていました。

ここには書いてないんですが、実は第2回の内容を考える会というのを別の日にしたいと思って、第1回の参加者に声をかけたんですが、参加できると答えてくれた方は一人しかいませんでした。その方に「一人なんですけど、来てくれますか」と言ったら、「じゃ、今回はやめておく」というふうになってしまつて、第2回の内容を考える会というのは実際はできませんでした。第2回の内容は出してもらった意見をもとに僕と松村先生で考えました。

その後、第3回の内容を考える会をまた別日に開催をしたいとお話をしたところ、第2回の参加者、5人が参加してくれました。その内容を考える会では、「他のパパと交流がしたい」とか、「ママに自由な時間をあげたい」、あとは「いろんな年齢の子供が楽しめる内容にしたい」、というような話し合いができて、その会が終わった後は全員で飲みに行って、また交流を致しました。

こちらが今度11月7日に企画されている第3回の内容なんですけど、“パパと一緒に電車に乗って飯田線の旅”という事で、これはみんなで企画をしたものです。当日がとても楽しみです。

ここで参加者Aさんのことをご紹介します。40代の方、奥さんが一人、娘さんが一人、イクメン講座には毎回参加をしてくれています。知り合いも連れてきてくれる、とても積極的な方です。内容を考える会にも参加してくれて、積極的に意見を出してくれました。今後この講座の核となる人かなと思いました。飲みながら、Aさんと話をしていると、「自分の住んでいる地域のことは興味があると、でも自分は転勤族なので、半年後ここにいるか分からない。地域とのつながりも作りにくい。子育てというテーマで他のパパたちと交流できて本当にいい会だった」と言ってくれました。キーマンは残念ながら無理かなと思ったんですが、ここで僕が感じたことは、「若い人が出て来てくれない」とは言ってますけど、地域づくりに関心がない人ばかりではないんだなと気づきました。つながりがなかなか創れないから参加しにくい状況があるんだなと、これも一つの課題なんだなと思いました。

もう一つは地域にあるいろいろな環境で、子育てをしている方がいるというところ

で、この方も転勤族なんですけど、参加したくても参加できないような勤務状況にあったり、子育てに元々関わり方が分からない方だったりとか、そういう人たちに対してのアプローチはこのままでいいのかなと、というような新たな課題や気づきがありました。

今後についてお話をさせてもらいます。まず一つ目、家庭内の子育てから、地域の子育ての意識化をしていきたいと思っています。子供をキーワードにして、地域づくりについて考える集まりにしていきたい。というように考えています。自分の子供にどんな子供に、どんなふう to 育て欲しいかまず考えて、そのためにはどんな地域であって欲しいか。そのために自分たちは何ができるか。そんなことを考えていける集団になっていければと考えています。

もう一つは先程もお話しましたが、自分達だけでなく、自分たちと違った環境の中で子育てをしている方たちへのアプローチをみんなで考えていけるような集団にしていきたいと思っています。

もう一つは、講座から自主サークルへという事で、参加者が主体的にやりたいことを出し合って、実施していけるような集まりであって欲しいと思います。主事はどうしても異動があるので、主事が変わっても続けていけるような、自分達で運営していける集まりになっていって欲しいと感じております。こちらについては具体的な方法というかアプローチがなかなか分からず、今のままのやり方であっているのかとか、常に悩みながらやっているところです。

今後私の方で意識していきたい主事の関わりですが、会話の中から、課題を広い目を見て、みんなで共有していきたいと考えております。それから、地域との繋がりが無いから参加しにくいという声もありますので、地域の違う団体と繋いでみたりとか、広がりを持ってやっていけるようにしていきたいと思っています。

自分個人としての関わりですが、自分が一市民として感じていること、悩んでいることを大切にして、その人達にも伝えていきたいなと思っています。もう一つが、自分なりに共感してもらえるとありますけど、僕が感じていることって結構話を振ると、「ああそうだよなって、共感してもらえる場所」です。それから他の人が言った悩みに「ああそうだね」って共感できる場所なんですね。この場所を自分も楽しんでいきたいなと思っています。まとまりがありませんが以上で私の報告を終了させていただきます。ありがとうございました。

松下 その集まったお父さんたちは子育てとはどういうことでどんなふうに関わっているか、子育てをどう思っているか？

鈴木 そうですね、僕自身もそうなんですけど、子育てって、答えが無いというか、さっき事業のところでも言ったんですが、自分が今やっていることが本当にいいことなのか、とか分からずに、なんか勉強して得たいかなとそんなことを思っています。

松下 例えばこんなふうな考えでいいのかなとか、こんなことをしていいのかなって、具体的な例なんかはありますか？子育てに限らず。

鈴木 そうですね。自分の話でもいいですか？例えば、子供の叱り方だったりとか、奥さんが「がーっ」て叱っている時に、僕がフォローに入ったりとかそんな役割分担を考えなが

らやっているんですが、正解ってあるのかなとか分からないです。

松下 そういうようなことについて自由に気楽に話し合うと必ずある、難しいものだから。参加者というか集まって来た人たちの話し合いとか交流を深めたいって思いがあるわけですが、そういう具体的な例はいっぱい出てきているのか、なかなか出にくいのか？

鈴木 今昨年度の講座も含めて3回やっているんですけど、やっとそういう雰囲気が出てきたかなというところで、そこまでしっかり話し合えないとか、そんなことはまだできてないかなと思います。

松下 日頃の思いつきを自由に話し合いましょう、考えましょう、そこでみんなで、課題があったらやりましょう、とか思うけど、なかなか実際に、実践の中でそれがみんなが乗ってきて話し込んでという事は、本当に、時間がかかる難しいことだ、とそういうことですか？

鈴木 そうです。勉強ってなると参加しにくくなったりするのかなと思うので、「楽しみましょう」だとか、「交流しましょう」だったら、すごく参加しやすいかなと思うんですけど、「勉強しましょう、話し合いましょう」となった時に、その人達引いちゃうんじゃないかなとか、そんなことも不安ではあります。

松下 この中で、子育て講座を考えた、というのはどんなイメージで考えたの、主事としては？

鈴木 僕としてですか？その意見を出して下さった方もおっしゃっていたんですが、子供の叱り方だったり、子供との接し方、声のかけ方、そういった講座を講師の先生を呼んで聞いてみたいという話があったので、十分に意見を出してもらったし、一回やってみようかなとは思っています。

松下 直接子供にどういうふうに日常生活の中で、関わっていったらいいのか、一緒に遊んだり、叱ったり、そういうような具体的な、関わり方について、専門の講師の方から話を聞いてみようというようにことかな？

鈴木 そうです。

松下 そういう学習から、自主的なグループへっていう、思いを主事は持っているわけですね？

鈴木 はい。

松下 どうなったらそうなっていくのかな？その辺のイメージはどうですか？

鈴木 どうなのかな。

松下 それは難しいとこだよな？

鈴木 そうなんですよ。実際自分でそういうふうにはやったことがないので、どなたか教えてもらえればと思うんですが。

松下 時間があったらみんなにそういうのを聞きたい？

鈴木 はい。

松下 他に質問がありますか？聞いていると時間がないから・・・。

鈴木 後で交流会の時にでも教えてもらいます。

松下 後でいろいろ思う事や感想をお願いします。じゃ、次に望月君をお願いします。

望月 「若者を公民館活動に呼び込みたい！」

松川町中央公民館の望月です。よろしくお願いします。自分だけパワーポイント等ありませんので、あしからず、話しのみという事で、飽きずによりしくお願いしたいと思います。

私のテーマは資料の13ページに書いてありますが、「若者を公民館活動に呼び込みたい！」という事です。先程のお話を聞いておりますと、似たような課題といいですか、思いを持っているなという事がありますが、また違うアプローチでまだ駆け出しの活動ではありますがご説明等させていただきたいと思います。

まず、どうして若者を公民館活動に呼び込みたいと思うようになったかというところからです。

私たちの町では年1回、だいたい2月の下旬頃に公民館研究集会というのを行っております。公民館の関係者、教育関係の人達とか、もちろん参加したい一般の方も含めまして、町全体の、公民館全体の行事として行っておりまして、今年は53回目を迎えます。地域の課題、健康や環境の問題をみんなで話し合って考えて、改善につなげていこうという集会です。その中で、「公民館の利用者が高齢化している」ですとか、「固定した人が公民館を利用している気がする」とか、「若者があまり公民館に来ていないんじゃないかな」という意見がありまして、「今の若者はどこでどうしているのか」というところが課題として上がってきたというのが一番の背景にあります。そんな話もありましたので、昨年と一昨年のこの公民館研究集会は、「若者の地域活動への参画」という事をテーマにして、行ってきております。

まずはどうしたら若者に参加してもらえるかという事で、漠然と1年目は話をしまして、正直なところ、あまり具体的な解決策は出ないまま去年に至りまして、去年の研究集会では、そうはいつでも、「まずは若者がどんなことを考えているのか知らなければいけない」という話がありまして、主には「10代の若者が、地域に入ってどんなことをやっているか」とか、事例を見ながら話し合いをしてきたところであります。まだま

だ若者から直接声を聞かなければという事で、今年については20代、30代の若者を採り入れた研究集会であるといいなと考えています。

少し話が飛びますが、若者を公民館活動に参加させたいけれども、一から若者を集めてくるというのはかなり時間も労力もかかることであります。そんな時に成人式の実行委員会があるじゃないかと。うちは夏に成人式をやるので、春先から集まって、夏に成人式を終えて、思い出のアルバムを作って反省会までやってそこで解散してしまう。うちの町は25名くらいで中心になってやってもらうんですが、せっかく集まるのにもったいないという事で、それを活用という言い方はおかしいですが、利用していきたいという事で、案が挙がりました。ゆくゆくは学習するような団体になって公民館を知ってもらって、継続的に公民館を利用したり、地域活動に参加するような自主的なサークルになっていったらありがたいという狙いを持っております。

そういうふうにならざるを得ないために今年の9月に成人式の反省会を行いました。反省事項も済んでこれで終わりますよ、という段階で、私の方から、「もったいなくはないか、もっと公民館のことを知って欲しい」という願いを話して、サークルの立ち上げに近づけるような提案をしました。話はみなさん残って聞いてはくれるんです。私が、10あったら8くらいはしゃべり続けるような状態になりまして、どうやって若者の心をこちらに向けられればいいのか、主事として難しさを覚えているところであります。

若者自ら考えて動いて活動していくようになるには、時間がかかるのかなと感じながら、その時は話をしておりました。若者同士で話をしてくださいという分には、かなり楽しそうにワイワイ話をするので、時間をかけていけば私もそんなふうに、ぼんぼんと会話が成り立って行くような関係になれるのかなと思って話を聞いております。その時は時間をかけて、若者にどんなことをやりたい？とか話をしていく中で、1回目の企画を11月21日の土曜日に開催する運びとなっております。若者を集めて事業をやるというところまでこぎつけたところであります。最初から、「公民館とは何だ、地域課題とは何だ」という話題では皆さん近寄り難い感じがあったので、1回目は親睦会のようなスポーツ活動をやってみんなの仲を良くして、慰労会をやる企画を検討中であります。

ここで話を戻しますが、「研究集会で若者の声を直接聞きたい」という事で、是非この団体をどうにかして結び付けられないか、と考えております。今年度の研究集会の企画にそろそろ入ってしまして、研究集会自体への参加はもちろんのこと、企画段階でも若者の声を直接聞くことが絶対必要だという事で、公民館の編集部、社会部、体育部という、それぞれ活動を担っている部門の正副部長と成人式実行委員会を対象に声を掛けまして、10月20日に懇談会を開催したところであります。

若者の集団の中で私が代表というわけにはいかないもので、5、6人代表者を決めて、「必ず来てね」とお願いをしました。何人来てくれるかな、と思っていましたが、意外にもこの時は半分くらい、12名が集まってくれました。最初、5、6人集まった時に、「飲み物を買に行ってくる」と出掛けて「帰ってきたら倍くらいに人数が増えていてすごかったな」なんて話をして、うれしかった覚えがあります。そんな気楽な雰囲気です。若者との懇談会を行いました。この若者に直接2月の末の研究集会に向けて話をしていきたいなと思っています。

「懇談会の中での若者の意見」という事で箇条書きにしてまとめてあるんですが、今の若者は、うちの町もそんなに大きい町ではありませんので、「遊ぶ施設がもっと欲し

い」とか、「イベント会場が欲しい」とか、中には「劇場があるといい」など若い行動力を活かして遊べる場所は少ない、という印象を持っているような意見がありました。それと逆に、「このまま自然が多い方がいい」とか、「都会に行くのはあまり好きじゃない」、「地元が好きだから残っていたい」という人もいて、意外だなという印象を受けました。地域での活動として表に出てくるのが少ないというだけで、趣味もあるし、気持ちを持っている若者も多いなと感じております。それを「表に出る」というのはこちら側の言い分ですが、地域活動、公民館活動にどうやって意見、考えを反映して繋げていくのが大事だと思っております。

1回もまだ活動が終わっていないので、かなり今まとまりのない話になってしまっておりますが、若者を地域公民館活動に参加させたいと、今話させてもらった様な悩みを抱えながら、うまくいくかどうかというところで頑張っているところです。なかなか足らないお話ではありますが、私の発表は以上であります。

松下 ありがとうございます、何とか若者が公民館に近づいて欲しい、そういう層をどういうふうに広げ、結び付きを持っていきたいか、そういう思いを持ちながら取り組んだ事例だったわけですね。公民館を理解してもらうことによって、公民館に目を向けて来てもらえるか、逆に仲間として自由に話し合い、考え合う中から学びたくなくて、公民館を利用しようという気持ちになっていくのか。両面あるように思えますね。その辺のところをどういうふうこれから取り組みとしてどうイメージしていったらいいんだろうか。何でもかんでも公民館が中心になって理解して公民館に集まってくれ、答えてくれ、それも非常に大事だけど、もう一つは、住民が何を考え、何をしたいか、どうしようとしているか、その場所を公民館が使えるから、というふうに、積極的に住民の方から、公民館の方にイメージを湧かしてもらえような関わり方っていうのはあるかもしれない。その辺のところはどう考えていますか？

望月 確かに言われているとおりでありまして、なかなか公民館を理解したうえで、公民館に関わってきてくれるというのは、若いからといって別になめているというわけではないんですが、若者からそういう意見は出にくいなと感じてまして、公民館に関わって活動していく中で、公民館を知って、それで公民館に興味を持ってもらうというのが、一番いいかなと思っているんです。この若者の出した意見から、どういう事を若者は求めているかというのは、設問もこういう動きではなかったかなと思うんですが、今回欲しいものとか、欲しい施設とかが中心の話となったものですから、そこを公民館でどう、となると、難しくなってくると正直感じているところであります。ただ、時間が若者の中にないわけではなくて、暇があれば、下の興味というところにあるように、町に遊ぶところがなければ外に行って遊ぶし、町で観られないから映画も外に行って観るし、ということで、やりたいことはたぶんかなりあると思っています。それが何かというところをこれから話す中で読み取っていかなければいけないと思っています。1回話し合いを持ったので、話し合いを持つ中でわからなければいけないなど、先生からのお話を頂きながら、感じているところであります。

松下 例えば今関わっている若者たちに「あなたの生活課題って何？悩んで何？」って聞いたらそんなことが出るでしょう？

望月　そうですね。たぶんやっぱり身の回りのこととか出てくるんじゃないかと私は勝手に思いますが、そこまで果たして難しいことにチャレンジしている若者が、失礼ですけど何人いるかっていうようなところがあります。私自身もそこまで難しいことを考えて毎日生きてはいられないんですよ。正直なところ。だからきっと若者も、きっと「明日何して遊ぼうかな」とか「今日何食べようかな」みたいなこともかなり考えるというふうには私は思います。だから、課題は何か、と問いかけた時に、パって返って来る人は少ないのではないかと考えています。

松下　それじゃ下岡さん。

下岡　「役割研究プロジェクトと松尾公民館の活動を通して考えたこと」

みなさんこんにちは。飯田市松尾公民館主事の下岡と申します。よろしくお願いします。

私の方からは、飯田市公民館のプロジェクト活動を通して考えたことを松尾公民館の事例を用いて発表させていただきます。

飯田市は、飯田市公民館と20の地区公民館で、公民館の主事会を形成しております。公民館主事会の活動ですが、定例主事会と幹事会、ブロック主事会、プロジェクト活動、主事会報の発行などを活動として行っております。この活動の目的ですが、全市的な事業の組み立てや検討を行ったり、各公民館の持つ課題や、各主事が悩みを出したり共有解決する場の他に一番の大きい目的として、公民館主事として、専門性を高め、資質の向上を図るという事で取り組みを行っております。その中で、H27年度プロジェクト活動という事で4つあります。現在公民館を取り巻く様々な課題の解決のために、実践的な学習や研究に取り組む。先程も申しましたが、公民館主事として専門性を高め、資質の向上を図る、という目的で行っております。

この4つですけど、人形劇プロジェクトというのは飯田市は人形劇の町、という事でPRしており、毎年人形劇フェスタを行っております。そちらについて研究を行うプロジェクト。あとは地域高校生教育プロジェクトという事で、3番目の新成人プロジェクトもそうなんですが、小学生や中学生は割と公民館と関わりやすい世代ではあるんですが、今の松川の望月さんからのお話がありましたが、高校生や成人となると公民館と関わりづらい年代であります。その中で、地域と高校生に関連した、どのように地域のことを知ってもらおうとか、高校生に地域のことを考えてもらう取り組みとしてプロジェクトを組んだり、成人にこれから自分の住む地域をどうしていきたいとか、そういったことに取り組むプロジェクトを行っております。

役割研究プロジェクトの紹介ですが、目的を「未来の地域を創造しこれからの公民館及び公民館主事の役割を研究する」という事で進めました。現在、飯田市の公民館主事会もだいぶ経験年数が若くなりまして、よく公民館主事の役割とか専門性とかの話が出ますが、「それが何なのか分からない」という声が多くあります。その中で「未来に向けて、公民館や公民館主事の役割を研究してまとめよう」という事で、こういうプロジェクトを立ち上げました。このプロジェクトの目標ですが、まず、「これまで飯田市公民館が果たしてきた役割を学ぶ」という事で、「今まで先輩方が築かれてきた公民館に

ついてどのような役割を果たしてきたか学ぶ」のが一つ。あとは「今の現状を分析して、今日的な公民館主事の役割を研究する」。「5年後や10年後を想像して、その中で公民館がどうあるべきかを想像する」という事で、これらを通じて、プロジェクトメンバー全部で5人いるんですが、5人の主事の資質向上を図るとともに、それ以外の主事会のメンバーにも得られた知識や情報を主事会で共有して、資質の向上を図るという事で行っております。

この役割研究プロジェクトという取り組みを3つ紹介させていただきます。先程プロジェクトの目標の一番上に、「飯田市民館が果たしてきた役割を学ぶ」という事でしたが、まず、各主事がどのような取り組みをしているのか、自分のことを知らないはず、ということで、一番最初に、「各主事が自分の公民館で力を入れている事業を語ろう」という事で、どのような事業を行ってきたか、自分自身が各主事に紹介する取り組みを行いました。成果として、自分の公民館を紹介するという事は、自分が今までやって来たことを振り返らないとできませんし、自分の仕事のやり方やその事業について顧みる機会とすることができました。また、相手に伝えるためにはどのように伝えれば今の自分の気持ちとか、経過とかが伝わりやすいか考えることでプレゼン能力を養う場にもなりました。あとは他の主事からその事業の背景や内容を聞くことで、自分の公民館でもどのように取り組めるかという事で、他の主事の考え方を参考にする機会にもなりました。

続きまして2つ目の取り組みであります、「飯田市民館活動史」というものが、H6年3月31日に発行されておりますので、先輩方が築かれてきた公民館について歴史を学びました。戦後から平成元年くらいまでのことが書かれているんですが、40年位国の制度や政策ですとか、社会情勢に合わせて、飯田下伊那の公民館活動がどのような変遷を辿ってきたか知ることができました。

書物を読むだけではなく、実際に話を聞くことが必要だろうという事で、話を聞くポイントを整理しまして、3つ目の取り組みになりますけど、公民館活動に携わってこられた方との懇談という事で、設けました。

これは50年前、それこそ下伊那テーゼができる頃でありますけど、50年前に飯田市民館の主事を務めておられました、竜丘の主事の河合辰雄さんという方からお話を聞いて、その当時どのような活動をやっておられたとか、どのような事を考えて公民館主事を務められてきたか、というお話をお聴きしました。50年前と現在との比較をそこでしたわけです。

変わる部分と変わらない部分の整理、共有とありますが、50年たつと社会情勢ですとか、住民の考え方もだんだん変わってくる、と考えますけど、変わらない部分という事で、公民館主事は住民の自立を促す学習活動とか、主体的に物事を考える人の育成、援助、その2つを常に考えながら、当時主事を務めておられたという話を聞いて、住民の自立を促す学習活動ですとか、主体的に物事を考えることへの育成、援助、こういったものは今現在も公民館主事がやらなければいけない一つの役割でありますし、変わらずに、現在も行っていかなければいけないんだなということを感じました。

資料の16ページ、実際の松尾公民館のことになりますけど、松尾公民館からは日中交流事業という事で、この事業を紹介させていただきます。

まず背景という事で、飯田市の松尾地区には多くの中国帰国者が在住しております。

いろんな中国の帰国者がいらっしゃるんですけど、実際地域で活動しようとしても文化の壁があり、意思の疎通が困難であるとか、生活習慣が違う事もありますので、そこから生活上のトラブルが多発している地区であります。その結果、中国の方が地域活動に繋がってこないという背景があります。その中でも同じ地域に住む者同士ということで日本の方と中国の方が実際に暮らしやすくなるようにいくつかの事業を行っているわけですが、既存の助業を紹介させていただきます。

まず、一つ目が日中文化交流会ではありますが、こちらは日本や中国の芸能を通じた交流ですとか食文化が異なりますので、そういった交流の実施をしております。この事業の課題ですけど、今のところ年間1回しかやっていなくて、一過性の事業で、継続した学習活動に繋がっていない、また相互理解に繋がるような深い交流ができていないという課題があります。

さらにもう一つ、日本語教室を飯田市公民館と一緒にやっております。これは中国の方に限らないんですが、外国にルーツのある方に日本語を学ぶ機会の提供という事で行っております。ただこちらの方はなかなか学習者が集まらないとか、地域の方にも直接入って交流をしていただきたいが、地域と繋げることができていない、という課題があります。

学習者が集まらないのは仕事等、夜勤務されている方もいらっしゃるので、そういった方の参加は難しいものがあります。あとは日中文化交流会と日本語教室、両社連動していないので単発の事業で終わって本当の課題解決に至っていないというのがあります。

日中文化交流会と日本語教室、やっていても現状のままでは相互理解が進まない、地域に一体感が生まれれないという事を考えております。相互理解を進めるためにという事ではありますが、日中文化交流会とか日本語教室というのは日本のことを中国の方に教えるという形でやっているんですが、それでは相互理解ではなくて、中国の方に日本のことを理解してもらうという事にすぎませんので、まず日本人の方も中国のこととか中国の方について理解することが必要ではないかという事で、歴史を学ぶ講座を今年度計画をいたしました。

その講座の第1段として、阿智村にある満蒙開拓平和記念館で学ぼうという事で行いました。こちらは満蒙開拓団への理解ということで行ったわけですが、参加者の中には自分の親戚や近所の方が満蒙開拓団に参加したという方もいらっしゃって、直接満蒙開拓に関係ない方でも、満蒙開拓のことがわかったとかその時の国の政策だったりして、本当は自分の意志であったかどうか分からないなどその当時に思いをはせながら、自分のこととして満蒙開拓団について考えることができたという意見を頂きました。

次に第2段ということで、こちらはまだやっておりませんが、今年度の事業として、年度内に行う予定でありますけど、参加者からの感想もあって中国帰国者の体験談を聞こうという事を計画しております。中国帰国者の境遇や思いを聞くという事で、実際に今日本に住んでいる方がどのような思いで暮らしているか聞ける機会ができればいいなと考えております。この日中文化交流事業ですが、現状では、人を集めることなど、役員が苦勞することが結構多くあるのが現状です。ただこの歴史を学ぶ講座を通して中国の方の思いを理解する方ができたり、役員に限らず、地域に住んでいる一般の方が主体的に関わる行動を起こすきっかけになればいいかなと考えています。その様な形で日中交流事業を進めていければと考えております。

最後に「公民館主事の役割」という事で書かせていただきました。これはいろいろな過去の先輩ですとか、プロジェクト等で話をしたり、私が公民館主事の仕事を通して感じたことでありますが、やはり、主体性を持つ人の育成支援という事で、私自身できているとは到底思いませんが、継続性を作るためには、役員とか関係なく、主体性を持つ人が地域にすることが大事で、その地域の人が考えて仲間を連れてきて行動を起こせるような場を提供するために公民館主事はどのように考えて、という、主体性を持つ人を育成したり支援することができるかという事を考えていかなければいけないなという事を感じております。

「公民館主事に指名された誇りと責任」という事ではありますが、事業に追われることもあります。ただ、誰がやってもいいわけではなくて、一応飯田市役所から公民館主事として指名されたという、例えば私だったら「自分が松尾公民館に配属された」という使命感を持って事業に取り組むことが大事かなと考えております。一生懸命取り組んで、住民との関係性を築いていければ、自分が困った時にも助けてくれるのは住民の皆さんでありますので、そういった形で日々自分は一生懸命取り組み、地域に入って考えていくことが大事かなと考えております。私の発表は以上です。

松下 ありがとうございます。後半で言われたことについてですが、中国帰国者の人たちとの関係といいますかね、そういう方々の「安定する条件は何か」という実に大きな課題で、これからどの地域においても、大きな課題になっていくんだろーと思います。相互理解を深めようという、そういうことはそれぞれの主体性をどこに据えながら交流を図るかという事になってくる。今関わっている中国帰国者の方々の具体的に考えていること、悩んでいること、望んでいることなどはどのように理解できているのか、あるいはその理解が難しいのか、その辺はどうでしょうか。

下岡 例えばその地区にお祭りがあるんですが、お祭りにはおみこしを担ぎに来る中国の方もいらっしゃる。ただ、一般的な地域の行事ですとなかなか出てこない。それはなぜかといえば、言葉が分からないから、という事を地区の方も私も認識をしております。言葉が分からないと例えば地域行事で、地域の回覧文書とかチラシを見ても何をやるのか分からない。地域の中には通訳をして下さる方もいらっしゃるんですが、なかなかそこまで手が及ばないところもありますので、まず、言葉を知るとか、地域の方が顔を知るという事が大事で、中国の方が地域行事に出たくても一歩引いているのが現状である、と考えております。

松下 言葉というのは生活そのものだと思うんですが、ただ言葉を覚えるというのは、あいうえおを覚えればいいのかじゃなくて、もっともっと生活と結びついた言葉とは、という事になってくると、それは難しいでしょうね。

下岡 そうですね。今は例えば、そういった地区にも子どもがいて、子どもが小学校に通っている家庭の保護者等は、子供を通じて日本語を理解していて、PTA 活動には出られているようです。PTA 活動に出られても地域行事までは参加できないということがあります。ご夫婦ともに中国の方だと言葉を理解されていないという現状があります。

松下 実質的には非常に重い課題だと思います。そこで、前半の方ですが、「主事会として、今までの飯田市主事会の歩みとか現状を分析して考えてみた。それを主事会で共有した」と言われた。「そこから地域の未来の姿というものも考えた」そういうような発表でしたが、その辺ちょっと具体的にどうですか？例えば今までの飯田市における、主事たちの動きというものを今の主事さんたちはどういうふう理解しているか、どうそこで学んだか、その辺どうですか？

下岡 先程の目標の中に「未来を創造する」という事を申しましたが、正直そこまで全然できていなくて、現状の今の主事がどのような事を考えて、というのを周りの主事が理解するところと、あとは飯田市公民館活動史を通して、過去の飯田市公民館の役割について学んできたところであります。今の主事が、過去の取り組みをどのように理解しているかということとそこまで全主事が共有できていないと思いますが、私を感じる所では、50年前の主事さんのお話とか学習するなかでは、先程も出ておりましたが、政治的な話もしながら政治的な学習もしてきたと。ただ、その中立性を保つためにいろいろな苦勞もされてきたというお話もお聞きしました。現在はどちらかというと、自分の地区の地域学習というか、地域の資源とか魅力を発見するための事業を行っておりますけど、例えば今でいえば安保闘争とか、リニア中央新幹線のような、いろいろな意見が出るようなことについては、私自身触れていないのが現状であります。ただ、これは過去の主事の皆さんはやってこられたことでありますので、こういったところにもどのように踏み込むかという事が、私がやらなければいけないことかなと思っております。

松下 具体的にはリニアの問題とか、あるいは地域開発のことを地域創生事業、あるいは憲法の問題、そういう事は本来積極的に取り組むべき課題であることはしっかり意識している。しかしそこに具体的にどう迫ったらいいか。どういうふうにそこから主事として、取り組んでいったらいいかという事がもう一つ、まだ掘みきれていない。そういう事です。またその辺のことはあとの、それぞれの立場で是非意見をお聴きしたいと思うところですが。それでは最後は、安野さんお願いします。

安野 「阿南町 4 地区公民館の今後」

トリの発表という事で大変緊張しております、阿南町公民館の安野と申します。よろしくお願いします。

阿南町公民館からは、4地区の公民館の今後という事で発表させていただきます。まず、阿南町の4地区とは、という事で、阿南町は昔、富草村、大下条村、豊村、旦開村、の4つが合併した町となっております。現在合併して1つの町となっておりますが、旧村単位で地区が区切られております。富草と大下条は、富草村と大下条村で一緒ですが、豊村が和合、旦開村が新野という地区で分かれております。

公民館の形態としまして、まず全体を阿南町公民館という括りで、その下に、先程の4地区に1つずつ公民館があります。富草地区の公民館、大下条地区の公民館、和合地区の公民館、新野地区の公民館の4地区の公民館がありまして、さらにその下に分館という形で、各地区に分館が存在しています。全部で36分館となります。

その阿南町公民館の全体の主事として一人、あと各地区の公民館に同じく主事が一人ずつ、各分館の方には、地域の方から代表で出てきておられる分館長が一人。あと、各体育部長さんであったり、社会部長さんであったり、女性部長さんであったり、公民館ごとで違いますけど、役員の方がおります。

こちらの表のように、こんな形で地区公民館は活動をしています。地区ごとで一つずつ、代表で言いますと、

富草地区では「海物語」です。富草地区は化石が採れることが有名で、地区に化石館というのがあります。参加者を募り、下の化石が取れる所で発掘体験、化石館に戻って勉強会を講師の方をお呼びして行うという活動をしています。

大下条地区では「釣り大会」です。大下条地区に深見の池という全国的に有名な池がありますが、今、ブラックバスとブルーギルが大量発生します。それを駆除、という目的もあって釣り大会という形で参加者を募り、公民館と深見と、深見の池を愛する会という3者の共催で釣り大会を行っております。

和合地区は「シャクナゲを見る会」です。和合の心川、鈴鹿沢地区の間にシャクナゲが群生している地区があって、安野川丸山という山の登山道の途中にあるんですが、それを参加者を募って皆さんで見に行くという会です。時期が難しくて、時期を間違えるとシャクナゲが全部落ちていて見れないという事もあるんですが、人気のあるイベントとなっております。

新野地区では、「自然観察会」です。新野地域自体大変珍しい自然の生態をしておりまして、新野高原では、大村湖という人工の湖があって、高さを忘れてしまったんですが、その標高では普段生えない花の木という木が生えていまして、そちらを参加者が見る。冬になりますと、ザゼンソウ、ニッコウキスゲなども生えまして、その観察を行う会です。他にもイベントありますけどそちらの方を代表して出させてもらいます。

阿南町公民館としては、町民登山があります。こちらは参加者15名を定員として、毎年9月に行っております。その時参加者の方から「次はこの山を登ってみたいよ」という声をお聞きして、それを参考にしながら登る山を決定して、毎年参加者を募って登山を行っております。今年は阿智村と平谷村の間にある百名山の一つである大川入山に登りました。

阿南町公民館、地区公民館という括りでもあるんですが、どこも行っていると思いますが、阿南町の場合は運動会を先程の4地区、富草、大下条、和合、新野に分かれて各地区で行っております。地区ごとで特色があって、見ていても面白い感じになっております。

11月14日、「感性と創造のフェスティバル」という事で、各町内の文化団体、あと小学校、福祉施設など参加者はいろいろありますけど、文化祭を開催します。今こちらに表示しているのが、シルバー講座です。こちらが南部舞姫という名前で、町内でヨサコイをしている団体。こちらは大下条小学校の金管バンドです。こちらは富草寮という、町内の福祉施設です。富草太鼓として活動をしている団体の太鼓の発表になります。このように4地区、地区ごと特色ある活動をしています。

阿南町も現在少子高齢化によって、人口五千人を切るかどうかというところに減少しております。そのため公民館活動も人口減少と比例して全体的に見て衰退をしております。中には地区公民館の行事しか行えないような分館もあります。「町全体で一つの公民館という形で行えばいいんじゃないの？人も少ないんだし」という声もあるんです

が、もと旧村、富草、大下条、和合、新野で文化や人柄も違いますので、一つにすることは難しいものがあります。

それでも「他の地区と協力して何かできないかな」という事で、まずは阿南町の中でも、例えば、「新野地区のこの地区のことを富草の地区の方は知らない」という状況がありますので、まずはそれを知ってもらおうと考えました。公民館報を奇数月、2カ月に1回発行しているんですが、分館紹介というページを1ページ設けて各分館の分館長さんに、分館の活動と限定しちゃうと「そんな載せるような活動をしておらん」という声もありますので、そんな縛りではなくて、「地区を紹介してくれればいいよ」という事で、書いてもらうことにしました。こちらは分館紹介第1号和合の下分館です。主に活動をしているのが、和合の念仏踊り、去年国の民族指定文化財に指定されたお祭りをやっているという事で、それを主体に記事を書かせていただきました。

現在2カ月に1回分館紹介の記事を周りからも「全然知らなかったよ」という声も少しづつではありますが、耳にするようになりました。これを続けていくことで、各地区皆さんが知らない地区のことを知っていただければと思います。ただ、これで地区のことを知っていただいたうえで今後、今度は地区ごと壁を超えてどうやって活動をしていくか、少子高齢化で人も町内少ないので、皆さんが協力して活動していける形を公民館がどのような立場として活動していけるかということを公民館の編集委員、または阿南町公民館の方でも検討をしております。簡単ではありますが、阿南町の公民館の発表とします。ご静聴ありがとうございました。

松下 ありがとうございます。阿南ていうのは、ちょっと想像がつかん位大変な地域なんですよね。山があり、山の中で暮らしているんで、4地区全く状況が違って、これが阿南町の公民館という体制の中に組み込まれている。その中でどのように交流を図り、連携をとりながら、阿南という地域の発展、あるいはそこで生きていく状況をどう考えていくのかという、非常に厳しい状況を抱えているところです。消滅論ではないですが、真っ先に候補になるくらいの地域ですよね。その中で、何とかして、地域の人たちが、自分達の地域を少しでも理解をしていこう、そういう交流の場を作り、図っていこうという官報などの取り組みが行われているわけですね。そういう大変な所での取り組みが、今報告されました。

それぞれ4人の方に報告して頂きました。お聴きしながら、先程の岡庭さんのお話にも出てきたように、下伊那テーゼを作った頃の50年前ですね、大変状況が変わってきている。先程の話の中では、役場の労働組合の中で、地域の住民と話し合い、深めた。地域の実態を捉え、そうして行政に結び付けていった。そういうような取り組み。あるいはその頃は地域の中に、いろんな住民の組織があったんですね。婦人会があり、若妻会があり、青年団があり、壮年団もある。いろいろ活発に動く地域の動きがありました。そういう人たちの中で、地域課題とか生活課題とかいうものはちょっと声をかけると、パッと結びついていけるようなそういうムードがあったんですね。そういう中での学習の系統的な深まりとか、あるいは生々しい課題をどう学習に結び付けていくのかという事がとても大変な事だったけれども、とっつくきっかけはたくさんあった。

そういう時代と今とを考えると、ずいぶんそこは違ってきている、と、公民館活動という視点から見ていくとね。ですから今の若い人たちが、今の報告にありましたよ

うに、なかなか思うように地域の人たちとの結びつきが持てない。公民館が地域と結びつくなんて当たり前のことだ、地域の人々と話し合い、活動を進めるなんてことは、原則の原則でそんなこと当たり前なんだ。といっても、実際にはそれはなかなか難しいことなんだっていう、そういう思いが語られたように思うわけであります。

そういう中で、どのようにしてこれからの公民館を、ということはまあそうはいっても、今の現状の中では、さまざまな生々しい課題が深まってきております。それぞれ一人一人が、しかしそれが結びついていかないと、組織としての取り組みになっていかない。そこに現代の課題は深まっているけれども、取り組みの難しさがあるように思うわけですね。そういう状況の中で、どういうふうに食い込んでいったらいいのかということが、4人の方から出された。

そんなところを念頭に置いて、どうですかね。主事の中で、先程岡庭さんの中では、まず主事が腰を据えるんだ、腰を据えて、俺はどう見る、どう考える、そのことをどう本気になって住民と対して考える、意欲を結び付けていくのか、そこから掘り起こしていく、そうしてそこから行政との対立が生まれてくる。その緊張関係の中で、学習とは何か、民主的な動きとは何かを築きあげてきたんだと。まあまさにそうでしょうね。しかし、原則原理の考え方は同じにしても、なかなか現状の中では、そのことの難しさ。しかし、どういう時代になっても、主事は主事として、腰を据えて、自分の眼を持たないことには始まらない。

そういう点で考えた時に、厳しく問い詰めるわけではないけれども、皆さんの日常の中で大学講座とかそういう講座はよくありますよね。公民館で開いている。それはどういう思いで講座を企画していますか？ どういう思いで講座の課題を据え、講師を選び、据えているか、企画しているか、その辺のところはどうでしょうか？ どなたか？

安野 自分のどんな講座を開くかという中で、なかなか活動するなかで講座を開くというのは、難しいところがあるんですけども、まずは自分がやってみたいというところもありますし、住民の「これをやりたい」という希望をしっかりと聞いて、それからこの講座を開くか、という形じゃないと、開いたものの自己満足で終わってしまう部分があるかな、と。住民のニーズもありますし、今の社会でいうと阿南町は高齢者が増加しているので、その高齢者に対して希望しているような講座をやっているのかなと考えております。

下岡 私の方では主に子どもを対象に飯田下伊那は都会に人口が流れるのが一つあると思いますし、地域の子供が大人になっても、自分の地域にはこういうものがある、例えば都会に行っても話せる、一番いいのは都会に出ていっても最終的にはこちらに戻ってきてもらえることだと思いますけど、外へ出た時に、自分の地域を自分の声でしゃべれる人を育成できるように、小学生とかを対象に、例えば、松尾でいえば、古墳。社会の教科書に出てくる古墳が実際自分の地元にもあるんだ、という事で、地域の方に講師になってもらって紹介する取り組みを行っております。

望月 私の方は、今までの主事の活動の中で、直接的に講座を企画するとかにちょっと遠かったものですから、企画をつていうのはあまりありませんでした。先程話した事例の中で、最終的には若者が主体的になっていくんだけど、それまでの間はこっちで、何をしたら

どうかと提案していくことが出てくるんですが、その中では、話し合いの中で何がやりたいか、確認、読み取って、提案していかないとみんなついて来てくれないな、と皆さんの話を聞いたりして感じているところです。

鈴木 はい、僕はですね、去年、実際にやった講座でもあるんですが、反省が多い講座でもあったんですが、ラインだったりとか、フェイスブックとか、ソーシャル・・・なんてかっている、すごく問題になっているっていうのを小中学高の教頭先生から聞いたりして、子供を取り巻くインターネット環境の課題について講師の先生を呼んで、お話をしてもらったんですけど、僕は、「やばいやばい、自分達だけでは子供は守れない、自分の家族だけでは守れない」と思ったんですけど、地区の方がどう感じてくれたかは聞かずにすごしてしまったのと、その後の広がりを見込んでなくて、そのまま単発で終わってしまったというような所はありました。

松下 自分の子供は自分や親だけでは守れない。家族だけでは守れない。だから地域で考える。あるいは社会的な、そういうようなイメージがだんだんに湧いてくる。では具体的にはそれに迫るにはこれからどういうふうに考えて取り組んでいくか、そういうことですね。そんなことについてはどうですか？

望月 そうですね。今、各個のこととして考えている人が多いと思うんですが、地域のつながりの中で問題解決だとか、子育てとかしていくのは大切だなと思うところで、私自身が、高校を出てすぐ働いたんですが、その中で結構最近になって、地域に育てられたなと感じることがありまして、職業柄、町にずっといるので、町の人との関わりも大きいし、団体に出れば、いろんな人がいて、いろんなつながりがあって、そのつながりの中で自分の肥やしになったりとかがあるので、家族だったり、親と子の関係だけでは自分は成し得なかったんだなというのを今、30過ぎて感じているところです。地域のつながりの中で育っていくことはすごく大切なことだと感じております。今のその話と関連できたか分かりませんが、地域とのつながりについてはそんなふうに感じております。

下岡 これからいう課題が適切かどうかはわかりませんが、今月に入って、例の発砲事件があった時に、小中学校は、保護者が迎えに来てもらうようにという事がありました。それをずっとやるわけにはいきませんので、あとは地域の方が外に立って、朝、帰り、登下校の時には地域の方が外に立って、挨拶をしたり、見守りをするという取り組みを行いました。やはりそれは、保護者は共働きが多くて、子供を自分だけでは見れなくて、地域の人が見守ることで子どもが成長できるというか、安心して生活できる、という事に繋がっているという事を思いました。

鈴木 関連性があるかどうかっていえば、難しいんですが、僕小さい頃、3歳とか4歳の頃よく、飛び回る様な子供だったようで気づいたら家にいないっていう、一般的に考えたらとんでもない子だと思うんですけど、どこ行った、どこ行った、と探すと下の家の方のおばあちゃんの家でお茶を飲んでいたりとか、そういう事がよくあったようです。自分はあまり記憶がないんですが、自分の住んでいる所は田舎という事もあるんですが、そういう地域の方が、行きなり他の家の子供が来ても、ちゃんと見てくれていた。そういう

温かい地域っていうのは、田舎にはあるんですけど、都会で考えると、いきなり飛び出したら車に轢かれるとか、誘拐にあったりとか、そういう事に普通はなと思います。

公民館が地域で人とのつながりを持てるようになって、それこそ他の家の子供をどの地区でも、「どこから来たの？ちょっとおいな。」って引き入れて見てくれるような、そういう環境ができればいいのかな、難しいとは思いますが。

松下 昔は、そういう地域があったよね。そんなような昔の思い出とか、その地域性っていうものが、羽場の鈴木君のわかる人の親たちの話し合いの中で、話題になっていくとか、おばあちゃんを呼んでみるとか、そんなことも考えられるかもしれないですね。

今までの取り組みの中で、例えばこの話題には出なかったけども、今の国の政治の動きとか、あるいは情勢について、公民館で、何とか取り組もうとするが、どうも行政の目が気になって動けなかった、とかそういうことはないですか？

鈴木 望月さんの話にも出たんですが、成人式。こちらも成人式の実行委員会を組んで、成人式に何をやるか決めていくんですが、町の方からやって欲しいということで、町への提言というものを2年前から行いまして、町長にも上に上がっていただいて、今の成人者の人たちが発表するっていう。成人者の発表させたい内容、ただ、それを発表させると、いろんな意味でとんでもないことになるっていう、意見も中には出たりするので、それを発表させていいものか、成人者から出た貴重な意見なので、ここは止めた方がいいのかなってちょっと悩んだことがありました。

下岡 私は、先程も申しましたが、なかなか政治的な事について、触れられていないっていうような現状なんですけど、先程事業を説明した日中交流会の中で、今年はマイナンバー制度が施行されるという事です。中国の方は当然分らないですが、日本の方もほぼ分らないという事で、行政から担当の方を呼んで、マイナンバーについて学習する機会を設けようと考えております。日本語を普通に話せる中国の方と意見を交わした時、自分は姓を名乗って来たけれど、マイナンバーによって、苗字が無くされて、数字で管理されると。決して名前が無くなるという事ではないんですけど、中国の方はそういった捉えをする方もいらっしゃるという事で、そういった所は問題だなと感じました。

望月 私はそんなに難しい問題ではないんですけど、公民館報の編集について、館報なんだから、館長がいいといえればいいというのが筋ではあるんですが、そこへ、公民館の部局。教育委員会の中でも公民館ではない行政部局があると思うんですけど、そこで、この記事についてはいかがか、と言われることが、そんなに沢山は無いんですけどありました。その中で編集部の、公民館としての意見を尊重して、それで押し切るのか、それとも待ったがかかったところを少し調整して、問題の記事を修正して出すのか、考える所が少しありまして、難しいなと思っているんですが、自分の立場的な両方の立場がある所で、どっちにすればいいんだろうと悩むところがあり、結局は、修正して落ち着いた形の記事に直して出したんですが、そのバランスというか、さっきから出ている中立性というところで、学習ではないにしても記事一つにしてもそういうところがあって、難しいなと感じているところも日々あります。

鈴木 僕自身は、大きな社会の動きだったりとか、政策だったりとかいうのに、全然勉強が足りてなくて、踏み込めてないというのが現状です。今日お話を聞いた中では、昔は主事会の中で勉強したという話がありましたので、今後、飯田市の主事会だったり、郡部の主事会でもそういった勉強できるような形もあっていいのかなと思いました。

松下 はい。是非頑張ってください。それではどうでしょうか、ご質問、何か聞きたいことがありますか？

H 僕は阿南町の町民です。主事でも何でもありません。ただの町民です。今日参加させてもらったのは、阿南町が来ているので、なんか言いにくいこともあります。阿南町の公民館活動というものをもう少し、元気出してやって欲しいな、と。前々から思っていて、ところがお隣の阿智村は非常に元気にやられていると。何が違うんだろうと、ずっとここ2年くらい考えていたんですが、やっぱり、どういうんでしょうか、先程阿南の安野さんがおっしゃってましたけど、成人がこういう意見を言ったら、それを挙げていいかどうかという、それはちょっと声の大きい人がいるから、やめておきましょう、みたいな、そんなの議論されないんですね。そういう事に対して。それはもう、町民の声も含めてですけど、そういうのがあるから、ややこしいことはやめましょう、みたいな、そういう雰囲気、別に公民館というだけではなくて、住民の中にもあって、僕はやっぱり、こういうところになってしまった、というところに大きな問題がある様な気がして、それはなんでだったのかっていったら、その時に、僕は、公民館活動の役割というのはものすごく大きいんじゃないかというように思います。それで、先程の、石井山さんとか岡庭さんが、言っておられましたけど、自分たちが考えて学ぶ場だなんて思っていない。住民は多分。だってそうですよ。私は、今のところに来て8年なんですが、公民館活動をそういうようにしようと思ったので、先程出た分館の館長にこれやりたいと手を挙げたんです。そうしたら「お前みたいなよそ者はだめだ」そう言われましたし、そのあとは、「もう順番が決まっているから、お前はあと10年くらい先だな」って言われました。「じゃあ、何やるんですか？」って聞いたら、「俺はやりたくない」ってみんな言うんです。分館長を。そんなところが現実だと思うんで、そこのところをもう少し町民交えて考えていく必要があるんじゃないか。それと、今日少し残念だなと思ったのは、公民館で民主主義とか主権者は誰とかそういう勉強会などをやられているところがなくて、それってどこでも教えてくれないって思うんです。18歳から選挙が始まるって言うんですけど、それだって学校教育で教えるって言うより、僕は公民館にとっても期待するし、公民館の活動が大事だっていうふうに思っています。ですから皆さんも是非頑張ってくださいなと思います。ま、駄目でも僕も頑張ろうと思いますけど。

松下 3人でも4人でも是非そういう仲間を周りに作って、そして主事と話し合いながら言い続けていく。是非頑張ってくださいだと思います。他にはいかがでしょうか。あ、どうぞ。

水谷 三重県の桑名市から来ました、水谷と申します。下伊那テーゼの頃は、中野市の公民館

主事をしておりまして、大変懐かしく話を聞いたんですが、岡庭さんの話にありましたように、私たちの時代は、ごく自然にですね、労働組合に入ったわけですね。これは別に黒酢の食品ではないんですけど、だいたい100%入ってますって言いますがね、食品は。だから当然入って。その労働組合の中で活動しながら公民館の仕事と関係を付けていったんですね。それが労働組合の自治研の仕事だったんですよ。私は実は公民館の仕事と、労働組合の仕事が混然、一体化しているような中で仕事をしたんですが、そういう点から考えましてね、今、労働組合どうなっているかということですね。私たちが疑問に思うのは。その点もし差し支えなければ皆さん方の市や町の労働組合はどのように仕事として位置づけられているのかちょっと聞いてみたいと思うんですが。差し支えなかったらお願いします。

鈴木 はい、実はですね、恥ずかしながら、一昨年労働組合の青年部の議長をやっておりました。が、青年部のモットーは、学習と交流を持つという事でやっていたんですけど、当時のような踏み込んだ学習だったりとかいうのはなかなかやらずにきてしまった部分もありますし。やってこなかったこともあって、とりあえず青年部のうちは交流をして、つながりを作ろうよとか、そっちの方に力を入れてきたところがあるので、生活に踏み込んだ学習というか、そういった部分には至らなかったというのは、僕の青年部時代にはありました。

望月 松川にも労働組合もあるし、青年部もありますが、活発な活動が行われているかといえば、学習会、無いわけではないんですが、出席者も少ないっていうような学習会が続いております、学習に向く意識が減っているのはあると思います。ネットワーク、人とのつながりがここでも薄れているように感じます。なんというか二言目にはメールで、とか、しゃべって、別にお酒を飲まなくていいんですけどそういうふう集まって話す機会とかは、私が勤めて14年になるんですけど、入ったばかりの頃は「このあとちょっと行く？」なんて乗りがあったんですけど、今は無いなと感じていて、そういうのがあって、問題が出たりとか、労働組合でもこういう学習をしてみようという話になると思うんですが、なかなかそこまでいかないなというところは最近あります。

下岡 私も飯田市という事で、羽場公民館の鈴木さんと同じ立場ではありますが、今のお話を聞いて恥ずかしいんですけど、私も労働組合について何もわからなくて、そうやって自分が分からないところが一番の問題かなと思いました。勉強させていただきます。

安野 そうですね。勉強不足だなと思っていますけど、阿南町も青年部があるんですけど交流という部分が大半を占めていて大きな活動をするというのはあまりない状態です。昔の青年団の人たちが活動していたような話はお聞きするので、またやっていきたいかなと思っています。

松下 阿智は非常に今頑張っているようですが、どうですか？

大石 はい、では突然ですが発言させていただきます。阿智村にも労働組合がありますが、組合全体でいくと活動が低調であまりできていません。ただ、青年部がここ数年元気です。

若い職員が増えてきたという事もある、いろんな学習や交流を新たに、積み重ねてきています。若い人が職場に入ってきたとき、そもそも自治体職員は何をしなければいけないのかとか、地域の住民と共に働くっていうのはどういう事かという事を理解していません。どこかで勉強する場所が必要で、それをする場所が労働組合ではないかというふうに考えています。それを楽しくやっていくにはどうしたらいいかというところで工夫しつつ動き出したのかなと思います。

松下 はい。そういうことと、公民館活動をどのように結び付けて考えている？

大石 似たり寄ったり…。主事っていう立場でいけば、公民館活動の中に職員が参加して来るとか、共にやれる場所の一つが公民館である、という意味で、行政の職員も公民館に来て住民と同じ立場で学べる、ということができることが大事かなと思っています。

松下 非常に積極的に最近平和問題とかいろいろやっているよね？そういったことはこういう村長さんがいたからできたのか…。

大石 平和については住民の中に学びたいという人が多くて、やりたいと言うからやっている、という感じです。

松下 どんどん公民館に要請が来て？

大石 やっぱり 1 回来た時にそこでだめだとか、ちょっと引いた態度を見せればもうその次は二度と来ないと思います。話があった時に「そういう事は大事なんじゃないかな」と、こっちが思って、「じゃ、一緒に考えよう」って言うとその過程の中で、「私たちがこういう事を考えることは大事だ」って住民も思っていくし、そういう中で次の活動が生まれてくるのかなと思います。

松下 関係の持ち方がね、住民との話し合い。主事がこっちばっかでしゃべっちゃって、発言が出てこんていうのは、そんなところはどうか？

望月 そうですね、先程の若者の話だと思うんですけど、一応、どんなことをやってみたいかという投げかけを行うわけなんですよ。その時に早速答えが返ってくることはない、っていう。で「どんなこと、どんなこと？」って聞いていく、っていうのを繰り返していると自分が喋っているのが多いなっていうのを感じて、どうしたら自分のしゃべる割合で減るのかなっていうところが悩みだになって、先程お話ししたところであります。

松下 どういうことをどんなふうに投げかけていたら乗ってきてくれそうかなというのはこちらが地域や住民の人たちの思いや実態を具体的に理解していることによってそういう会話ができるかな、先程の岡庭さんは、例えば家族計画の問題はどうだったとか、嫁舅の問題はどうだったという事を嫁さんや舅さんから聞いていることによってこちらがそういう問いかけや呼びかけをするようになっていったという。それはまあ今とは違うんですけど、そういうふうに考えてみるとまず主事自身が、自分の担当をしている

地域の住民の人たちの多様な思いをどれだけ理解しているか、どれだけそういう点で住民の生々しい声や思いを捉えているのか、捉えられるのか、その辺が非常に大事な抑えどころだという事になっていくんですね。非常に難しいことだと思うんですが。

望月 そう思います。仕事のせいにはしてはいけないんですが、いかに時間を作って、手の届くところじゃないところ、にいかなくてはと感じてはいるんですが、現実なかなかできないところがあって、毎年毎年春先に、地区間の活動には顔を出しましょうという目標を作るんですけど、それがほとんどできていないという現状にあって、だめだなんて自分で思うところがあります。今年こそは、今年こそはって思って、もう、2年、3年と過ぎてきてしまっていて……。なんというか進めないなと思っているところでもあります。

松下 そういう悩みや個々の思いを吐き出したり、討論したりしたのが、昔の主事会なんです。そういう事は今の主事会では可能なのかな、どうですか？

望月 そうですね、今定期的には集まっているんですが、日々の悩みとか打ち明ける場は正直少ないかなと感じております。今後のことについて計画等話し合うところはあるんですけど、形のところを話し合っていて、その余分な部分の話が、その会の中では、少なく、出るとすればその後の飲んで席であったりというのはまあまあ出てくるんですけど、それにとどまってしまって先に進めないなというのがあるので、正直課題に触れる話題は、出せないかなというところがあります。

松下 今は飲みながら議論する時間はないよな。昔はしょっちゅう飲みながら、そういう議論をしたんだが。他にどうですか？他のことに関して。飯田市の主事会はどうですか？

下岡 そうですね。飯田市の主事会では、地区の悩みとかは出たりでなかったりという事であるんですけど、全館共通するような、例えば今お話にあったような住民の声を聞くにはやっぱり自分が公民館に留まっているだけではなくて、飯田市でいえば分館とか、自分の公民館だけではなくてさらにその下の一番住民の拠りどころとなる分館活動に顔を出して話を聞くことが一番住民の声を聞くことにつながるのかなと思いますけど、飯田市の主事会として、そういった話し合いをしているわけではないので、先程鈴木さんが言った、社会的な問題とかを話し合う場でもいいですし、そういった地域住民の声を聞くにはといったそういった話し合いでもいいですし、どんどん主事会で話す事が大事なかなと思いました。

手塚 松本の手塚です。4つの顔と言いましたが、3つの顔です。さっき話を聞いてたら、岡庭さん、まず、阿智村の農民だとか、それから青年部の活動をした、住民である、それから自治体労働者である。公民館主事の辞令は村民がくれたってさっき言ってたけど、公民館主事だったと。岡庭さんの話を聞いて、あ、3つの顔だなと。岡庭さんが示してくれたんだと。飯田市下伊那、っていうと長野県の中で3大過疎地って言われるほどの過疎地ですよ。年寄りいっぱいいますよね。今年寄りの問題っていうとね、例えば介護保険ですよ。今年度から介護保険がめちゃくちゃになってきて、頭にきている年寄りいっぱいいるんですよ。要支援の人は、介護サービスから外しちゃう、ってい

うからね。それから今度、所得のある人は介護保険自己負担2割ですとか、特別養護老人ホームには要介護3以上の人しか入れないとかね、それからね、9月からね、とんでもないことだけれど、低所得で、特別養護老人ホームに入っていて、今まで食費やベッド代はかなり減免していたけど、ただ所得が低いだけじゃなくて、資産をどれくらい持っているかと、それを調べ直して、あなたの持っている貯金通帳の写しをみんな持ってきたさいとやって、結構混乱しているんですよ。

例えば主事会で飯田市の介護保険今どうなっているとか、それから飯田市の介護保険の特別会計は、一体どうなっているとか、そういうことを松川町、阿南町でもそうですけど、話し合う機会はなかったか、話し合ってきたかな？私は、介護保険のことを主事がちゃんと勉強するとね、とたんに地域の年寄りの顔や悩みがねそれから今どうやって生きているかがパーっと見えてくると思うんです。主事会でそういう事をみんなで学習したり、地区で話し合ったりしたことがあるかという事ともう一つ、松本の年寄りと話をしていて、今の介護保険とそれから戦争体験、これでもうわんわんになってくるんですよ。それで、例えば、阿南町は下条村のね、佐々木さんという戦前から戦後にかけての村長さん、満蒙開拓に一人も送らなかったんですよ。例えばそういう事をもとにして、阿南町で、佐々木村長のやってきた事がどういうふうに語り伝えられているか、みんなの共有とね、村民の、若い人も含めて。ちょっとその2つのことをどなたでもいいから・・・。

松下 ひつつお聞きしていいですか？

手塚さんが、その人の、住民の顔を見ただけで、声やら思いが浮かんでくる、そういうふうに、住民を掴む、理解できたのはどういう場面で、どんなふうにして掴んできたのか。

手塚 だから今言ったように、わが町の介護保険はどうなっているか、っていう事を主事があるのしっかり学ぶとね、年寄りの顔が見えてくる、生活が見えてくる。

松下 見る視点が据わってくる？どういうふうに見たらいいかと、聞いたらいいかと。そういう見たり聞いたりする視点をしっかり自分が持つ。そのことによって実体が見えてくる。その基礎学習が必要だ。ということにもなります。

手塚 介護保険で行政のよその分野の話だって、公民館主事はあまり関心がない。実際にはね。松本もそうかな？是非そういうことを下伊那の50年後の公民館主事に期待。

松下 そういう基礎学習の場をどんどん作って・・・。他にはどうでしょう？あ、どうぞ。

T 私は一般住民というか、飯田市民ですけども。ちょっと意見というか思いというか。今政治的な事に関して、やっぱり行政の方で縛りが大きいと。ご苦労されているという事を今日知って、あ、そうなんだと思っているんですが、公民館主事でないと住民が知っていなければいけない経過も含めて、必要だと思うんですよ。それって、公民館主事の方で線を引いちゃって、これは難しいから住民の人は、拒否反応を起こすとか、そういうことをしちゃうと、本当に必要な事って伝わらないと思うんですよ。そういう事

って住民をなめちゃいけないというか、知るべきこといっぱいあるのに、そういう機会がないっていう現状、そういうことって、本当にして欲しいと思っていて、自治体ってなんで自治体かって、自治が自治体だと思うんですよ。そういう本来は意味っていうか、意義っていうかをもう一回再確認するっていうか、憲法99条に必ず、宣誓のサインをすることになっているんですから、もっともっと関心を持って行動を起こしていきたいなと思います。以上です。

松下 なるほど。最後に……。中国の方の問題が出たわけですね、氏原さんどうですか？今まで関係を進めてきて。言葉の問題とかこれから学習を進めていく場合に。何かコメントがあったら。

氏原 飯田市の公民館でこの4月からお世話になっている、氏原と申します。突然に困りました。今の主事会の話でいくと、前の職場が、多文化共生係という事で、ここに住んでいらっしゃる外国人の方々の生活を支えるような仕事をしていたんですが、その前に4年間公民館で主事をやらせていただいて、その時に主事会の中で、ここに住んでいる外国人の方々の現状みたいなものを担当の方から話を聞く機会があったり、それから実際に中国の帰国者の方や外国人の方から、今の暮らしについて話を聞くような研修会を主事会でやりました。

その時に、ああやっぱりこういう事って大事だし、自分の地域、丸山っていう地域なんですけど、そこに「どんな外国人の方が住んでいるのかな」という事をそのとき初めて気づいて、実際に丸山小学校の子供たちの中に、フィリピンの子や中国の子がたくさんいることがわかりました。小学校に行って、どんな生活をして、どんなことに困っているか、とか見聞きすると、子供たちは日本語をなかなか習得できないので学力が定着しないんですよね。小学校できちんと日本語ができないまま中学校へ行くと、ますます差が開いて、高校進学が果たせない子がたくさんいました。そんなことを主事会の研修会の中で把握した事がありました。

中国の帰国者のことについては、先ほど下岡主事が松尾の公民館で取り組みたいという話をされたんですけど、松尾の常盤台というところに市営住宅があって、そこは、中国帰国者の方々、それからその2世さん、3世さん、そして今は小学校の4世さんまでいて、その松尾小学校の子供達の対応もありますし、帰国者の方、ご本人は比較的日本語ができるんですが、2世、3世の方は、だいたい40代、50代で日本に帰国している方が多いので、その時点で日本語を勉強するのは難しいし、そのため就労ができない、という方がたくさんいらっしゃいます。

その就労支援みたいなものもいろんな関係部署をやったりもしているんですが、なかなか果たせずに、結局いずれは生活保護を受けるしかないだろうという社会的な課題もこれからますます増えてくる気がします。なので、そういったこともこれから公民館の中で、身近な生活の中で、一番課題になっているのは言葉の問題、コミュニケーションが取れなくて、ごみの問題とか、外国人の方の就労の問題。それを公民館主事として、理解しながら、状況を把握しながらその地域に住んでいらっしゃる日本人の方とどうやって共生していったらいいかというところを考えていくってことが大事かなと思っています。

松下 ありがとうございました。ちょうど時間がききましたので、この辺で、と思いますが、言い足りなかった方は？じゃあ予定の時間が参りましたので、これで終わりにしたいと思います。どうも4人の方ありがとうございました。

総括講演 地域に向き合う主事の学びと働き～下伊那テーゼ作成過程から現代へ～

「下伊那テーゼ ― 50年のいま、その実践理念をどう生かすか」

講師 島田修一（中央大学名誉教授・元喬木村社会教育主事）

思い返すと 50 年前、私がこの下伊那テーゼ作成に関わったのは 29 歳の時でした。ですからどうしても若書きといえますか逸る所が多くて、物議をかもしたところがあったかと思います。先ほどの岡庭さんと石井山さんの対談のなかでも明らかになったように、私たちなりの気負いというものがこのテーゼを貫いており、その気負いというその若さが今にきっと生命を保たせる元になっているのではないかと思います。今日はうれしいことに、ここに私が 1959 年喬木村に赴任した当時からのつきあいのある喬木村から 3 人の親しい仲間が来てくれています。そういうつきあいが今だに続いていることをうれしく思います。

喬木村に赴任して

当時と今とが時代状況がなんと良く似ていることか、今戦争がいつ起こるかもしれない、いつ引き込まれるかもしれないという危機的な状況に置かれています。似ているというのは、当時は安保改定が行われた 1960 年の時期でした。私は 59 年に東京を離れましたので実際に闘争は体験しておりませんが、しかし村の青年団の仲間は、今日出席された方はご存知だと思いますが、「おら国会へ行けっていわれているけど田植えがまだでなあ」というと、「ああ、それはおらたちが田植えやってやるで、おめえ行ってこい」と青年団の代表が国会に送り込まれたような意気込みをもっていました。実際に安保条約を農村の青年たちと読み合いました。とくに青年たちにショックを与え、そして農民たちに怒りを招いたのは、その第 2 条―経済協力条項でした。これではまたアメリカの農産物を押し付けられるのではないかと。この時期に私は村に赴任したのですが、その後に村を襲ったのが、農業構造改善事業であり固定資産税の評価替えの問題でした。そこで、ここにおいで桐生純治さんと一緒に農業問題研究会を立ち上げて『考える農民』という冊子を作り、その問題を村の人たちに訴えたのです。

私が村に赴任した経緯はこうです。下伊那農業高等学校喬木村分校は明治の時期に作られた乙種の農業学校なのですが、そこはたくさんの精農家を育てたなかなかの学校でした。これが戦後教育改革のなかで下伊那定時制高校の喬木分校になって、そこで学ぶ青年たちがいっぱいいて、先輩である精農たちは自分たちの後継ぎがここから育ってくるということに期待をにかけていたのですが、教育行政の合理化のもとそれが強引に廃校されることになり、その反対運動もつぶされたあと、村の人たちはどうしようかと考えた挙句、公民館に付属する青年学級をつくろう、ということになりました。当時私の先輩の千野さんが主事として活躍していたという噂を聞いた村の人たちが、「じゃあ俺たちがつくる青年学級に青年の主事が誰か来てくれないか」と私の研究室に要請がありましたので、私は農業のことなど何も知らないままにそういう熱意に押されて飛び込んでいったわけです。夏休みに村を回りましたら、桐生さんたちが自分たちの手で青年学級をつくろうと頑張っていました。村の多くの人たちは、「今度来てくれる主事さんが村を訪ねてくれたぞ」と、夏休みの時から、今で言えば就活で私は覗きに行ってみようと思ったのですがすぐに虜になりまして、そこに就職したわけです。安保で岸内閣が総退陣した後、所得倍增計画を掲げて登場したのが池田内閣ですが、いま「政治では批判を受けたら経済で」と国民の目をごまかそうとしている状況はよく似ています。私はその時期に、多くの青年たちと一緒に勉強し、実践をしながら 11 年の歳月が流れました。その後、やむなく出

身の大学に戻らざるを得ない状況になりますが、そのいきさつは資料の26頁に書いてあります。しかし、私は無事な日々を過ごしたわけではありません。その間、国家権力の意を受けた村の政治権力という刀で傷つけられているのです。不当な配置換えを受けて4年も職を追われます。それをはねのけるため、桐生さんたちが立ち上がって配転撤回闘争に取り組んでくれて、5年目に村の教育委員会が「前の教育委員会が出した辞令はまちがっており、あなたは社会教育主事でなかった期間をございせん」という結論で和解に応じ円満に現職復帰したのです。それは村をあげての大変な戦いでした。私は正義は自分たちの側にあると気楽に戦ったけどその運動に参加した村の青年たちあるいは農民たちあるいは婦人たちは村の古い勢力からずいぶん痛めつけられて、大変な傷を負ったと思います。しかしそれにもめげず見事にたたかってくれました。その時私は心の底から深く感謝したのですが、村の青年がこういいました。「おらたちはな、島田さんのためにたたかってんじゃねえ、おらたちのためにたたかったんだ」「おらたちが自由に勉強する青年学級がつぶされちゃったらたまらねえんだ」ということで「勝ったのは自分たちだ」と言うのです。これが村のいろいろな民主化運動につながりました。この村の民主化運動がどんなものであったかということについては桐生さんが以前に『月刊社会教育』に書いています。「村政民主化運動として勝利した喬木村不当配転撤回運動の記録」は92年の8月号に載っていますのでお読みください。

歴史と民衆に学んだ社会教育実践の視座

そういうなかで村の人たちに育てられてきた私は、この下伊那テーゼを仲間と一緒に書いたのです。レジュメの4の(2)のことをお話したいと思います。しかしその前に4の(1)の私の下伊那テーゼ実践、私はどんな学びをしたかということをごく簡単に申し上げたいと思います。ここでは生意気にも「農民知」と書きましたが、農民が長い歴史のなかで育み築いてきた農民ならではの知恵・勇気・迫力、こういうものを学びました。当時、村に所得倍増計画の一環ですが総合開発の話、農村には安い水と安い土地と安い労働力があるといって工場誘致をはじめとする開発が襲ってきたわけです。県の主導で進められたその小渋川総合開発計画は、農民たちがもともと持っていた水利権を出せと、その上で自由な開発を行いたいという代物でした。水利権取り上げ計画を内に含んだ開発計画の説明会が部落ごとに行われたのですが、その時に最初の地区だったと思いますが、県の責任者の説明が終わって役場の職員が「まあ、みなさんわかったと思うのでここにハンコを押してください」(その会合はハンコを持って集まってくれという説明会でしたが、)と言ったら一人の農民が素っ頓狂な声で「おらハンコを忘れっちまった、今日要るのかや、なあみんな。」と発言したということです。これで出席したものはみなピーンと来るんですね。「めったものにハンコを押すな」と。他の農民が二の手を打つわけです。「ああ、おらも忘れっちまった、今日要るとは知らなんだなあ」、そうよ、そうよというわけで、みんながハンコを忘れたふりをして誰も押さなかったのです。そしてこんな話がこの部落にあったぞ、その噂が伝わって全村的にどんどん広がって、とうとう長い時間がかかりましたが、農民闘争として大きく展開していったのです。これは長野県の『農業農民問題研究会』の機関誌にも載っておりますけれども、この結果県の計画は大きく後退することになりました。

そのほかにもあります。桐生さんは当時、産業課の技術指導員でしたが、桐生さんも含め、農協の指導員や相談員、農業改良普及員や生活改良普及員に村の保健婦さんも加えた社会教育研究会をやり、その時間は公務で集まりました。この時に私は生意気にも農協資料の分析をして、農民の生活は7年間に耕運機が7倍に増えているけれど借金も7倍に増えているということを報告したのですが、その時保健婦さんが、「島田さんな、苦しいというのは農家の経済だけ

じゃない。農家の嫁さんたちに今流産が増えていること知っとるかな」といいました。河岸段丘の上の段から桑を切り取ってそれを籠に積んで下まで降りてくる重い労働が、農道が整備され、耕運機が普及して何が起こったか。耕運機の後ろにつけたリヤカーに桑を山ほど積むわけですから、これはもうとても便利になったわけですが、この九十九折れの農道を耕運機で下ってくる長い時間続く微振動、これが妊娠中の女性に大変な影響を与え、流産が増えるのです。「このこと知っとるかな」と言われたのです。こんな若い公民館主事に、流産の話をしてくれるヨメさんはいません。やっぱり保健婦さんでなければつかめない事実だったわけです。

青年学級にやってくる中卒青年は、中学時代にいわゆる「お客様扱い」で傷つき、就職した先では左官や大工のおやじさんからしごかれたり、あるいは近所の凍り豆腐の工場では辛い労働を強いられつらい思いをしていました。夜な夜な集まってくる集いが楽しくて、そこでは以前と違って自分をごく当たり前の人間として遇してくれる青年学級という学び舎がある。そこで話しあいをしたり、愚痴を言いあったりができるのです。その記録を私がガリ版で切って文集にすると、「ああ俺が発言したことが印刷されている」と喜んだりしていました。「近いうちに文化祭があるけれど、俺たちで劇やらないか」といったら、人前で顔見せるのは恥ずかしいけれども人形劇ならやるということになったわけです。その時に一緒に働いていた小原さんという公民館主事は画家でもありました。この人は非常に優れた絵描きでお弟子さんたちも後にたくさん生まれてくるのですが、当時は教員をやりながら絵を描いていた文化人で公民館主事に登用されていたのです。その人が青年たちと話しあい、人形の頭づくりや背景を描く指導をする中で青年たちは自分の能力に目覚めてくるわけです。文化祭は大好評でしたが、大変辛い話ですが、それを見に来ていた中学校の先生が私のすぐ側で、「あの連中がこんなことができるのかい、おらびっくりした」と言ったのです。私は「冗談じゃない」と、本当は殴りたいほどの怒りを感じました。「あの子たちの持っている可能性を見つけられなかったのはあなたじゃないか」と。そういう経験をして数年が過ぎて行くわけです。

学びを創るということ

そして50年経った今、先ほど大変誠実なとてもいい実践報告をしてくれた人たち、それから社会教育の歴史や理論についての研究を深めている人たち、そういう人たちの前で私は何を話したらいいのか、ずっと悩んでいたのですが、でもこの4の(2)に書いてあることを言わせてください。

私は学習、「学び」というものは、学ぶ人がつくるものだと思っています。これはさっき石井山さんも言われていたことと通じるのですが。何か用意された情報を知るとか、何か人の意見を聞くとか、それは学びではない。学びというのはそんな受動的なものではない。自分にとって必要なものを「考える力をわがものとする」のが学びではないか。だから学びというのは、学ぶ人間が別にいるのではなくて自分を教育し高める自分がいること。だから学習主体ということばを使うけれど、学習主体は自立性を持ってというけれどもそれは自己教育主体でなければいけないので、「学習主体から教育主体へ」、「学びの受け手から学びのつくり手へ」とうことを言ってきたわけです。それからもうひとつあります。権力からあるいは役場の偉い衆からいろいろ言われたら困るが、その時どういう心がまえで、どういう思想で対応するか、ということです。確かに今の公民館の体制は公的な機関ですから公務としての制約がある。法律的な制約あるいは権力関係上の制約がある。だけど私たち下伊那テーゼをつくった仲間はその「公」とは何か、この「公」は国民に奉仕するという意味で「おおやけ」の性格を持っているという「公」なのだ。だから誇りをもって胸を張って言える「公」なのである。だから「公」

というのは権力の僕（しもべ）ではいけないということを確認し合ってきました。

私は常々<「民」が「公」を取り巻いて「共」をつくる>、こういうことを言ってきたのです。「公」というのは「民」が取り巻いて民衆の力が本物の「公」にしていくものだと、本物の「公」というのはみんなが力を出し合って新しいものをつくっていくという「共」であると。誤解して民主党が公明党を取り巻くと共産党になると読まないでください。しかし、これが「公の本質」ではないかということのをたえず言っているわけです。

それではみんなこぞって自分の学びの主人公になれるのかというとなかなかそうはなれない。学びをつくる力というのはひとりでは育ってくるものではない。お前の意見は通らないと言われて、学びをつくるどころか、既成のものに従わされるようななかで、俺はこう考えるというような力を生みだせるのはやはり仲間がいてこそであり、一緒に何かをつくりだそうという「自治」の精神に貫かれた仲間であってこそ学びがつかれるのではないか。だから公民館も「自治の拠点」なのです。自治体も「自治の拠点」です。本来ならば国も国民の「自治の拠点」でなければならぬが、これは大変難しい状況にありますね。でも少なくとも自治体を「自治の拠点」として作り上げる努力のなかで「真の学び」を生み出していかうではないか、こういうことを言ってきたのです。

何に向けての学びか

学びの実践というものを安易に考えるのはやめよう、要求があるから学習するというだけでは駄目である。あれを学習したいこれを学習したいと言いだせばきりがなく、ちょっときつい話だけれども「、要求」をその人が本当に「必要」としているものなのかどうか、必要事なのか現象的な要求なのかを確かめ、客観的に見てこれがどうしても大事だという必要事を見据えていくことが大切です。流産の話聞いてショックを受けた若き公民館主事の私は、もう1人の仲間と相談して農村婦人の健康調査をしなければいけないと考えていました。当時千葉大学の農村医学研究所が阿南町に駐在しており、ある部落の農家の主婦の悉皆調査をするという話を聞いて、そこに出かけて協力をお願いしてその調査結果を公民館報に載せて配りました。「農家の主婦は疲れている」という見出しで「田植えと養蚕の時期が重なる時は育児に27分しかかけられない」というような実態を伝えました。これを読んだ村の婦人が「わしとって」といったのです。この方言は「一体」、「同じ」という意味ですね。ここから村の健康学習がはじまりました。それから村の赤字がどんなものかということをおくわしく書いたら、村長に「これは配布停止だ」といわれましたが、そのときに新聞部（公民館の専門部）にはなかなか優れた人間がいて、「これは言論の自由の弾圧だ」なんていう意見が出てくるわけです。配ってしまうとまた摩擦が起きるから、しばらく様子見しようと言って、何か月か経ってから配ったらうまく配れたのです。それは全面的なたたかいではなかったのですが。それからもうひとつ、ここには「6時間働いて80円」というタイトルが載っていますが、これは村の『内職白書』です。すなわち開発事業で安い賃金で働かせる工場が村にやって来る。大水害で田畑の復旧に大変なお金がかかり大きな借金を抱えている農家としてはやりきれない。とうとう農家の主婦までも内職をせざるを得なくなったのです。そこで内職の賃金がどれだけか、と調べたら元受けから、「賃金の実態を公民館報で公表されたら困る」と文句を言われたが、この記事のおかげで、「そうか、みんなもこんなに苦しいことをしているのか」ということがわかってくるのです。そうすると、「賃金が安いからもうちょっと上げてくれないか」という要求レベルから、「じゃあみんなこの実態を調べて、村の手伝いも場合によっては必要かもしれないが、なんとかみんなの力で交渉しなければならないのではないか」と意見が出てきます。この「農家の主婦は疲れ

ている」という場合でも、「これは病院に行けばいいという問題じゃないんだ」「病院に行ったらお金がかかるんだ」と、保険料の高さから医療費から、子どもを放っておけない保育所のない問題など、ああでもないこうでもないと話していると、学びたいことやりたいことがどんどんでてくる。こうして「健康保険料は村で決められるんだったらもう少し安くしてもらわなければ困る」というふうに皆の「要求」が皆にとっての「必要」に変わってくるわけですね。

「必要」を共通に認識したときにそれは地域の学習課題になるわけなのです。

こうしていろいろ勉強しながら段々に私も生意気な論を吐くようになります。なるほど必要なことをみんなで学ぶことは大事だけれども、学んでそれからどうなるのか、何かをめざして学ぶのではないか、いつも学びにはめざすものを据えようではないか、村でそんな生意気なことを言ったわけではないのですが、のちに村を離れて、すでにいろんな勉強をしている研究者の後を追いつながら社会教育理論というものを勉強し始める中で掴んできたことなのです。学びというのは常に「何に向けての学びか」を問う。こういう学習論でなければ単なる学習という操作の理論になってしまうのではないか。それから今も話題になっていますが、地方創生というが、「地方」という言葉もさんざん批判されてきた言葉です。中央があり地方があるという捉え方がおかしいので、その地方をこれからつくろうなんていうのは変な話です。地域はそれぞれに独立した存在です。私たちは「地域をつくる」ということを考える時に、地域とは何かというと、単に地理的なものではなく、人間がつくっている地域です。そうすると「地域をつくる」ということは、地域を構成している人々がお互いに育ちあって、賢くなって豊かになっていく、そういう人間が地域に育ってこなければ「地域づくり」とは言えないでしょう。「地域づくり」とは人間が育つこと、その人間が育つような社会状況、地域状況をつくること、これが「地域をつくる」ことではないか。と、私なりに大事なことを提起しているつもりですが、それができたのも農業のこともろくに知らない青年を同じ仲間として支え励ましてくれた公民館主事会の仲間がいてその中で育てられたからです。

主事仲間と鍛え合った社会教育実践

ところで私が村を出て東京に行った時に実は大変なカルチャーショックを受けました。ある公民館の主事が「この間うちの公民館報で婦人学級を開くと募集したら、その日の内に電話申し込みで定員30人がいっぱいになって」と得意げに話すのをみて、「なんだこれは」と思いました。主事が題材を決めて希望者集めていっぱいになったから、何か実践しているつもりでいる。そのことに腹が立ってきたのです。主事はどれだけ地域をまわっているのか、その地域にはどんな問題があり、どんなふうにそれに悩み、しかしそれが人に語れずにいる人はどうしているのか、そんな母ちゃんたちが何人ぐらいいるのか、こういうことを調べないで何が婦人学級かと思って少々あきれてしまいました。

東京の西部で新しい開発が始まったとき、公民館の場、社会教育の場、研究の場それぞれでそれを考えよう、皆で見に行こうと母親運動に取り組んでいるある婦人が提案したら、少なくとも公民館主事が、忙しくてそんな時間がないというのです。冗談じゃない、どんなに忙しくてもいま地域がどんなに変わろうとしているか、どんな資本が入りどんな工場や住宅を建てようとしているか、その時、土地を持っていた人はどれぐらい買ったたかれて、どんな暮らしに就こうとしているのか、こういうことを調べないで何が社会教育実践かという批判をその当時強くもちました。

社会教育というのは「学びづくり」なんです。「学ぶ人間をつくる仕事」なのです。事業づくりではないのです。こういう事業をやります、こういう事業をやってそれでおしまい、という

のではない。さっき現場の職員の人がいいろいろ報告しました。その人に喧嘩を打っているわけではありませんが、事業を通してそこに参加した人たちがどう育つかということに期待をかけて事業をやっているのだろうか。それが社会教育なのです。「30人集まった婦人学級を何回開きました。それで終わり」というのは事業主義です。まだまだ社会教育というと、そういう住民の学習文化的事業を行う計画を立てるのが社会教育職員の仕事、公民館職員の仕事だととらえるのは間違いです。

では今言ったような「学ぶ人間」、「自分自身の学びをつくる主人公」というのは公民館だけでできるのかということそうではありません。私はこのレジュメの3のところに書きましたが、私が付き合うことができた公民館主事仲間は、多くそのことをとらえていました。例えばさっきコーディネートをされた松川町の松下さんは健康学習の実践で日本中で有名ですが、私よりも何年も前に生田地区で青年学級をひらいて、青年たちの抱えている悩みを率直に出しあえるような話し合い学習、生活記録学習を積み重ねてきていました。学習が承り学習ではなく自分の悩みや問題を掘みだすいとなみにほかならないということをやっていました。飯田市上久堅の長谷部さんは上久堅村の時代から私が仲間に入れてもらった主事会の重要な構成員ですが、彼は一貫して農民主体の地域づくりをしています。機会がありましたら『上久堅住民自治の歩み』を読んでみてください。これは彼が編集したのですが、これを読むと面白い話があります。ブルーベリーの生産が大変値がいいというので農協が勧めた。ところが出荷時期が遅れるともう値が付かないというのでもう買い取らない。買い取っても安い値段で箱代にもならない。この時に農民たちは何を考えたかということ、それでワインをつくったのです。東京の知り合いのソムリエの指導を受けて実にみごとなワインをつくり、これは大変評判になった。そして今まで見向きもしなかった村の酒屋が店で売らせてくれと言った時に、はじめコキおろしていた「あの酒屋にはおろすな」と言って農民の誇りを高めたとか。それから飯田市の酒屋が、「上久堅ワイン」じゃもったいない、「飯田ワイン」にしてくれと言ってきたときも断ったのです。俺たちが作ったのだ、「上久堅ワイン」でいいじゃないか。生産地は長野県飯田市上久堅でちゃんと「飯田」の名もついているしと言って、農民の心意気を示し、誇りを引き出すのです。

それから阿智村はいまや有名な岡庭村長ですが、一貫して地域自治、地域自立ということを言っています。自治体が自立しなければだめだということです。人間が学びによって自立するのと同じように、地域が自立するには学びが必要だというわけです。その次にあげているのは、私たちの村で、桐生さんたちが中心になって職員組合活動に取り組んでいましたが、職員組合は、「お前たちの給料いいなあ」「農民の所得はろくにないよ」と村の人たちに言われっぱなしでいいのかということで地域の実態を調査しました。その中で自分たちの低賃金体制と農民たちの所得の低さが深く結びついているのだということを勉強していくわけです。こういう職員組合づくりをして、ついに圧倒的多数を占めていた若い臨時雇い職員やPTA雇用の給食調理員のおばさんや学校の用務員の人たちも含めて正職員化を成功させたわけです。その当時桐生さんは書記長で、自治研活動も発展し、さっき紹介した村の民主化闘争として位置づく配転闘争もやりましたが、こういう実績が買われて、なんと桐生さんは収入役になり、助役になるのです。権力機関に入るのですが、それは弾圧の権力機関じゃありません。当時村長になった人は非常に人望があって、職員組合の委員長をやっていた人物です。この人が村長に当選したら書記長をやっていた人が収入役、助役になる。こうして村の産業振興を軸とした村づくりが始まるわけです。

住民に学んで自らを育てる－住民と職員の相互の高めあいを

残された時間では、とても下伊那テーゼの内容にまで入れませんが、下伊那テーゼをつくった当時の人間というのはこのような形で地域の実態を地域の一人として調べて、そこに問題を発見し、それを地域の人と一緒に考えあって、そして要求を必要に高める学習をすすめる、そういう努力をしていったわけです。

大阪枚方市でつくられた「枚方テーゼ」は本質論、のちに東京三多摩地区でつくられた「三多摩テーゼ」は施設論、そして「下伊那テーゼ」は職員論、これはまったく形式的な不勉強な社会教育学者の分類であり、私たちは下伊那テーゼは職員論に限定してはいけない、あれは社会教育実践論だと言っています。そしてほかならぬあるべき姿を描いた公民館論だとも言っています。そこでレジュメの1番目の見出しのように、これは「社会教育実践論」であるが、しかしこれは「中間総括」であり、これから何をやらなくてはいいかということを考えることが必要ですが、レジュメの1の(2)の③を話させてください。このような公民館づくりをめざしながら同時に地域に一層幅広い人が参加する多様な学習文化活動に取り組んでいったのです。社会教育とか公民館とかに限らない、先ほど介護問題や平和の問題が出ましたが、地域の人びとが抱えているいろいろな問題をめぐる多様な学習文化運動を地域につくっていく、そのなかのひとつとして公民館がある。地域の人たちがこんなことで一所懸命勉強している、だからその問題を取り上げようというのはあたりまえです。それは、公民館活動を安定的に発展させる前提でもあるし、また公民館というものの位置づけを考えた時の原則論でもあるのです。すなわち地域に住む人びとが自分たちの抱えている問題を掘り下げてそれを学ぶ、そういう活動を組み立てていくということを大事にする、それを公的に保障できる形で据えていくのが公民館であるわけです。しかしその公的な仕組みが歪んでこんなことは勉強するなとか、これはやりすぎだとなったときに、「民」が取り巻いているかどうか問われるわけです。「そんなことを言っているのですか村長、みんながやりたいといった勉強はやらせましょうよ」、こういうふうに組み立てていくのが公民館ではないでしょうか。今流行っている「地域づくり」は、何かあまり勉強も深めないうちにみんなが仲良くすることが大事ですといっているように見えますが、みんなが「仲良く」しているうちに戦争法が通ってしまうのでは困るわけです。予定調和的な地域づくり論に公民館は与（くみ）する必要はない。公民館という施設が立派にできさえすればそこにいつでもだれもがやってきてからいろいろな学習活動が始まるのだなんていう楽観的な施設論にとどめてしまってはだめです。そこにたえず問題を見つけ出し考え合う、そういう住民が育ってこないとはだめなのである。そして、それに協力する職員が人びとから求められ、その職員は社会教育主事といわれたり、公民館主事といわれたりしますが、そういう社会教育職員に必要なのは常々地域住民がどんなふうに学習して自分を豊かに育てているか、その住民の育ちから学ぶことです。こういう働きかけをすれば、住民が豊かな人間に育っていくし、こういう援助をすればいい結果が得られるということを住民から学ばなければいけないのです。住民に教えるという姿勢は絶対にとってはいけません。住民に学びながら住民に尽くす。住民はまた自分の学びを豊かにしながら職員を鍛える、この住民と職員との相互の高めあい、これが先ほど言った「人間発達」にもかかわるわけで、そういうものを社会教育は求めているのではない。繰り返しますが、住民の生活、生産、福祉、平和、いろんな問題をめぐって、それらに真剣に取り組む人たちの学びをいっそう豊かにする中で公民館もまた安定した姿で発展をしていくことができるのではないかと考えるわけです。

社会教育というのはそう考えると、学校教育とは別ではないのです。学校教育を良くする力を持っているわけです。みんながそういうふうに学んで世の中を良くする必要がある、だから

子どもたちにもこう育ってほしいと国民が考えることで教師をゆさぶっていかねばいけないのです。文科省をゆさぶっていかねばいけない。そういう思いを込めて私は、社会教育の「再定位」、すなわち社会教育の機能の捉えなおしを主張しているわけです。それは人びとの「学び」のあり方を、社会教育の世界だけで論じないで学校教育も視野に入れて考えようじゃないかということなのであります。

私が下伊那テーゼと一緒に学びながら学んだこと、学んだおかげでもう 2 か月すると 80 歳ですが、ようよう 80 までがんばれたのだ、という話をこれで終わりにしたいと思います。

なお、私がラストメッセージとして 2 年前に出した『社会教育の再定位をめざして』（国土社）に目を通していただけるとうれしいです。

下伊那テーゼー50年のいま、その実践理念をどう生かすか（フォーラム当日資料）

島田修一（元喬木村社会教育主事・中央大学名誉教授）

下伊那テーゼは職員論ではない、公民館論であり社会教育実践論である

私たちが1965年に発表した「公民館主事の性格と役割」は、自治体の社会教育のあるべき姿を追い、その中で公民館の基本機能を確認する中で公民館主事はどのような社会教育実践を担うべきかを考えて提起したものである。その際、公民館主事が、住民の生活と権利を守ることを本来的な機能とする自治体に働く職員であることの自覚に立つ「自治体教育労働者」性強調したことから、広い論議を呼んだ、しかし、下伊那テーゼ全体を「社会教育職員論」とするのは当たらない。のちに、＜3つのテーゼ＞という形で枚方テーゼ＝本質論、三多摩テーゼ＝施設論という形式的な性格づけがなされたことが影響している。

1. 下伊那テーゼは、私たちの実践のいわば中間総括であった

（1）下伊那主事会はそれぞれの主事たちの実践を不断に検討し合う学習会を重ねた

財政困難を抱え職員体制も貧弱なままの公民館活動は、各集落に出かけていっての小規模な話し合い学習が主で、古さと貧しさに苦しむ生活の実際を語り合いその解決を考えようとするものが多く、家庭生活、地域環境、村政や農協等の社会問題や政治問題にも及んでいく。やがて話し合いだけでなく生活記録や文集づくりに進む例も増え、健康、子どもの教育、女性のあゆみ、村の歴史や日本の政治等の系統的な学習も取り組まれていく。

（2）「中間総括」であると同時に積極的な提言でもあった

こうした実践は主事自身の学習の一層の必要性を自覚させ教育事務所の支援を受けた定例学習会や独自の研究事業のころみ（農民大学、『月刊』セナール）などで力をつけ町村の実践を豊かにしていった。下伊那テーゼはその中間的な総括に基づく提案なのである。

- ① 公民館の基本機能は住民自らが生活現実を切り拓く力を身につける学習活動を生み出すところにあり、職員は自治体労働者の自覚を持って住民と協力してその課題に取り組む
- ② 職員は、社会科学の学習を通して生活現実の認識を確かなものにし、教育学の学習を通して住民の間に生活現実を切り拓く主体的な学習活動が育つような援助に取り組む
- ③ このような公民館づくりをめざしながら、同時に地域に一層幅広い人びとが参加する多様な学習文化活動が育つことに取り組み、それを公民館発展の条件として生かしていく

2. それは、予定調和的な地域づくり論でも、学習内容に立ち入らない条件整備論でもない、学びづくりの公民館論である。

- ① 公民館の初心とされるいわゆる「寺中構想」も学習文化活動の自由な発展の場づくりをめざす条件整備論も、眼前にある生活現実の矛盾の解決に迫る、人びとの人間発達を含めた学習活動の意義を位置づけていない。旧教育基本法2,7条と旧社会教育法3条に立つ教育の目的とその実現をめざす学習をすすめることを実践課題とする公民館論である。
- ② いわば、創りつづけ発展させつづけなければならない公民館論の提起であり、公民館職員が常に立ち返って自らの実践課題を確認合うことを求めるものである。「条件整備論」はしばしば「社会教育実践論」を「社会教育事業論」に矮小化させてしまう。

3. それはどのような展開と継承を見せていったか ー数々の実践と“理論”に学ぶ

- ① 松川町（松下 拡）：青年学級・健康学習実践、『住民の学習と公民館』等の著作活動

- ②上久堅(長谷部三弘)：農民主体の村づくり、『風土舎通信』・『上久堅住民自治のあゆみ』
- ③阿智村(岡庭一雄)：自治体自立の村政づくり、共著『協働がひらく村の未来』
- ④喬木村(島田)：配転撤回・村政民主化運動、合併阻止運動、地域おこし「楽珍館」を生むなどの事例から、どのような実践と“理論”が創造されていったかが確かめられる

4. 私の下伊那テーゼ実践の考察 — “学びを創る”が研究と運動を貫くテーマとなる

(1) 社会教育実践を通して学んだこと

- ①「農民知」との出会いが、＜民衆に学ぶ＞＜歴史に学ぶ＞実践姿勢を育てた
 - ・「俺アハンコ忘れた」という開発推進行政への対応、→農業問題学習への取り組み
- ② 中卒青年の学習意欲の歪みからの解放—青年学級での経験から教育学を学び直す
 - ・教育とは、自尊意識と自己発達力をわがものにするとのみ
 - ・学びとは知識や情報の受容ではなく、認識を確かなものにし思考を深めるもの
- ③ 社会教育の本質と課題のとらえ直しに迫られる —教育総体の中での位置づけの視点
 - ・その本質は「自己教育活動の組織化」 —それが教育総体の再編成の軸という確信

(2) 50年のあゆみの中で提起しつつづけていること(『月刊社会教育』、その他の著作参照)

◇学びを創るという課題提起

- ① 学習主体から教育主体へ —学びの受け手から学びの創り手へ
- ② 「民」が「公」を取り巻いて「共」を創る —公の制度の民衆的再編成
- ③ 学びを創る力の危機をどう拓くか —学びづくりの拠点「自治」の解体との闘い

◇学びの実践の内実を追求する

- ① 要求の発見から必要の認識へ —学習主体の自己形成
- ② 何に向けての学びか —誰と共に何を創るか(with the world)
- ③ 地域を創る社会教育実践を —育ち合う人間集団と社会集団づくり
- ④ 「事業」からの脱却を —事業づくりから教育実践の創造へ
- ⑤ 学習運動が学習主体・自己教育主体を育てる —民衆学習運動が示すもの

◇社会教育の発展方向を大きな視野で問う

- ① 社会教育の再定位 —教育総体のつくり直しをめざす

◇実践者こそが真の研究者となる

- ① 新しい社会教育実践を生む社会教育理論は、＜社会教育実践の科学＞の創造からしか生まれない。
その＜科学＞は生活現実を主体的に把握できる実践者こそが創造する
- ② 私自身の経験からの集約：社会教育現場での実践、社全協、社会教育・生涯学習研究など民主的社会教育を守る運動への参加が、法制研究、教育の権利構造、民衆教育運動(歴史・外国)の研究を深め、社会教育学会等との緊張ある研究の前進を生む
* 運動仲間との共著—『自治体の自立と社会教育』『人間発達の地域づくり』('08,'12)
* 自分の理論研究活動の総括と提起—『社会教育の再定位をめざして』('13))
(下伊那テーゼに関わってはⅡ-1,2章：資料参照)

5. 社会教育の新しい発展への期待

- ・ 住民の、生活・生産・福祉・平和を守る諸運動を発展させる中で、あらためて現実を拓き歴史を創る力量を人びとが身につけていく学習運動の組織化とその発展をめざす
- ・ 社会教育は、その運動に身を置いて、それに支えられ、ときにそれを支えて発展する

参加者当日感想

■実際に下伊那テーゼの制作に携わった方々の話が聞けた貴重な機会でした。時間がなかったこともあります、現代の公民館に活かすためにどうなのか、論議がなかったことが残念でした。

■参考になりました。

■下伊那の生活現実と向きあい、自らの役割を自覚してテーゼをつくりあげた、当時の若き主事たちの歩みにふれられた。阿智村の今の主事たちの熱意と重なりあいこれからの公民館や社会教育の未来をてらす、よい会になったのではないかと思います。若い世代のメッセージを受けとり、下伊那テーゼの精神を、信州の地により花をひらかせていきたいと思った。

■いろいろ考えるところが多くありましてありがとうございました。

■大変中身の濃い内容でした。公民館主事への意見があつたが、やはり住民の課題なのだと痛感した次第です。共に育ちあいましょう。

■下伊那テーゼを発表されてから 50 年目の記念フォーラムに参加することができてよかったです。自分は今年の 4 月に 30 代半ばで主事となりましたが、なるまで全く下伊那テーゼのことについて知りませんでした。また、本年度 1 回参加させて頂いた会議を受けてもしっかりとは理解できていない状況です。そういった中で、本日のフォーラムに参加して思ったことは、まず、自分の思いではなく、自分の地域の状況を知ること、その為に地域に入っていくということの重要さでした。主事になるまでは思っていた地域の中に入っていくということが実際に主事になってみて、事業や館の管理にいっぱいになってしまっている中でおろそかになり、さらには動くことができていませんでした。事業の運営の前に地域のことを知る！そういった主事として地域とともに語り合い、ともに行動していきたいと思います。島田先生のおっしゃられた「社会教育とは学びづくり」そのとおりでと思いました。

■全体を通じて印象的だったのは、元阿智村村長岡庭さんのエピソードでした。地域(課題)を知る(捉える)ために保健師と一緒に地域をまわり、住民と保健師との会話を聞いていたそうですが、そういった地道な努力ができること(やろうと思って実践したこと)は素晴らしいと思いました。公民館にいただけでは公民館利用者の事しか聞けない。公民館を飛び出してみろ、とおっしゃっているのだと私は感じました。また、事例発表者の 4 人のみなさんは大変にお疲れさまでした。特に鈴木主事の発表の中で、子育てをしやすい地域にするために自分達は何ができるのか考える、つまり子育てを通じて地域を考えることのできる住民を育てるという思いには感銘を受けました。

■下伊那テーゼの今日的な意義を改めて考えるよい機会となりました。事例発表のみなさんお疲れさまでした。

■「公民館主事」という共通点の元、さまざまな立場の方の意見、取り組みを聞くことができ、

社会教育について詳しくない自分でも参考になることがありました。有意義な時間でした。ありがとうございました。

■事例研究がとても良かった。

■「今」を築きあげてきた大先輩の話は主事のあり方や、求められている役割を再確認する貴重な機会でした。50年前にできたテーゼが今の自分達、これからの主事を語りあうために必要不可欠である事を感じました。現場に出る事、住民の声を聞く事はあたり前で、それを主事同士で共有する事、ぶっつけあう事が技量を高め、地域にかえせる事につながると思います。このような機会を設けていただきありがとうございました。

■50年という時が経過し、共感できる内容、あまり現在では考えていない内容もある。公民館や主事の考え方や役割は、時代と地域に沿いながら変わったり変わらなかったり、住民の方々と話し合い、信頼関係を築きながら地域の課題を考えていきたい。

■公民館主事4人の実践を聞いて私も社会教育指導員時代の実践と仲間たちとの研修の意義を思いだし、このような場があることの必要性を改めて感じる事ができました。これからの活動に期待しています。私自身もがんばろうと思いました。ありがとうございました。

■実行委員の皆様、お疲れさまでした。期待どおりの内容でした。ありがとうございます。今後ともよろしくお願いいたします。飯田・下伊那エリアの主事さんたちのセンスと実践が素晴らしいと思いました。改めて「下伊那テーゼ」を読みたいと思います。

■自治の名の下に国の政策を浸透させる地方創生ではなく、本当の自治によって生活をつくる住民が生まれることをめざす社会教育になる必要を改めて感じました。

■タイトな日程の中、調整がむずかしかったのですが、来て良かったです。3部構成それぞれが良かった。今後の自分自身の「再定位」に示唆的でした。

■下伊那テーゼ50周年記念に同席できたことがとても良かったです。50年前の歴史と歩みをふまえながらこれからの50年をどの様に築くのか皆さんに期待しています。有難うございました。

■ありがとうございました。原点の再確認させていただきました。今の仕事がんばります。

■資料が丁寧に作られていてありがたかった。

■長野市での公務員時代に『住民と自治』の学習を仲間と行ない成長できたと思っています。現在医療介護分野においても「地域とともに」「暮らしをしっかりと見すえて」等々大切なことを若い方々と実践中です。今年高校で非常勤講師をするようになり、改めて「学ぶこと」の原点に戻る必要があり参加しました。下伊那テーゼの先輩の皆さんに学び、若い主事の皆さんが大勢いらっしゃることに感動しました。

■本日は素晴らしいフォーラムに参加させていただき、ありがとうございました。私自身、今年4月に入職したばかりということもあり、同世代の4名の実践報告が大変身近に感じ、印象に残りました。現在、松川町中央公民館さんと同様の悩み、課題を抱えており、つい昨日20～30代対象の講座を初めて企画いたしました。貝塚にも同じように成人式を企画する委員会もあり、リンクすることがたくさんありました。自分自身の町以外の実践報告を聞く機会が今までなかったので、大変貴重な時間となりました。本当にありがとうございました。

■主事さんの報告に今の公民館の状況がよくあらわれていて、その困難さを思います。ぼくと同じように課題は何かときいても住民は「答えられないと思います」とお答えになっていたことが象徴的でしたが、主事のみなさんの問題意識がそのまま住民の方々とかぶっているところもあると思います。どうするかを共に考えるいい条件もあると前向きに考えてがんばって下さい。

■岡庭さんの話、人には話せない女性の本当の悩みを、集落全体の問題、村全体の問題にしていく。これは重い問題提起だと思いました。仕事の関係で学校と地域の連携の教育実践を調べています。しかし、そこでいわれていることは、せいぜい「学校に関心を持つ地域住民が増えた」とか「子どもを地域全体で見守る（育てる）雰囲気づくりがすすみつつある」とか「学校の事情を理解する住民が増えた」とかです。これらの意義そのものはあると思うのですが、本当にこれでいいのかと疑問に思っていました。今日の岡庭さんの話で、いまの学校と地域の連携の実践の多くに何が足りないのかが、はっきりと見えてきました。一つ目に、弱い立場の住民の（表にも出せないような）切実な悩みをつかもうという視点です。二つ目は、自治体運動など社会運動の背景（あるいはせめて社会運動から学ぼうという姿勢）です。多くの実践は、この二つのことが足りないから、あいまいな形でしか実践の総括ができていないのだ。そのことに気づきました。（その意味で、下伊那テーゼには、努力の限界はあっても、そのものに限界はないというのはその通りだと思いました。）

上の二つの視点が追求しづらい状況になっている今の教員や職員さんや実践者をはげまして、再び追求できるためには、どんな研修が必要なのか。みんなで知恵を出しつくしていけないといけない時期になっていると思いました。今日発表していた30代の若い主事さんたちは、下伊那テーゼをつくった第一人者たちを前に、構えてしまって委縮してしまっていて、職員として本当に悩んでいることを打ち明けられずにいたような気がしたものですから・・・今日発表していただいた主事さんたちは、事例研究の場でファシリテーターやフロアの方々が提起していた課題とは別の課題で悩んでいるのではないかと。そんな気がして、少し気がかりでした。

学習内容こそ教育実践の扇の要である（島田さん）というのはまさにその通りだと思います。これは学校教育でも全く同じ課題に直面しています。今日の会は、日頃悩んでいる問題を相対化し見通しをもつ上で大変教えられることが多く、大いにはげまされました。本当にありがとうございました。

■下伊那テーゼができた当時の話、最近の話を共に聞くことができ、たくさんの気づきを得ることができました。ありがとうございました。若い人が学びたいという意欲がないというわけではなく。その意欲に気づいていない、気づいても行く余裕がないというのが現状だと思います。ここに気付けたことが1番の収穫でした。

■下伊那テーマを多面的に知ることが出来ました。私なりにその本質が少し見えたような気がしました。

■本日は参加させて頂き、ありがとうございました。若い主事のみなさんの事例発表から下伊那テーマができた当時の時代背景や実践されていたことなどとても貴重なお話を伺うことができ、大変勉強になりました。本日の話の中でもありましたが、日々業務を行う中で、市民と行政の間で悩む場面が多くあります。また、本市においても若年層の公民館参加がほとんどなく、若い世代の職員で取り組み始めましたが、継続させることの難しさや、そもそも情報をいかに伝えるかのところで課題を抱えています。他の自治体の方と意見交換、情報交換できる場はとても貴重で大切なことですので、今後ともぜひ色々と教えていただきたいと思います。よろしくお願い致します。

下伊那テーゼ 50 周年記念フォーラムに取組んで

下伊那テーゼ 50 周年記念フォーラム
実行委員長 木下巨一

1. 下伊那テーゼ 50 周年記念フォーラムを開催

「公民館主事当時、自由の少なかった農家のお嫁さんの話を聞き、村全体の課題として共有した経験の中から、顕在化した課題だけでなく、表に出てこないことを見ていかないと、平和な暮らしは実現しないことを実感しました。」

2015 年 10 月 24 日、阿智村中央公民館において下伊那テーゼ 50 周年記念フォーラム(以下フォーラム)が開催された。フォーラムには飯田下伊那の現役公民館主事たちに加えて、県内外他地域の公民館職員や公民館主事 OB、研究者ら 70 人を超える参加のもと盛会に行われた。冒頭はフォーラムに登壇していただいた、前阿智村長の岡庭一雄氏の発言である。

フォーラムは 3 部で構成。

第 1 部は「下伊那テーゼを現代に活かす～地方創生時代と公民館～」と題し、東北大学の石井山竜平氏を聞き手とし、下伊那テーゼ(以下テーゼ)誕生時、阿智村公民館の主事であった岡庭氏との対談とした。聞き手を務めた石井山氏は、「地域における学習内容は、外から組み込まれたものではなく、国民大衆の運動やそこで取り組まれている学習をしっかりと学んだものによって、住民の暮らしの実態に沿ってきめ細やかに編成されるべきものであり、それこそが公民館職員の仕事である」という前提に沿い、公民館主事であった当時の岡庭氏の実践と、実践の中から学び取ったものの見方や考え方について聞き取りを進めていただいた。

第 2 部は「今日の公民館実践における主事の悩みと役割」と題し、テーゼ誕生時に松川町公民館主事であった松下拓氏をファシリテータに、飯田市羽場公民館主事の鈴木勇気氏、同じく松尾公民館主事の下岡祥平氏、阿南町公民館主事の安野涼介氏、松川町公民館主事の望月貴生氏による事例研究とした。事例研究は 4 人の公民館主事たちによる実践の成果というよりは、実践を通して主事たちの考える課題や悩みを中心とした報告に対し、松下氏が掘り下げていくという形で進められた。羽場公民館の鈴木氏は子育て世代の男性層と地域を結ぶことをねらいとしたイクメン講座、松川町公民館の望月氏は公民館の活動に若者たちを呼び込もうとした一連の取組みについて報告、彼ら自身が若者当事者として、学習対象者である若者たちと生活実感を共有しながら、これまで関わりの少なかった若者たちの主体的な参加について投げかけてくれた。松尾公民館の下岡氏は、中国籍住民の集住している地域の特性から、多文化理解をテーマとした「日中交流事業」を実施したねらいと経過について、阿南町公民館の安野氏は、公民館報の編集を通して、地区な地区の住民同士の相互理解について報告してくれた。

第 3 部は「地域に向き合う主事の学びと働き～下伊那テーゼ作成過程から現代へ」と題し、中央大学名誉教授でテーゼ誕生時に喬木村公民館の主事であった島田修一氏による総括講演が行われた。島田氏は、自身が公民館主事を務めていた喬木村時代、産業構造の変化により、農家の主たる働き手となった女性たちが過酷な労働の中で健康を損なっていく実態を調べ、当事者である女性たちを出発点としてその背後にある社会の状況を学び取っていった学びなどを例示しながら、下伊那テーゼの策定過程の状況を示していただいた。そして自分や仲間の置かれた暮らしの現実から出発し、未来を切り拓くために、自らが学びの創り手となるような場としていくことができることが、現代にも通じる公民館や公民館主事の役割であることを明らかにしてくれた。

2. フォーラムに至るまで

2014 年 10 月、阿智村中央公民館主事の大石真紀子氏と櫻井拓巳氏が飯田市公民館を訪ねてきた。訪問の主旨は、2015 年に下伊那テーゼが誕生して 50 年目を迎えることから、このことを記念した学習会を実施したいという内容である。このことがきっかけとなり、「下伊那テーゼ 50 周年記念事業実行委員会」を立ち上げ、飯田下伊那 6 市町村と教育事務所から 13 人が参加し、12 月 17 日に最初の話合いを行った。

実行委員会では当初から、今回のフォーラムの開催をまとめる機会と考えていたが、このフォーラムに至るまでのプロセスを大事にしようと、この間 3 回の学習会を行った。

2015 年 1 月 27 日は、元所沢市社会教育職員で、現在阿智村在住、社会教育・生涯学習研究所長である細山俊男氏を講師に、下伊那テーゼが生まれた時代の社会や公民館を取り巻く時代状況を学習した後、参加者全員で下伊那テーゼの原文の輪読会を行った。

3 月 16 日は、松下拡氏を講師に迎え、阿智村公民館の社会教育実践と下伊那テーゼ誕生の頃をつなぐ学習会を行った。

5 月 14 日、15 日は長野県公民館運営協議会主事研修会・総会が飯田で行われたことから、研修会の基調を下伊那テーゼとし、初日全体会では前阿智村長で、下伊那テーゼ誕生の頃最年少の公民館主事であった岡庭一雄氏と細山俊男氏に登壇いただき、座談会とミニ講演を行った。2 日目は分科会の一つを「改めて主事の役割を考える」とし、前日の全体会での論議を受けて、阿智村と飯田市の公民館主事の事例を通して、公民館や主事の役割について考えることを目的に論議した。

1 月と 3 月の学習会には飯田市と下伊那郡各町村から 30 人近い公民館主事が、また 5 月の主事研修会では県下各地から集う 180 人近い公民館主事が参加してくれた。

実行委員会の発足当初、「下伊那テーゼ」という言葉そのものも聞いたことのないメンバーもあり、ほとんどのメンバーは本文を読んだことはないところからのスタートだった。

3. フォーラム参加者の感想から

フォーラムを受けて、飯田市の公民館主事たちの感想を募った。その中からいくつかを紹介したい。

(1) A 主事

今回、下伊那テーゼ 50 周年記念フォーラムに参加させていただき、公民館の役割について深く考えさせられました。今まで住民とともに事業を企画実施したり、住民の要求に応じた学習活動を展開したりしてきましたが、果たして本当にそれでよかったのか自問自答しています。参加者から、公民館や主事が学習課題に線を引くことで、住民の学習の場をつぶしてしまうという意見が出されました。意識的に線を引いてきたつもりはありませんでしたが、やはり無意識のうちに困難な学習課題や政治的な課題を取り上げなかったのではと省みて、住民の学習要求の芽を摘んでいたのかと考えさせられました。逆にいえば、それだけ住民が公民館に期待しているのだとも感じ、改めて使命感・責任感を持って主事の仕事を全うしなければと思いました。

また、島田修一さんからは、「社会教育は学びづくりであって、事業づくりではない。学びは能動的なものである。」とのお話がありました。元竜丘の公民館主事を務められた河井辰雄さんがおっしゃっていた「主体性を持つ人の育成・支援」に通じるところであり、その大切さを再認識いたしました。

本フォーラムに参加させていただき、公民館主事という仕事は難しいものだ改めて思いま

した。悩みも深くなる一方ですが、住民と本当に密に接することができ、住民の声を身近に拾いながら、住民と共に活動を行えるおもしろい仕事でもあると思います。悩みながらも前を向いて、業務に取り組もうと決意したフォーラムでした。実行委員の皆さん、大変ありがとうございました。

（２）B 主事

今回、下伊那テーゼに関わって来られた先輩主事の方々のお話をお聞きし、自分自身の住民の方々への向き合い方や主事会という職員集団のあり方について、深く考える機会となりました。

「住民の本当の声を聴き、住民の幸せを考えた仕事ができているのか。」「テーゼに限界があるのではない。努力や挑戦の限界を自分自身がつくっているのではないか。」など、多くの先輩主事の方々から私たちに厳しい問いをいただきました。

また、「無力な自分」を自覚することがスタートである。との言葉からは、一人の地区住民の方の困難と向き合った時、何もできない自分を自覚し、住民の皆さんから教えていただく姿勢を忘れず解決に向けて一緒に考えることのできる自分でありたいと感じました。

住民の皆さんとともにつくりあげる活動を通して、私たち自身が学び育っていくこと、そして主事会が互いに学びあいながら育ちあえる職員集団となるために一人ひとりがどうあるべきかを考えました。

激励をいただいたと同時に、100 年先に向けて、私たちがテーゼに込められた心を引き継いでいく責任があることを認識した会でもありました。貴重な機会をありがとうございました。

（３）C 主事

今回のフォーラムに参加して、実際に関わった大先輩の話を聞く事ができ、下伊那テーゼが生まれた時代背景を直に感じる事ができました。農家のお嫁さんが抱える表には出にくい生活課題に、あえて踏み込んで学びの機会を作り出し、そこから解決の糸口を見つけていく住民活動の中に主事へのニーズがあった。「住民辞令の公民館主事」という岡庭氏の事例などはとても印象深かったです。

また、現役主事からの事例発表の際に聴講者からの出された意見、質問で「介護保険制度」や「労働組合」に関する主事の意識を問われた場面がありましたが、あの時、多様なライフスタイルがある現代社会で、現在の主事がテーゼの実践事例をどう活かすのかを問われれば、それは正直厳しいのではないかと感じました。

ただ、例えば、飯田市主事会や同世代の市職員が、現代社会の中で、各々の責任や役割について議論するような機会も持つ事も必要かもしれないと、フォーラムに参加した事で考えるようになりました。単に業務に追われているのではなく、地域課題に向き合っているという自覚を持って、個より集団の中で主事が自己研鑽を図っていく必要性をフォーラムの中で学びました。

（４）主事たちの感想を受けて

長野県は自治体が設置する公民館数は全国と比較しても図抜けて多く、さらに自治公民館（長野県では分館あるいは町内公民館という）の設置数は 4000 を超えていることが推計され、県内住民にとって公民館は大変身近な存在である。また、公民館の事業の企画や運営を行う専門委員会も、特に公民館報づくりを担う広報委員会は多くの公民館に設置され、住民主体の取組み

が進められている。飯田市に限らず、公民館事業に関わる住民は良く、「公民館をやる」という言葉遣いをするが、このことから公民館が住民にとって大変身近な存在であるとともに、多くの住民は「公民館」を施設というよりは、機能や活動としてとらえていることがわかる。

一方住民主体の公民館活動を支える職員側の状況は、経験年数の短期化、若年化、長野県公民館運営協議会や、郡市単位の公民館運営協議会などの活動の停滞などを背景として、力量の低下が顕著である。

このことにより公民館主事たちは、ともすると元気な住民の企画した活動ばかりに目がいき、課題や困難を抱えた住民へのまなざしや、生活実態すら地域や社会の課題につなげていく経験が乏しい傾向がある。

とはいえ飯田市は松本市と同様、月例の会などを通して、公民館主事たちが相互に自信の力量を高めるための学習を大事にした主事会が機能している数少ない自治体である。その点では公民館の仕事や公民館主事の役割について、日頃同僚同士で話し合う機会に恵まれている。

3 人の主事たちの感想から、今回のフォーラムを通して、住民との関係をより深めながら、住民の言葉の背景にある課題を見つけ、それを皆の課題に広げながら、地域や社会の問題に広げていく学びの道筋を見つけていくことが、現在の飯田市の公民館活動や公民館主事に求められていることを、主事自身が自覚する機会になった、ととらえることができる。

4. 下伊那テーゼとは

下伊那テーゼは、正式には 1965 年に、飯田下伊那の公民館主事有志によってまとめられた「公民館主事の性格と役割」という論文である。

当時高度経済成長が始まり、工業化の進展や公共事業の増大により農家の労働力が他の産業に流出する中、飯田下伊那の地域社会の構造が大きく変化し、そのことにより新たな課題が発現していた。またそういう産業構造の変化の中で、これまで公民館を支えてきた青年会や婦人会の組織や活動の停滞の傾向がみられ、従来型の公民館活動の見直しが求められていた。

これらの地域や時代の状況の中で、飯田下伊那の公民館主事有志が集い、学んだ成果としてまとめられたのがこの論文である。

論文は、「公民館とは、あるいは公民館主事の役割とは」について分析したものであり、この中で公民館を、「民主的な社会教育を守るもの」と位置づけ、「民主的な社会教育」とは、「人間らしく生きる権利は、住民自身も持っているのだという自覚を呼び起こし、人間らしく生きる実践の力を身につけていく働きかけが民主的な社会教育の基礎になくてはならない」と定義づけている。そして民主的な社会教育を担う公民館主事の役割を、「働く国民大衆の運動から学んで、学習内容を編成する仕事」と「社会教育行政の民主化を住民とともに勝ち取っていく仕事」と示している。

この論文が各地の社会教育関係者から注目され、「三多摩テーゼ」「枚方テーゼ」とならんで「下伊那テーゼ」として称されるに至ったものである。

5. 下伊那テーゼを現代的に読み解くために

下伊那テーゼが誕生した頃と現代では特に労働運動・社会運動の分野で現代とはずいぶん違いがあり、そのことにより下伊那テーゼ本文の言葉遣いを読んでも、最近ではなじみのない表現も散見されている。

下伊那テーゼ誕生の頃は高度経済成長が始まり、産業構造も第 1 次産業から第 2 次産業にその比重が大きく移行し、住民の暮らしも大きく変貌する中で、これまで公民館で取り上げてき

た課題を見直すことが求められていた時代ととらえている。

それに対し現代は、日本の歴史で初めて人口減少が始まるとともに、少子化高齢化が進み、このことにより地域の存続自体が危ぶまれている時代である。

それぞれの時代に共通するのは大きく時代が変貌する中で、新たな課題が生まれ、その課題に向き合うことが求められているという点である。

下伊那テーゼを現代的に学び直すということのねらいの一つは、時代の変貌の中で、私たちがどのような地域の課題に向き合っていけばよいのかを、当時の時代から学ぶという点にある。

フォーラムで松本市の手塚英男氏からは「公民館や公民館主事の向こうに住民の姿が見えているのか」と問われた。総括講演者である島田修一氏からは、農家で働く女性の暮らしの実態の中から地域や社会の課題を読み取っていくことの大事さについて話していただいた。

今回のフォーラムを通して私たちの取組む公民館活動が、テーゼ誕生の頃に一番学ぶべきことは、住民一人ひとりの暮らしの実態やその背景にあるものを、学び取っていく活動ではないかととらえている。そのためには自分の周りの住民と結びつき彼らの話を聞き取る活動が今まで以上に求められる。

地域課題に向き合う活動、学校とともに地域が協働し子どもたちを育てる活動、高校生や若者とつながり次の世代を育てる活動など、新たな課題に挑戦している飯田の公民館であるが、そういう取組みが形にとらわれることなく実のあるものとするためには、「聞き取る力」「聞き取る活動」を通し、これら事業に関わった住民と、私たち職員が、事業を通して学び、育っていくことができているかを常に問うていきたい。そして一人ひとりの住民から聞き取った言葉を学習課題として汲み取っていくための地域や社会のありようを科学的に見通すことのできる知見も求められている。

6. 高校生たちの取組みに学ぶ

2016年1月24日飯田市公民館などを会場に、「こどもまち博 in IIDA」が開催された。飯田市内の4つの高校の生徒有志による企画である。

実行委員長の嶋村駿吾くんは、飯田 OIDE 長姫高校商業科の3年生で、飯田市や松本大学と連携して取り組んでいる「地域人教育」の授業を3年間受けた生徒である。彼は2015年4月、授業の枠を超えて「sturdy egg（勇敢な卵）」という課外活動グループを結成し、20人ほどの生徒たちの力で、中心市街地にある公共施設のトイレ掃除、地元産材のお弁当の開発、街なかの空き家を活用したゲストハウスづくりなど、いわゆるまちづくりの活動に取り組んでいる。

「こどもまち博」は、この地域の将来や、自分たちのこれからの進路について考えることを目的とした事業で、20人の高校生実行委員により企画運営が行われた。

実行委員のメンバーの中には、飯田市公民館が主催する「高校生講座カンボジアスタディツアー」に参加した高校生も4人参加してくれ、その意味では高校生と地域を結ぶ取組を進めてきた公民館の活動の成果の表れともいえる。

午前中は「大学生による高校生を対象とした進路相談」「高校生の企画した商品の販売」「国際化についての学習会」が行われた。

大学生による進路相談は、全国の大学生有志による中高生の進路相談のネットワーク「ブリッジ・スクール」による、大学生活や大学の学びについて考える企画である。

商品販売は、飯田 OIDE 長姫高校の生徒達が地元の商店と共同で企画したパンやチョコレートの販売です。屋外テントでの販売で、あいにくの猛烈な寒波の中であつたが、この企画に併せて、地域人教育で結び付いた遠山郷の方たちによるシシ鍋の無料サービスを行ったことから、

商品は1時間ほどで完売した。

国際化についての学習会は、カンボジアスタディツアーや信濃毎日新聞主催のアメリカツアーなどに参加した高校生たちによる報告と、AETの先生たちを講師とした外国事情についての講義である。

午後は参加者全員が飯田市公民館に集まり、地域や自分の将来について考えるシンポジウムが行われた。

冒頭は塩尻市役所職員で塩尻市の中心市街地の空き家の活用に取り組んでいる山田崇氏のまちづくりをテーマとした基調講演のあと、農業や介護、国際協力、まちづくりなど様々な分野で活躍する大人をゲストに迎えた分科会で「働く」ことについて考え、最後に自分や地域の将来について、4人の高校生パネラーの考えを同じく高校生のコーディネータが引き出していき、パネルディスカッションでまとめられた。

パネルディスカッションで一番印象に残ったのは、参加した高校生たちが飯田に残る、あるいは帰ってくるか、という問いに対する生徒たちの思いを出し合った場面である。

飯田市では高校卒業後8割の生徒は進学や就職のために他地域に移り住み、その後戻ってくるのは2割、従って飯田で生まれ育った高校生のうち、4割が地域に残るという状況である。持続可能な地域であるためには、いったん他地域に出ても、いつかは生まれ育ったこの地域に戻ってくるという「人材のサイクル」が必要である。そこで飯田市では人材のサイクルを実現するために、「住み続けたい地域づくり」「帰ってきたいと考える人づくり」「帰って来られる産業づくり」という3つの「つくり」を市のもっとも重要な政策として打ち出している。

今回のパネルディスカッションでは、「帰ってきたいと考える人づくり」について、当事者である高校生が自分自身の本音で語ってくれたことが最も印象に残っている。

飯田市の公民館は、小・中・高校生と地域をつなげる取組みに力を入れているが、これはこの時代に地域の中で大人たちが彼らを厚く取り巻き育てることが、原体験として「帰ってきたいと考える」人づくりに結び付いていくのではないかと願っての取組みである。

パネラー4人のうち2人は、カンボジアスタディツアーに参加した高校生であるが、二人とも自分が将来飯田に返ってこようと思うかどうかという問いに対し、「わからない」という答えだった。仮に大人や行政が同様の企画に取組み、彼らの意見を聞いたとしたら、きっと彼らは「帰ってきたい」と大人の期待する模範的な解答を発言していたのではないかととらえている。

彼らの「わからない」という言葉には、飯田以外の地でたくさんの経験を積んだうえで判断したいと、悩みながらその問いに対して積極的に考えた上での気持ちがこもっていた。彼らの発言の中には、自分のこれまでの人生を振り返ったとき、親や地域の人たちとの厚い関係性の中で育ってきた、という思いが強くあり、そういう原体験が、悩みながら「わからない」という答えに結び付いたととらえている。

コーディネータの高校生は、パネルディスカッションに備えて、仲間たちにラインを通して「将来帰ってきたいと考えるかどうか」、81人の友達にアンケートするなど自分なりの備えをしたうえでの進行を務めてくれた。

パネルディスカッションに登壇した高校生に限らず、フロアから発言した参加者も含めて共通していたのは、「大人たちにやらされるのではなく、自分たち自身で決めていきたい」という自らが主体となって判断したい、という強い意志である。

島田修一氏は、社会教育を「自己発達力をわがものにする学び」あるいは「自己教育活動を組織する営み」（社会教育の再定位を目指して：国土社）と定義しているが、この高校生の取組みには、学校教育における受動的な学習から社会教育的な学習への萌芽がみられる。

高校生たちの真摯な取組に立ち会うことで、社会教育とは何かを改めて考える機会となったが、私たち公民館の職員には、この高校生たちの取組みに見られるような、自己発達力をわがものにしようとする学びに寄り添い、そういう学びの実現を支えていく姿勢と力量が求められている。

7. 下伊那テーゼを私たちはどのように受け継いでいくか

実行委員会による学習会を開くまで、飯田市と下伊那郡各町村の公民館主事は年に1度交流研修会を開く程度で最近ほとんど交流がなかった。また、公民館主事の経験年数についても特に町村の場合短期化の傾向が表れている。その意味で下伊那テーゼの生まれた時代と現在を比べると、公民館の活動を支える公民館主事の経験、力量の蓄積は大事な課題の一つであるととらえている。

一方、少子高齢人口減少社会を迎えて、国は「地方創生」を旗印に、住民の自治的な活動の活性化による共助の取組みの伸長を図るため、地域コミュニティに注目した政策を打ち出している（総務省：まちづくり団体の組織化、国土交通省：地域防災拠点、経済産業省：買い物困難者のための流通拠点、厚生労働省：高齢者見守りのための地域拠点等）。

しかし国の社会教育調査でも公民館の設置数は大きく減少しつつあり、また市町村の直営から指定管理への移行の動き、教育委員会から首長部局への移管の動きが長野県内においても始まっているなど、公民館や職員側に国の動向を受け止める力量が伴っていないのではないかとこの危機感を感じている。

地方の活性化に期待する国の動きは、国が責務としてきた国民の基本的人権の保障を、国民自身の責任に転嫁しようという思惑や、国の統制下のもとに国民を組織していこうとする権力的な動きとも連動しており、無批判的にこの動きを受け止めるものではない。

しかし住民の立場から考えれば、暮らしをめぐる様々な問題が顕在化している今日において、それらの問題を自らの力で解決していく学びや自治が求められている時代ともとらえることができ、権力的な動きに向き合い、自治的に取組んでいく契機ととらえることもできる。

2013年2月1日、2日、22都府県から公民館職員を含めた180人の自治体職員や研究者が飯田に集まり、「自治と協働のまちづくりを目指す飯田研究集会」を開催した。これは財団法人地域活性化センターが管理する、全国各地の自治体職員2,000人による「飛び出す公務員メーリングリスト」の論議の中で、公民館の今日的な意義についての論議が行われたことがきっかけである。飯田型の公民館の活動をモデルとして、地域再生に向けて、自治と学習の拠点として「公民館のようなもの」の再構築について考えることをねらいとした集会である。

2014年10月18日から20日にかけて、兵庫県尼崎市、松本市、飯田市の公民館職員・自治体職員70人が飯田に集い、「解体新書塾～公民館・地域自治のありようを見直す自治体間共同研究～飯田研究会」を開催した。これは前述の飯田研究集会が契機となり、飯田型の公民館をモデルに、参加した自治体において、学習を通して地域の課題に向き合うことを出発点に、住民自治と、それを支える自治体と自治体職員のあり方を考えことをねらいとした事業である。

解体新書塾に参加したことがきっかけとなり、松本市、駒ヶ根市、上田市、飯田市の公民館主事たちが、公民館と公民館主事の役割について、自らの実践や有識者から学ぶ、長野県公民館職員学習交流会を計画し、2015年1月24日、25日に駒ヶ根市で、同じく7月4日、5日には上田市で開催された。2016年は飯田市で第3回目を開催する予定である。

2015年2月27日、28日には、尼崎市で「自治と協働のまちづくりを考える研究会、尼崎大会」が開催された、これは2013年の飯田集会を受けて、住民と自治体職員が学ぶことを土台に、

地域の課題に向き合うことを宣言することを目的とした集会である。2017年1月30日、31日には松本市で第3回目の集会が予定されている。

第1回解体新書塾に参加してくれた九州大学の八木信一氏（環境経済学、自治体財政学）は、飯田型の公民館のように、地域や住民の暮らしに向き合い、学ぶことを土台とした住民自治の活動を大事にし、住民自治の活動に寄り添う職員を配置している自治体ほど、財政的にも健全であることを仮説とした、「自治の成熟と財政支出の関係性調査」を飯田市において進めたいと申し出てくれた。

少子高齢人口社会といわれる日本において、これまでの歴史の中での経験だけでは解決の道筋が見えにくい課題が生まれている現代において、これらの動きは、地域における社会教育機関である公民館や公民館主事の存在と、住民自治を土台とした地方自治体のありようを見直そうという動きである。

今回のフォーラムに至る一連の取組みの中で学んだ視点を大事にし、これらの公民館や住民自治に関わる新たな動きに取り組むことを通して、公民館や公民館主事の役割の再構築と、住民自治を土台とした本当の意味での地方自治の実を上げる取り組みを、進めていきたい。

いまの「下伊那テーゼ」ができることを期待して

岩松真紀

このフォーラムにいたるまでの学習と企画運営ができる力量のある下伊那の地の職員集団を尊敬する。フォーラムのチラシには、「下伊那テーゼとは何か、現代の公民館とそこで働く主事に求められるものとは何かを考える学習会」と書かれているように、ただテーゼを学ぶに終わらず、いまの課題に引き付けるよう計画された内容も参加前から楽しみだった。

フォーラムで報告された方々にならい、自身の社会教育や下伊那テーゼとのかかわりについて最初に提示する。地域で社会教育の活動はしていても社会教育という概念に出会うのが遅かった私が、「下伊那テーゼ」ということばと出会ったのは、「枚方テーゼ」「三多摩テーゼ」と同時だった。「テーゼ」ということばの意味から調べ、テーゼというからにはそれが世間一般に金科玉条のように通用するものと当初考えた。その後、社会教育を研究するようになり、まずは本のなかにある抜粋、次に全文、そして幸運にも実際に携わった方々から当時の様子をうかがう機会をえた。とくに今回ファシリテーターをされた松下弘氏からは多くのお話をうかがった。

「その当時の公民館主事たちは『社会教育とは何か』『教育とは何か、学習とは…』など『公民館と教育をどう考えるのか』等について自信をもって説明できない意識のあいまいさがあった」という話などをうかがい、「公民館主事の性格と役割」が主事たちの悩みのなかから生まれ、実践してさらにふりかえるなかで高められたのだと私なりに理解した。今回のフォーラムでは、そうやって下伊那テーゼから生まれた成果としての諸先輩の経験と、経験からくる確信を、後輩へのアドバイス、エールとして（私も含め）いただくことになったのだと思っている。

終了後に送っていただいた参加された主事のみなさんの感想文からは、住民とのかかわり、課題に対する考え方、主事という職員集団について等、現代に通じる下伊那テーゼの大切な部分を理解しつつも、今と過去では主事の置かれている状況や人々の生活に違いがあり、同じようにやっていくのは難しいものがあると訴えているような部分も感じた。下伊那テーゼをつくり、それを守るように立派な実践をされ地域をつくってきた輝く諸先輩を、今の時点からみるとそう思う気持ちはとてもよくわかる。しかし最初からそのような視点や力を持ち得たわけではなく、今回報告された主事のみなさんと同じように個々に悩み考え、主事会で悩みを出し合い、共有し、どうすべきかを討論し、「公民館主事の性格と役割」を作成していったのではないだろうか。いまと過去が似ている、とフォーラムの報告者やフロアの話に何回かでてきたが、そういうことも似ているのではないか。期待をこめた後輩たちへのことばが、今回の話にはちりばめられていたように感じた。

木下巨一実行委員長の話に、2000年前後に長野県の公民館運動を職員の側から支えた諸先輩の多くが公民館の現役を去ったときの危機のことがあった。この危機はおそらく全国にもあり、公民館運動の「運動」部分がうすくなりつつあるのではないだろうか。そんななか、下伊那テーゼをきっかけとしてフォーラムまでのこの動きが起こったことは、自治体のなかでどこかで受け渡しされなかった、その「運動」の部分にかかわるような何かが、人から人へ受け渡される機会となったのではないだろうか。

いい会でした。ありがとうございました。

下伊那テーゼ50周年記念フォーラムに参加して

飯田市公民館 氏原理恵子

「住民の本当の声を聴き、住民の幸せを考えた仕事ができているのか。」「テーゼに限界があるのではない。努力や挑戦の限界を自分自身がつくっているのではないか。」など、多くの先輩主事の方々から私たちに厳しい問いをいただいた今回のフォーラムは、自分自身の住民の方々への向き合い方や主事会という職員集団のあり方について、深く考える機会となりました。また、50年という節目の年に再び公民館でお世話になり、このように多くの先輩方から学ばせていただく機会をいただいたことに心から感謝をしています。

住民と向き合うときに、「無力な自分」を自覚することがスタートである。との岡庭さんの言葉をお聞きしたとき、前職場で出会った外国人住民の方々の顔が思い浮かんできました。

「私は、母国では日本人として生きてきたけれど、日本ではブラジル人と言われる。私は何人として生きていけばよいのでしょうか?」という日系ブラジル人の方や日本名と中国名の二つの名前の狭間で心揺れる中国帰国者2世の方の悲痛な声は、私の心を大きく動かし、無力な自分を自覚することとなりました。

様々な背景を持つ外国人住民の方々の生活課題に直面し、その方の生い立ちや日本に住む理由、生活していく上での不安、悩み、悲しみ、怒りなどを聞かせていただく度に、言葉や制度、そして私たち一人ひとりの心の中にある国籍の「壁」に阻まれ、地域の中で何らかの生きづらさを感じている外国人住民の方たちが大勢いることを知りました。

しかし、一方で彼らは、とてもエネルギーに逞しく生きていると感ずることがあります。彼らの不安や怒りは、母国から遠く離れた日本で必死に生きていくための原動力となり、ここで生きていくことへの覚悟に変わるのでしょうか。

平成20年秋のリーマンショックにより社会情勢が悪化した時のことです。不安定な就労状況におかれていた彼らは真っ先に仕事を失うこととなりました。全国で多くの外国人住民が住まいを失い社会保障に頼る生活を余儀なくされたと聞いていましたが、この地域で家を失い教会で生活をしていたのは一家族だけでした。自分自身の生活は十分でなくとも、家族や同国の友だちの家で同居したり同国コミュニティで食料を集めたり、互いに支え合う姿がありました。その姿に触れたとき、困難に立ち向かう住民の方たちに寄り添い、共に取り組む覚悟が私にはあるのだろうか。さらに私自身が今の社会の中で、生きるために必死で何かに取り組んでいるのだろうか?という疑問が湧いてきました。

テーゼには、人間らしく生きる権利についての自覚を持ち、人間らしく生きる実践の力を身につけていく働きかけが民主的な社会教育の基礎にあるべきであり、公民館はその民主的な社会活動の発展に尽くすべきであると記されています。当時の主事自身が、様々な社会への憤りを感じながら、また生活者としての自覚にたった学習活動を住民とともに重ねながら、人間らしく生きる力を育んでこられたであろうと想像いたしました。

当時、上久堅で主事として下伊那テーゼ作成に関わってこられた長谷部さんは、「あの当時の主事たちは熱かったし、燃えていた。」と話してくださいました。熱い思いで議論をし、テーゼをつくる勢いで住民の暮らしに真摯に向き合ってこられた先輩方の職員としての姿勢に学ばせていただくとともに、住民から学び、互いに育ちあえる主事会という職員集団のあり方についても一度考えてみたいと思います。

今回のフォーラムは、当時の熱い思いを持った先輩方に叱咤激励をいただいたと同時に、50年、100年先に向けて、私たちがテーゼに込められた先輩方の心を引き継いでいく責任を認識した会でもありました。貴重な機会をありがとうございました。

下伊那テーゼ 50 周年フォーラムに取り組んで

阿智村公民館 大石真紀子

今回のフォーラムにおいて当時の主事さんが集まることにより、下伊那テーゼ策定当時の雰囲気垣間見ることができた。その中で二つのことを考えた。一つは「住民の生活課題と向き合うとはどういうことか」、もう一つは「つながりにくさ」についてである。

岡庭一雄さん、島田修一さんの話からは生活の中の切実な課題を住民自身が切り拓いていく姿が見えた。そしてその過程において公民館主事が確かな役割を果たしていたと感じた。その姿を見た時、私は果たして本当に住民の生活課題を見ているのだろうか。全然見えていないのではないかと思った。

今年度、私は公民館の仕事と並行して、まちひとしごと創生総合戦略という計画策定を担当していた。計画策定にあたっては住民の意見を聞くことが方針に定められていた。この計画は言ってみれば交付金を得るための計画である。そんなことに住民を付きあわせて良いのかという思いを抱えつつ、ヒアリング調査（状態調査）と懇談という形で住民の話を聞き、整理するという作業を一定量こなした。これにより村の様々な課題をある程度俯瞰することができた。ここでわかったことは公民館活動の中で見えていない村の課題がたくさんあるということである。例えば農業分野においてはかなり大きな課題があることが懇談会の中で見えてきた。しかし公民館の仕事をしている限りではこの課題は見えてなかった。農業が最も盛んな地域の地区館を担当しているにも関わらずである。普段関わっている地区館の方々を思い浮かべてみれば、農業に関する課題を抱えていないわけがない。むしろ深刻な状況にある人が多いのではないかな…これが生活課題に出会えていない自分の現状である。個別の課題を個別の課題にとどめている。

もう一つ、感じたことは、現代の主事は「つながりにくさ」を抱えているのではないかということである。

主事会サボり常習犯の私は下伊那テーゼに関する一連の取り組みを通して、飯田下伊那地区の主事と初めて出会った。発表を聞く中では、一人ひとりの主事が大事にしていることがあり、住民との関係も迷いながら、考えながら取り組んでいることがわかった。前例踏襲とか事業消化的な面がありつつも、すごく誠実に取り組んでいると感じた。

一方で会議を重ねても主事同士が「つながっていく実感がない」と感じていた。回数が少ないからということもあるが、数を重ねてもあまり深まらないような気がしている。というのは私自身がつながることを「まあ、いいか。」と放棄してきたからだ。「性格」と言ってしまうとそれまでなのかもしれないが、必要とわかっているのに一歩踏み出せない。この点は先に述べた地域課題を捉えられない自分とも重なってくる。

岡庭さんは地域課題の前に「自らがこの社会でどう生きていこうとしているのか」があると話している。おそらくかつての主事会では自らの生き方を語り合うことで、生き方がつくられていったのだと思う。しかし現代の主事にとっては「自らの生き方」を正面きって語ることは簡単ではない気がする。

若い役場職員と話しているとよく感じるのだが、職場における「できる・できない」は圧倒的な価値基準である。常に評価にさらされる中で、自分自身もその価値基準にしばられている。できないことは時に人格の否定にもつながり、自己責任として自らと他人を苦しめる。そんな中で最後に「自分の生き方」について自分の思いを話せる関係はそう簡単にはつくられない。しかしここを乗り越えないと、今の困難は乗り越えられないのではないかな。じゃあそのために何をしたらいいかというと、正直まだよくわからない。

私はこの地で何を学び、どのように生きていくのか。島田先生の言う「住民から学び、住民に尽くす」存在であるのか。これからの自分が試されていると思う。

下伊那テーゼ 50 周年記念フォーラムなどの感想

名古屋芸術大学 大田 高輝

下伊那テーゼ 50 周年記念フォーラムに出席できて、本当に幸せに想っています。会場の阿智村が名古屋から行きやすいところで良かったです。

まずは、今回のフォーラムの教育的価値について想いを馳せたいと想います。今回のフォーラムの教育的価値は、とりもなおさず日本全国からそうそうたる実践家、研究者のみなさんが集まられたことであり、そうしたメンバーと一緒に下伊那テーゼ 50 周年の意義に関して想いを交わすことができたことにあります。50 年間の実践の積み上げを持ち寄り、50 年間の研究の蓄積を持ち寄り、それらの背景のもとで顔を合わせることができたことは、教育的な刺激を生み出し、新しい価値を萌芽させてくれました。また、社会教育の特色でもありますが、出席者に実践家、研究者ばかりでなく、地域住民など専門家でない方々が参加できたところにも価値があると言えます。もし、学校教育に関するテーゼの 50 周年記念フォーラムなら研究者、教師、もしくは居ても職員までだと思われそうですが、下伊那テーゼの 50 周年記念フォーラムには当たり前前に地域住民や一般の方々が参加していたことは重要な価値だと想います。

そして、次に下伊那テーゼそのものの価値について言及したいです。下伊那テーゼそのものの価値については、多面的に論じられてしかるべきでしょう。わたしはここでは日本社会教育学会誌に下伊那テーゼが発表されたという価値にのみ言及しておきたいと想います。日本社会教育学会の性格から、下伊那テーゼは全国の実践家や研究者に発せられることとなりました。その意義は非常に大きいものだったと言えます。下伊那テーゼが 50 周年を迎えるにあたって、日本社会教育学会もその企画の一端を担うべきだったと想います。そうしてこそはじめて学会が日本の社会教育に実践的にも研究的にも貢献するものになったのだと思われま

さらに、公民館に関して、文部次官通牒でその民主主義的かつ地方分権的な構想が示されてから 2016 年 7 月で 70 年の節目を迎えることにも言及しておきたいです。近刊の日本公民館学会誌に「占領下公民館構想の形成と展開」という論考を寄せましたが、日本の公民館は日本側の精力的な発意にかかり、そこに連合軍側の民主主義化と地方分権化という教育的価値が合致して、文部次官通牒という歴史的な文書が生み出されました。それは同時に日本の公民館の出発点でもあります。こうした公民館の 70 年間の歴史を振り返る上で、下伊那テーゼの果たした役割をいま一度検証してみたいという契機をフォーラムはまた与えてくれました。ありがたいことです。フォーラムは 50 年を締めくくったと同時に、わたしたちに次の 50 年に向けての課題を提起しようとしたものと思われま

社会教育の要諦が「であい・ふれあい・わかちあい」にあることをフォーラムは想起させてくれました。今後、これを契機に阿智村に関連のある社会教育・生涯学習研究所の研究活動などに参画させていただくなど、さまざまな実践・研究交流をさせていただければ幸いに存じます。

「今、公民館の役割を考える」に参加して

前阿智村長 岡庭 一雄

下伊那テーゼ（公民館主事の性格と役割）を飯田下伊那主事会が議論している中に最も年の若い私がいまして。自称公民館主事と自覚する私は、毎月第2水曜日を定期開催とする下伊那郡主事が公民館について学ぶ唯一の場所でした。各町村で行われている、公民館の実践や考え方を参考に村の中で行うということが当時の私の仕事でした。主事会は私にとって、公民館・社会教育を学ぶ学校で、先輩の主事の一人ひとりが周りにはみんな先生でした。そして時々来られて講義をされる大学の教授の方たちは、特別な先生でした。

集中的な学習の機会として、下伊那テーゼの議論への参加は、青年期の思想形成に大きな刺激を与えてくれました。公民館主事という範疇を超えて、「自治体職員として」いかに仕事に向かうべきか、「自治体労働者として」いかに生きるべきかを学ぶことが出来たのであります。

下伊那テーゼがつくられた1965年ごろは、60年安保闘争を経て民主的な運動が各地に存在し、青年団も婦人会も活動をしており、住民の中で公民館は学習やスポーツのよりどころとしての役割を果たしておりました。60年から始まった我が国の経済構造の大転換の中で、農村地域に大きな矛盾をもたらし、変化にどう対処していくかが住民の中では関心事となっており、こうした住民の学習要求にどうこたえていくかが公民館主事の最大の課題でありました。

しかし、現在の状況は当時と大きく異なっています。公民館の基盤である地域が住民にとって大きな関心事でなくなってきました。また、当時と同じような大きな経済構造改革の中におり、格差をはじめ矛盾がもたらされていますが、一般の住民の目にはその問題点が見えにくくなっています。（学習へのきっかけとなる）地域課題や生活課題として認識されにくい状況がつくられているのです。それに加えて住民の皆さんが得ている情報量は当時とは比べ方がないくらい多くなっています。

こうした中で住民の学習要求は潜在化しており、表面的には「ない」のではないかと見えていと思います。あるいは、自分の得ている情報によってわかったつもりでいる住民も存在しています。

それではもう社会教育機関としての公民館の役割は終わってしまったのかと考えることが出来るのでしょうか。

そうした中で開かれた今回のフォーラムは、現在公民館主事として頑張っている若い皆さんの手によって開かれた意味は大きいものがあります。

その基本には「社会教育機関としての公民館」という認識が共有されていたからと考えます。

できるなら、かつて私が主事会で学んだように、恒常的な学びの場によって改めて公民館とそこで働く主事の役割を論議し、「現代版・下伊那テーゼ」をつくられることを期待します。

「今、改めて参加した喜びをかみしめて」下伊那に学ぶ

北海道訓子府町長 菊池一春

第55回社会教育研究全国集会（盛岡）で細山俊男さんから1枚のチラシをいただいた。それは、「下伊那テーゼ50周年記念フォーラム」の案内チラシだった。町長の仕事は超多忙、殺人的な日程だがどうしてもこの1枚のチラシが気になり、10月23日から25日までの3日間は他の予定を入れないようにと担当職員に懇願した。

最近お会いできずにいる松下拡さんや島田修一さん、きっと参加するであろう岡庭一雄さんと手塚英男さんに会いたい気持ちにかられた。特に松下、島田さんとは今生の別れになるのではと思ひ込み、さらに阿智村の「満蒙開拓記念館」をこの目で見てみたいなど、様々な思いが輻輳した。

2006年5月、平成の市町村大合併の嵐が吹き荒れる中、私は翌年の統一地方選挙で訓子府町長に立候補するべきか思い悩んでいた。私にとって社会教育の原点とも言える「下伊那テーゼ」、その後の下伊那の公民館、地方自治はどうなっているのか確認してみたい思いに駆られた。千野陽一、島田修一さんにアドバイスをいただき、松川町、大鹿村、高森町、喬木村、阿智村、泰阜村を駆け足で訪ね歩いた。憲法学習はもとより健康学習、市町村合併問題、農村歌舞伎と町おこし、ブドウ生産農家とワイナリー、高齢者による「楽ちん農業」等々公民館の学習活動、住民による学習活動の延長線上、時代を超えて「下伊那が生きている」と思えてならなかった。松島貞治泰阜村長から「菊池さん北海道が変われば日本が変わる。決断すべきだよ」と背中を押された。

10月24日、念願叶って阿智村公民館で開催された記念フォーラムに参加することができたが、「参加実現」それだけで私は十分だった。

岡庭一雄さんと石井山竜平さんとの対談に、「住民に寄り添う、住民と共に課題を発見し学ぶ合う大切さ」「社会教育と科学、反逆性」、何度もその通りと賛同した。松下拡さんが組織者になりながら若き公民館主事による実践検証とフロアーとのやりとり。「わが町の公民館職員としたい変わらん」と思いつつも、松下さんの厳しい問いかけ、参加者から「公民館は私ども住民の声に耳を傾けて」「高齢者や介護保険の問題に社会教育はどのように」等々、質問から逃げないで懸命に、誠実に向き合おうとする職員の姿に、「下伊那は現在も生きている」と思えてならなかった。そして私たちの育った時代、職場、地域、学園で学び支え合い、高めあい、育てられた時代とは違うのではないのか。むしろ私たちの世代が若者を批判するだけでなく、どのように伝えていくのかを問われているように思えてならなかった。

島田修一さんの講演、下伊那テーゼの時代にさかのぼり資料によって丁寧に元気にお話しする姿は、故郷に帰省した公民館主事をほうふつさせた。島田修一さんの不当配転闘争に参加したであろうかつての喬木村職員、村民の皆さんは、彼の元気な姿に喜びと感動、自分達が時代を島田講演に重ねているのではと勝手に想像してしまった。

私は全体交流会で島田修一さんに思わず「その昔、肩幅の広い職員の陰に隠れて住民が見えないと私を批判したが、喬木村時代の島田さんは私以上に肩幅が広くなかったのか」「民が公を囲みの考えは自然発生的ではありえない。そこに学びと共に実践的な運動、反逆性が求められるのか」と憎らしい質問をぶつけた。島田修一さんがどのように答えたのか記憶が定かではないが、何時までもお元気で、私たちに展望と示唆を、警鐘を鳴らす存在であっていただきたいと今も変わらず思い続けている。

年が明けて1月2日、記念フォーラムから2か月がたった。妻と共に愛する吉永小百合さん主演「母と暮らせば」の映画を観に行った。上映中は涙が流れて止まらなかった。それは満蒙開拓記念館を訪ねた際にこみ上げてきた涙と同じであり、「平和」を求める未来からの呼びかけと思えてならなかった。

感動の「下伊那テーゼ50周年記念フォーラム」、準備された皆さんと、私の参加を応援してくれた岡庭一雄、幸子ご夫妻に心からお礼を申し上げ、思いっくままに駄文を労したことをお許しいただきたい。



手塚英男さん評「最初で最後の歴史的写真」

10月24日（土）下伊那テーゼ50周年記念フォーラム 参加レポート

竜丘公民館主事 熊谷 隆幸

「下伊那テーゼ」という言葉を聞いたのは、公民館主事になって2年目でした。初めて下伊那テーゼを読んでみての率直な感想は、「社会教育や主事の役割など、共感できる部分、理解できる内容もある反面、社会状況の変化もあり、理解しにくい部分も多くある。」というものでした。それと同時に、50年経過しても変わらない部分があり、そこが大切な考え方であったり、公民館の役割のぶれてはいけない柱なのではないかと感じました。その大切な部分を明確にする機会だったと思いました。

特に今回のフォーラムでは、「主事の想いではなく、住民の方の声を聞き、個人の課題を地域の課題にしていくこと。」「教えるのではなく気づいてもらうこと。」「そして「住民主体の学習と実践」などに共感しました。また、教育の持つ叛逆性や、その中でも政治や行政との対立を当然とする学習などは、現在は取り組みにくさを感じていると同時に、必要性も感じており、非常に考えさせられました。労働組合の関係では、主事も一労働者としての立場となることで、『主事と住民』ではなく、『労働者同士』という立場で話し合い、課題を考える機会になったのだと感じました。

そのような中で、聴講者から「高齢者福祉の勉強をしているのか」や、「主事がフィルターをかけているのではないか」といった意見が聞かれました。しかし、市公大会では福祉や平和・人権などのテーマが取り扱われるように、主事として必要性は感じているが、価値観の多様化やまちづくり委員会との関係性など、取り組みにくさも感じているのが現状だと思います。上記のようなテーマの学習会についても、「主事がフィルターをかけている」という一方的な考え方ではなく、住民の方々と話をする中で組み立てていくことが公民館の役割だと思うので、多様な価値観のある現代だからこそ、恐れずに取り組む、主事の主体性と住民の主体性が問われていると感じました。そして、その為には地域や社会のことを常に学び続け、課題の核や、物事の本質を見極める力量が主事には必要で、主事の専門性の一つなのだと思います。本質を見誤った主事が主体性を持つことは、地域にとって大きな損害になることを肝に銘じて、公民館主事は学び続ける必要があります、そのために主事会は貴重な研修の場、研鑽の場だと感じました。

フォーラムとしては、主事仲間の事例発表をとおして、表向きの成果や考え方だけでなく、その事業ひとつひとつ、住民との関わり方ひとつひとつに対して、主事の考え方や本音を聞きだしながら展開され、主事として大事にしている部分などを、下伊那テーゼと照らし合わせながら聞くことができ、とても興味深いものでした。企画運営に携わった関係者の皆様、登壇された方々、大変お疲れ様でした。

私は公民館主事2年目でテーゼに触れ、3年目にフォーラムで深めることができ、とても良いタイミングで学ぶ事が出来たと思います。今後も、自分なりに公民館主事の性格や役割を考えながら、地域のために活動していきたいと思っています。

信州からつながろう

諏訪郡下諏訪町在住／法政大学非常勤講師 栗山 究

下伊那テーゼ50周年記念フォーラムでの公民館主事の実践を聞く会に参加し、私も埼玉・東京での社会教育職員時代の実践と、そこでの仲間たちと行なっていた研修の意義を思い出しました。

当日の発表を聞いていると、実際の地域社会に向き合う若手主事たちの苦悩には、私自身が埼玉や東京での実践で直面してきた課題と重なり合うところが多く、共感できるところが幾つもありました。「都市だから」「農村だから」という境界ではなく、そうした垣根を超えて現在の私たちが置かれている時代とそこから得られるこれからの地域社会の具体的ビジョンを、職員自身が住民とともに相互に語りあいながら真剣に見つめていく機会が、いまの私たちには必要であると感じています。

同時に、自分たちの実践を語りあう場が、自分たちの暮らしている身近な地域にあることの必要性を、あらためて強く実感いたしました。実際に一町民としてどのようにして動いていけばいいのか、そうした手立てを自分の住んでいる信州での取り組みから真剣に考えてみたいと思っています。

実践論議から生まれる自治活動と社会教育

阿智村 高坂和男

先日の下伊那テーゼ記念フォーラムに参加して最も感じたことは、私が社会人になり、初めて自分の生活の自立や社会環境に付き関心を持つようになったころの話であり、非常に興味が湧き注視させられました。

岡庭一雄氏の述べられた実践に基づく論議からの積み上げが、そこから生まれるものが真の協働の社会づくりだと私も思っています。

私は技術屋として仕事に就き、その仕事に誇りも持ち、働きに見合う対価と生活環境を得ると共に、本来人間として生きるための平等と福祉また平和とか自然環境をどのようにしたら守り維持して行けるかなど働いている仲間・組織の中で話したり活動してきましたが、近年では日本経済が良くならねば人間としての平等も福祉も成り立たないなどと言う主張・経済優先施

策によって、福祉も平等も自由も抑圧されているのではないかと感じます。そんな今こそ公民館活動の基本理念を学ぶ期会を持つことの意義は本当に大切と感じています。何故なら、50年と言う年月は時代情勢も変わるし、マンネリ化と言う現象も生まれます。また一方で人間の脳は忘れることによって新しい物を受け入れるスペースを脳に与える物だと言う学者もいます、公民館活動で継続が必要なものは再認識という学びの場を持つことが必要不可欠で有るし、憲法改正だ原子力発電再稼働だなどろくな議論・審議もせずに、国民や住民主体でなく政府の押さえつけ的な行政のやり方はあまりにも理不尽であり民主的ではないと感じます。

私たちは今こそ人間に一番必要なものは何かを学ぶ場をこの公民館活動に求め、利用し、協働の意を理解できる人づくりを、本当の「自由・民主主義とは」を身に付け民意での実践をし、協働の村づくりをして行かねばと認識しました。これからも社会教育活動と実践の中での学びで、幸せを感じられる協働の村づくりをして行きたいと思っています。

下伊那テーゼ 50 周年記念フォーラム所感

飯田市民館主事 小島 一人

まず初めに、今回のフォーラム参加によって、公民館主事としての自分自身のあり方に真摯に向き合う時間をいただけたことに感謝を述べたい。フォーラム内で出てくる言葉の一つ一つを聴きながら、それを受け止め自問自答せずにはいられなかったのは、諸々の話が徹底的に「経験に基づいた生の話」だったことに加え、その裏側に見える当時の主事の熱や想いを目の当たりにしたからだと感じている。言ってみれば、その熱に“あてられてしまった”のだと思う。自身の未熟さを強烈に意識するこの機会は、私にとって非常に尊いものだった。

島田さんの主事時代の経験として話題に出た農家の女性の話や、手塚さんが今の主事に問いかけた介護保険制度の話。それらを通して見えてきたものは、自分たちが向き合っていくべき「課題」というものの「質」や「幅」、そして、社会や時代は違えども生活の場でありながら顕在化してこない課題に向き合うことへの「責任」と「覚悟」だったように思う。

フォーラムに参加している間、自身の5年間の主事経験とそれらの話を照らし合わせながら「果たして自分にはそこまで踏み込む力量と覚悟があったのか」という疑念を払拭できずにいた一方で、私は私が出会った何人かの地区住民の方々のことに想いを馳せていた。主事として地域の様々な事柄に交ぜてもらい多くの人と出会ってきたが、経験年数が増すにつれ、個々の生活やそこにある想い、不安、悲しみ、怒り、悩みといったものを垣間見ることが時折でてくるようになったと記憶している。障害の話、介護の話、子どもとの向き合い方の話、育ってきた環境の話、どれも極々プライベートで繊細で生々しいものであり、その時まさにその人たちの生活の中で起こっていることだった。そして、私はただただ話を聴く以外何もできないまま異動した。フォーラムで話を聴いたこの時間が、記憶に埋もれた自身の経験を、これからの自分にとっての「覚悟」に変えた瞬間だったと感じている。

「学びとは、意識の変革である」と、かつて松下拡さんが言っていた。「学習を支援する」ということの意味を、話をしていただいたみなさんの生き様に見た気がした。フォーラムを通して感じたことは、主事とは、「仕事」ではなく「あり方」なんだ、ということ。そして、今私は貴重な経験をさせてもらっているんだ、ということ。

下伊那テーゼはもう50年も前の話だが、その頃と比べて今の主事はどうか。果たし

て自分は、そういう人間になれるだろうか。答えはわからないが、私には仲間がいる。あの頃の「熱」を引き継いでいくのは私たちなんだということを伝えられた、そんなフォーラムだったように思う。

下伊那テーゼ50周年記念事業に取り組んだ日々を振り返って

阿智村公民館 櫻井拓巳

下伊那テーゼと向き合いながら取り組んだこの1年間は公民館の役割と主事という存在について、より深く考える一年となった。

阿智村の公民館の主要事業、「社会教育研究集会」「阿智祭」「駅伝大会」はまもなく50回を迎える。それらの50回記念事業を考えているときに思い出したのが「下伊那テーゼ」だった。じゃあ下伊那テーゼは何年くらい前だろう？ ふとした思い付きから始まった下伊那テーゼ50周年記念事業は、最終的にはフォーラムという形で実施することができた。

大学の授業でその存在を知っていながら、これまで下伊那テーゼは読んだことがなかった。「時代が違うから…」と言われることもあるが、実際に読んでみるとその内容は現代の課題に通じるものがあり、主事としてどうしたらよいのかということについて、普遍的な問いかけをされていると感じた。そして、普段の自分がどれだけ住民と向き合い、地域の課題と向き合っているのか、課題解決のために主事として何かできているのかをより深く考え、自分が主事としてやるべきことは何かを改めて考える機会となった。下伊那テーゼは、公民館と主事の存在や自分個人の考え方を励ましてくれているような気がした。一方で、かなりのプレッシャーも感じた。日頃の公民館活動を振り返ると、どうしても自分が情けなく、ふがいなく感じてしまう。特にそれを感じたのは、阿智村で毎年行っている「社会教育研究集会(社教研)」を通してだった。

社教研は住民からなる実行委員会と公民館の共催というかたちで実施していて、中央館の主事は事務局を担っている。分科会については分科会ごとに実行委員+αで運営委員を組織して実施している。今年は7つの分科会を行ったが、子育て分科会は思うように準備が進まなかった。

当日は比較的参加者も多く、なんとか無事に終わった分科会であったが、後日の反省会で分科会の運営について問題が提起された。それは、「実行委員会に子育てをしている当事者が来ず、来ても1~2名の参加であったのは残念であり、今後このようなことがあった場合は中止もやむを得ないのではないか」というものだった。確かに、保育園の保護者会やPTAなどに声をかけたが、委員会に出てくる人はごくわずかだった。今子育てをしている当事者が出てこない中で、そうでない人からすれば、やる意味があるのか疑問に感じてしまうということもあるのかもしれない。しかし、当日は子どもを連れた母親が何人も出席し、普段話せない悩みなどを共有できて良かったと言ってくださった。そうしたことを考えると、実行委員会には出てこられなくても、問題意識や何か話したいという気持ちを持っている人は、現役の子育て世代にもいることが解る。おそらく、現段階では、そうした当日だけでも出てきてくれる人を増やし、出てきてくれた人をつなぎ活動の輪を広げていくということも、子育ての課題を考える上で重要なのだと思う。

こうしたことを通して考えたのは「主体性」という言葉についてである。子育て分科会では、打合せに現役の子育て世代が出てこないことについて、その世代の「主体性」がないとして分科会の中止を求める声が出た。しかし、子育てという課題について考える主体とはいったい誰なのだろうか。そもそも地域の課題として子育てを考えれば、主体は現役の子育て世代に限られない。そして、自分自身へ問いかけとして「公民館としての主体性」はどこにあるのかを考えた。見えてきた地域の課題に取り組もうとするとき、公民館は何ができるのか。当事者とされる人たちが主体的に課題に取り組めていないような状況にあるのならば、その主体性を引き出すために私たちは何ができるのか。主事は住民の主体性ということだけでなく、私たちが何をしなければならないかという公民館の主体性についても問われていると感じた。

さらに、今回の社教研では「地域の課題」とは何かということについても意見があった。「社教研は地域の課題を考えるものだから、平和のような日本や世界について話し合っている分科会はなじまない」というものである。社教研でどのようなテーマをどう取り扱うかは、様々に検討していく必要があると思う。しかし、地域の課題となっていることの要因に日本や世界の情勢があったり、反対に、私たちの何気ないくらしが日本や世界の情勢を決定づけていたりすることも確かだ。そうしたことを考えれば、地域の課題の範囲を狭めてしまうことは、地域の課題を見えなくしてしまうのではないだろうか。地域とその外とをつなぐ学びも地域の課題を考える上では重要なはずだ。

さて、下伊那テーゼが出されてから50年、半世紀が過ぎ去った。この間、社会教育は何をしてきたのだろうかと思うときがある。正直、この仕事に就くまでは公民館という存在も近くなかったし、社会教育もどこか遠い存在だった。おそらくそれは多くの人の「普通」なのではないだろうか。しかし、この仕事をしていると、現代日本の政治的無関心といわれるようなことは、社会教育が思うように機能してこなかったことに一つの原因があるのではないかと思ってしまう。

今年度、阿智村公民館で取り組んだ事業の中に、戦後70年事業があった。「阿智村青春時代史～アントキノキモチ～」と題して、90代から順に各世代が20代だった頃のことを振り返り、戦後70年の歴史を振り返ろうというものであった。その中で私が印象的だったのは「青年団」とか「組合」とか言われるものだ。そこでどういう活動をしたかということも興味深い。それ以上に、そうしたつながりがあって、楽しそうに当時の思い出を語ることが羨ましく思えた。若い世代にもそうしたつながりがあったからこそ、何かを考え、お互いに共有し学び合うことができたのだと思う。そしてそれは時に政治的な運動にも繋がった。しかし、現代はそうしたつながりは限定的になってしまっている。暮らしや経済の状況に翻弄されながら、おろそかになってきてしまったものも多いのではないだろうか。

私が暮らす清内路地区には青年会がある。学習活動や政治的な活動をしているわけではないが、地域に暮らす若者が集まり話す場所がある。時には地域の学習会と一緒に参加しようかという話にもなる。社会教育とは、そうした住民同士のつながりの中から生まれてくるものが多々あるのだと思う。

この一年間を改めて振り返ってみると、「つながり」という言葉を意識することが多かったように思う。人と人のつながり、人と社会のつながり、一見別々に見える課題と課題のつながり。そうした様々なつながりを意識しながら、また、自分自身もより多くの人とつながりながら、今後も社会教育を実践していかなければならないと思う。そして、更に次の50年も下伊那テーゼが生きる地域で有り続けられるようにしたい。

とりとめのないことを色々書いたが、社会教育や公民館の役割はとてもデカイ。そしてそこで働く主事の役割というのはかなりプレッシャーになるものでもあるということを、改めて思い知らされた一年だった。正直なところ、これからの社会教育、公民館活動に自分は何ができるのかわからない。しかし、人と人をつなぎ、地域で学び合いながら、少しずつでも成長できるような、そんな取り組みを確実にすすめていきたいと思う。

下伊那テーゼ50周年記念フォーラムに参加して

飯田市松尾公民館主事 下岡祥平

下伊那テーゼ50周年記念フォーラムに参加し、事例研究の部分で報告者の一人として発表させていただきました。事例研究のテーマは「今日の公民館実践における主事の悩みと役割」ということで、一つの事業を例にとって、その事業ができた背景から既存の事業の課題や問題点、そこから新たな事業を計画したことについて発表しました。どのようにすれば地域にとって効果的な事業になるか、事業に関わっている住民の皆さんと話し合いを重ね、住民の皆さんとともに事業を実施できたことに達成感を感じました。

しかし、当日のフォーラムの中で、「地域に向き合うとはどういうことなのか？住民の課題意識の本質はどこにあるのか？」と問われ、本当にわたし自身が地域の課題を掘り起こせていたのか疑問を持ち、まだまだ地区の背景や地区の現状を奥深く見ることができていなかったのだと痛感させられました。住民が課題に感じていることは、ただ会話を交わすだけでは見えてくるはずもなく、何度も何度も会話を重ね、主事と住民の関係ができてくることで、少しずつ見えてくるのではないかと思います。住民の皆さんが本当に課題と感じていること、悩みというものはもっと別のところにあるのではと気づけたことは、このフォーラムに参加しての大きな収穫でした。

日常業務の中では、少しでも住民の皆さんと会話をして、課題や悩みを把握しなければいけないと考えていますが、事務的な仕事や恒例の事業等を進めていくのが精いっぱい、地域に入りこんで地域の現状を知り、今どのようなことが求められているのか把握しきれていないのが現状です。事務的な仕事や恒例の事業も当然大事な業務ですが、住民の皆さんとの会話は“宝”だと思いますので、その部分を常に肝に銘じて取り組まなければと考えています。

下伊那テーゼから50年が経過し、時代背景や社会の状況は違うと思いますので、50年前の主事の仕事を真似する必要はないと思います。しかし、当時の主事の皆さんは、真剣に地域と向き合い、地域を良くするため、魂を込めて公民館主事を務められていたのだと思います。そのような先輩の皆さんがいたからこそ、わたしたちが地域住民と議論しながら地域づくりを進めていく土壌ができていると改めて感じます。当時の主事の皆さんの姿勢については、現在の主事も大いに見習わなければならないと思いますし、次世代につなげていくために大事にしなければならないことでもあると思います。そのあたりについては、先輩の皆さんのお話を直接お聞きしたいと思います。

ちょっとした悩みから途方もない悩みまで、公民館主事を務めている間は悩みが尽きませんが、住民の皆さんと話をする中で解決することがたくさんあります。このフォーラムを通じて主事の仕事の難しさを痛感させられましたが、その分深みがありおもしろい仕事でもあると感じます。住民の皆さんとの会話を大事にするとともに、住民の皆さんの公民館への期待を感じ、

使命感・責任感を持って主事の仕事に取り組もうと決意を新たにしました。

承認の空間をつなぐ公民館活動を

辻 浩（日本社会事業大学）

下伊那ターゼ 50 周年記念フォーラムに参加して改めて確認できたことは、下伊那ターゼが出された背景に、住民の生活を見据えた実践があったということです。高度経済成長の中で、地域がつぶされようとしていることや住民の健康問題が生じていること、働く青年が学ぶことから排除されていることなどに対して、人びとの声を聞き、学習を組織し、実践につなげる公民館職員がいたということです。

このことについて、現在はどうでしょうか。社会教育が趣味や実技しか行っていないということはありません。少なくとも公民館職員がかかわっているものは、現代的な課題や地域の課題を念頭においていると思います。それにもかかわらず、なぜ現在の社会教育は住民生活や社会の問題に突き刺さっているという実感がもてないのでしょうか。そのことを考えることが大切だと思います。

今の社会は、本来であれば連帯できる人たちが巧妙に分断されています。それは子どもの時から始まり、学業成績の上下で分断され、中間に位置する子どもも上昇意識を背景にわずかな差異で他者との違いを見つける気持ちが育てられています。そのようにしてできた一元的な序列意識は、自己責任論と結びついて、困難な状況にある人のことをさげすんだり、そこまで思わなくとも自分とは別の世界の人と想ったりするのではないのでしょうか。このような分断に向かう気持ちは、大人になるとさらに拡大するとともに複雑になり、学歴、職業、所得、家族、住宅、地域、政治的立場、健康状態など、あらゆる面で違いを際立たせ、共通の課題を負っているという意識を持ちにくいばかりか敵対的にすらなっています。

それに加えて、個を尊重するということや民主主義的であるということが歪曲してとらえられていることも大きいと思います。価値観や活動が多様になり、その情報がインターネットで流通している今日、自分自身で判断して自分にふさわしい行動をすることがしやすくなったという意識が広がっています。そのような中で、話し合うということは、意見の違いに遭遇し、それを深めようとすると思いの押しつけと取られてしまいます。そういう状況が、共通の課題を見つけにくくしているのではないのでしょうか。

このような一般状況がありながらも、障害のある人、民族的なアイデンティティを求める人、ひきこもり状態から立ち直ってきた人など、抑圧を受けている人たちを中心にした活動は小さな規模ではあっても活発です。そこでは社会を考える際に暗黙の前提にしてきた「階級意識」に代わって、「帰属意識」が重要になってきていると言われています。このことを意識すれば、受け入れられる体験を通して心と体が元気を取り戻すことから始めることが、今日の社会教育の課題になってきています。そしてそれは、事業として行われる学級・講座で追求されるものではなく、その前後の活動や、さらに言えば、公民館の外にも広がる日常の中での出会いやふれあいの中で満たされるものだと思います。小さく閉鎖的になりがちな「帰属意識」を育む承認の空間を相互につなぎ、社会につなぐ公民館活動のあり方が求められているのではないのでしょうか。

「住民より」

匿名希望

この度は、一般人の私にもフォーラムに参加させて頂きありがとうございました。

参加の多くの方が、『社会』に生き『地域』に関わり、住民に目を向けようと様々な試みをされていることを知りました。

また、われわれ住民も一人一人が『地域や社会』を少しだけでも意識することが、とても大切な事だと感じさせられました。

しかし、問題を抱えた悩める住民は、外に目を向ける余裕がありません。「社会で何が起ころうが、知らぬこと。問題は家庭の中、自分自身の中にあり、それと闘っているから。」

どんなにすばらしい制度があっても気付かないでしょう。

やはり、最後は寄り添い、手を差し伸べてくれる『ひと』が鍵になると痛感しました。

手を差し伸べるのは『主事』の方だけでは、到底無理なことです。多くの方々の意識に働きかけ、多くの力が育つことを期待いたします。

『地域』は外側から眺めているととても『厄介な世界』に見えます。しかし、一步踏み込んで、その中の一人一人と接し、活動をすることで、『厄介な世界』が『たのもし世界』になることも実感しています。公民館でさまざまな試みをし、一人でも多くの方がその『一步』を踏み出されることを期待いたします。

今回参加させて頂いたことで、これからの自分のありかたを考えるよい機会となりました。ありがとうございました。

下伊那テーゼ レポート

丸山公民館主事 西脇充

今回の記念フォーラムでは、特に事例検討が面白かったです。4人4様。それぞれの主事が、どう課題を捉えているか。自分自身にも活かせるいい経験となりました。

下伊那テーゼの時代と現代の大きな違いは、「主事に対する地域からの訴えかけの具合」だと考えています。松下拓さんが事例検討の時に「地域課題の把握」という言葉を何度も使っていましたが、「地域課題の把握」と一言で言っても、現代の主事がそれを知るためには、主事自身が地域に入り込むために「自ら」行動を起こさないといけない。「情報化社会」が進んできており、自ら行動を起こさなければ、情報が入ってきにくいと感じています。僕ら現在的主事は「下伊那テーゼをどう現在に活かせるか」を自らの行動をもって検証していく必要があると感じました。

そして、下伊那テーゼが自分の地域でどう受け止められ、活かされたのか。自分の地域ではテーゼを踏まえてどのように地域課題が公民館に取り上げられ、そして学ばれたのか。現在の状況を知るだけでなく、自分の地域での当時の資料を分析したり、話を聞いたりすることで、「主事自身が学習のプロセスを学ぶ」ことも、現在、そして未来の地域をより良いものにすることにつながるのではないかと考えています。

下伊那テーゼ 50 周年記念フォーラムから学んだこと

南信濃公民館主事 林優一郎

最近自分の生活の中で大きな変化があった。骨折し入院していた祖母が3カ月ぶりに退院してきた。93歳という高齢もあり、入院する前から認知症の傾向があったが、環境の変化から、より進行していた。退院してきてから、「自分の家に帰りたい。家でやらなくてはいけないことがある。」の一点張り。何時間ここは家だと話したのだろうか。時間を費やす事による家族の感情の変化。言葉は強くなり、家族の中では今後どうしていいのか、どう接すればいいのかわからないといった不安。退院して数時間でのことであつた。

翌日、出勤し企画していた講座の打合せのための地域にある特別養護老人ホームの所長を訪ねた。そこで、個人的なこととは思いつつも昨日の状況を話した。所長から介護保険の制度的なことを含めた丁寧なアドバイスと指導員の対応の仕方など教えて頂いた。何となく今後の方向性が見え安心したことと、親身になって話をきいてくれる所長に感謝の気持ちが湧いてきた。その後、所長から「この地域にも同じ状況の人が多くいるんだよ。それと今直面していなくてもこれからその現実と向き合わなくてはいけない家庭も多くある。だからこそ公民館でやることがあるんじゃない？」と所長からの言葉。所長は広報委員長でもあり、この課題をテーマに館報を作りたい、そしてもう一つの特養の立場として、地域の方の不安を解消するような取り組みを一緒に行いたいとの提案。次年度の活動のテーマに“認知症”を置きながら、地域にあるNPOやまちづくり団体と一緒にやっていこうと前向きな話もいただき、何か色々なものが繋がり拡がりを見えた様に感じた。

さっそく他の方にも話を聞きに回ると、同じ様に感じている人が多くいた。Aさんは、認知症の親を2人抱えており、自分の時間がないことは聞いていた。再度話を聞くと、制度があっても本人が行きたがらないから使えない、無理に行かせることがいいのか悩んでいた。行政のリフレッシュ事業があってもその際誰に見てもらえばいいのか？といった話も出てきた。そして、もっと同じ悩みを持つ人や、どうやって向き合っていけばいいのかを一緒に勉強したいと。今まで聞いた事がなかった本音を2時間近く語ってくれた。またBさんからは、子どもの一時預かりみたいな短時間でも見てくれる制度が、高齢者が多いこの地域だからこそあるといいなどの提案をいただいた。これらの話を基に保健師なども含め、新たな活動展開を検討していくことになった。

今、自分は直面した課題に対し純粋に学び、そして学んだことを活かしたいと個人として思っている。また、個人で学ぶことだけではなく、同じ様な課題を持つ人の話を聞きたいと感じている。この様に感じているのは自分だけではなく、地域に出てみると同じ様に感じている多くの方がいた。そして自分をさらけ出し、話す事により、本音を語り向き合ってくれる地域の方がいた。公民館主事としてどうあるべきかは常に問いかけつつも何か見えた様に思う。

今回の件で、下伊那テーゼ 50 周年フォーラムに参加して自分の中に落としきれなかったものが何となく分かった様に感じる。今まで地域の声を聞きながら組立をしていたつもりになっていなかったらどうか、地域の声の背景にある事柄をしっかりと見ていたのだろうか。と今までの主事としてのあり方を問い質すと同時に、個々の生活課題に目を向けること、学習を組織化するといった手段、実践や実践までのプロセス、そして地域住民の主体性を育むといった公民館が培ってきたものの大切さを、フォーラムに関わったことと今回の事例により自分の中で結びついた様に思う。先生方がお話しされた“当事者”と言った視点は、今自分が当事者になった時見えてきたことである。もちろん、全てのものに自分自身が当事者になれるわけではない。しかし、自らが当事者になって聞いた声は、背景にあるものを以前よりも深く捉える事が出来

たように感じる。この経験は間違いなく今後の主事として地域の声に耳を傾ける時に役立つと思う。公民館の役割を定義づけて話す事は自分にはまだできないが、感覚として得たものが今の自分にある。これをきっちり整理し、先輩方が繋いできてくれた公民館活動や想いを今後の活動に活かせるよう、主事としての歩みを進めていきたい。

下伊那テーゼの衝撃。

信州大学人文学部 2 年 速渡 普土

全体を通して、地域住民の痛み(悩み事)を地域全体の問題にしていき、学習機会を作っていくということが重要であるということが強調されていたと感じました。このことに関連して、ある小さなベンチャー企業の社長さんから「顧客の pain(痛み)にビジネスチャンスがある」ということを教えていただいたのですが、このことはビジネスの世界の話だけでなく、地域においても同じように考えることができるのではないのでしょうか。地域において“pain”があった時に住民自身が声を挙げて問題解決に向けての学習機会を作る。また、そうした地域における“pain”を公民館主事が見つけて学びの機会を作る。ビジネスにおいて“pain”はビジネスチャンスですが、公民館において“pain”は学びのチャンス(“チャンス”という言葉では軽すぎるかもしれないので、“学びのきっかけ”)だと言えるかもしれません。近年、社会問題・地域課題等をビジネスの手法で解決していく「社会起業家」というものが注目されるようになってきましたが、地域の課題・痛みを見出してその解決に向けて立ち上がるという点で、公民館活動や住民自治にも通ずる部分があるかもしれないと感じました。また、“pain”を地域住民自身が掘り起こせる土壌ができている地域はこうした「新しい仕事」を作っていくきっかけになるかもしれないと思いました。一方で上記のような過程で、島田さんの「社会教育は学びづくりであって、事業づくりではない。」というお言葉が示すような“学び”の視点も落としてはならないと感じました。

また、島田さんの「地域に学ぶ人間を育てるのが社会教育だ。」というご指摘や「地域づくりは人づくり」等人材育成に関するお話をお聞きして、ふと思い出した言葉があります。

『(自分が死んだ後に)金を残すのは下、仕事を残すのは中、人を残すのは上』

私が十年以上続けているボーイスカウトの日本連盟初代総長の後藤新平(東京市市長として社会教育課を創設 等)が臨終の間際に後進に諭した言葉だそうです。こうした「人を残す」ということに関して、公民館や社会教育が、そして下伊那テーゼが大きな役割を果たすのではないかと今回参加させていただいて強く思いました。

今後の日本は日本史上初めての人口減少時代・高齢化・グローバル化や移民問題などいろいろと課題がある中で、自分や地域の将来・仕事・生活と“公民館”というものをどう結びつけるか・どのような関わり方をしていくべきかということをも自分なりに模索している最中です。戦後、多種多様な歴史的な波の中で、様々な方のご尽力によって継続され、そして発展されてきた公民館活動・社会教育実践について知ることは、将来の地域の在り方・変わるべき指標として非常に参考にすべき部分が多いと感じています。

今後私自身の問題として、飯田下伊那育ちの人間としても、これから日本社会を担っていく一人の住民としても、当事者意識を持って様々な方々から学ばせていただきたいと思います。恥ずかしながら、「公民館主事」という仕事を知ったのはここ一年つい最近のことですが、今回

下伊那テーゼ制作に関わった方々、現役主事の方のお話を聞いて、改めて素敵な仕事だなあと
思うとともに、下伊那テーゼを読んで公民館主事の方々の熱い思いが伝わってきて、感動・衝
撃を受けました。こういった有意義な会に参加させていただいたことに感謝しております。住
民として、学生として、「ほんものの学びとは？」と自分に問いかけるきっかけをいただきました。
ありがとうございました。

下伊那テーゼ 50 周年記念フォーラムの感想

福島達也

下伊那テーゼ 50 周年記念フォーラム。「いま、改めて公民館の役割を考える」に参加した感
想について書かせて頂きたいと思います。下伊那テーゼという歴史的背景がある飯田下伊那地
域において「いま」「改めて」公民館の役割について考えるというので、期待して参加しまし
たが・・・率直に言って肩すかしをくらったような気持ちになりました。本当に参加した公民館主
事の方たちは「いま」という時代背景、そのコンテクストをきちんと捉えられているのか。今
の時代の地域社会における公民館の役割、その存在意義について危機感を感じていないのか。
疑問を感じました。

例えば、以前にさいたま市大宮区の三橋公民館が「梅雨空に『九条守れ』の女性デモ」と詠
んだ市民の俳句の月報への掲載を拒否し、大きな問題となりました。句を詠んだ女性は都内に
出かけた際、「9 条を守ろうという」という女性のデモに遭遇し、その時の心情を句に詠み込ん
だといひます。女性は掲載を拒否されたことに「納得いかない。公民館に私の句をいいとかダ
メとかいわれる筋合いはない。17 字で9 条のことを伝えたいと思った。公務員はそもそも憲
法を守る側ではないのか」と声を荒げたそうです。三橋公民館は後日「不掲載」としたことを
女性に謝罪し「決して俳句の内容を否定するものではない」とした上で、「九条守れというフレ
ーズは、憲法を見直そうという動きが活発化している中、公民館の考えであると誤解を招く可
能性がある」と掲載を取りやめた理由を述べました。それに対して女性は「そもそも憲法への
関心を活発に促さなければいけない行政が自主規制を掛けている」と公民館側の姿勢を批判し
ました。

私はフォーラムに参加した際に、住民の要求に対して「主事がフィルターをかけている」と
いう趣旨の発言をしましたが、そのフィルターとは上記のような意味においてです。
市公大会において平和について扱っている・・・必要性は感じているというのではなく、主事が地
域において上記のようなケースに遭遇した時にどのように対応するのか。どのように住民と向
かい合うのか。もし仮に三橋公民館と同じような対応をするのならば、住民にきちんと納得し
て頂けるような言葉を主事が持っているのか。このようなケースは今日起こってもおかしくな
いですし、すでに当地域でも起こりつつある現実の問題です。

三橋公民館を管轄する市生涯学習総合センターの副館長は「集団的自衛権について色々な意見
がある中で掲載するのは偏った表現と受け取られかねない。妥当な判断だった」として「世論
を二分するようなものは載せるべきではない」という考えは崩していません。

しかし憲法 99 条には「天皇又は摂政及び国務大臣、国会議員、裁判官その他の公務員は、こ
の憲法を尊重し擁護する義務を負ふ」とあります。自治体や公民館の職員は公務員ですから当
然、憲法尊重擁護義務を負っています。

この問題によって国の政治と地方自治体の対立を生むかもしれないという心配はわかります。

多様な価値観がある現代・・・まず住民の話を聞いてからというのもわかりますが、どのような問題であっても賛否両論は存在し、意見の対立はあります。これらの問題に対して「中立」を掲げて関与を避ければ自治体は非政治化し、ゴタゴタを避けることができるかもしれません。しかし、このような「事なかれ主義」によって政治や行政から住民を遠ざけ「隔離」して「無菌室」に入れるような態度こそが地方自治の力を弱めてきたのだと思います。政治や行政への関心が低い、議員のなり手がいない、投票に行く人がいない・・・このような結果になるのは当然だと思います。

公民館主事は社会教育の専門職ですが、そもそも社会教育とは何でしょうか？社会における公民権・・・公民としての権利を地域の住民にきちんと教えるのも公民館主事の役割ではないでしょうか。公民権は高校では教わりますが、社会に出て選挙権を持つてからは誰も教えてはくれません。国でも会社でも家庭でも教えてくれません。地域でその教育の役割を担えるのは公民館主事だけではないでしょうか。そして公民権という政治的で難しいけれど民主主義や立憲主義という社会で生きていく上で、最も基本的な教育を地域に立脚して、住民にわかりやすく教えるのも公民館主事の仕事ではないでしょうか。

最後に現行の高等学校学習指導要綱にある公民科の学習目標について書きとめておきたいと思います。

「広い視野に立って、現代の社会について主体的に考察させ、理解を深めさせるとともに、人間としての在り方生き方についての自覚を育て、民主的、平和的な国家・社会の有為な形成者として必要な公民としての資質を養う」。

私の「下伊那テーゼ」学習ノート

社会教育・生涯学習研究所 細山俊男

はじめに

下伊那テーゼ 50 周年記念フォーラムで、下伊那テーゼの作成メンバーである松下拡さん、島田修一さん、岡庭一雄さんの話を聞いたことは大変嬉しいことであった。思えば、かつてこの 3 人にそれぞれに出会ったことが、私と公民館と社会教育と阿智村をつなぐ 1 本の道になった。しかも、それらが下伊那テーゼをめぐる偶然の出会いであり何とも不思議なことである。

1 埼玉県入間地区で出会った下伊那テーゼ

私は、1975 年に埼玉県所沢市の公民館職員になった。所沢市の公民館が加入していた入間公連（埼玉県入間地区公民館連絡協議会）では、1972 年に下伊那テーゼを学ぶために、29 人の職員が飯田・下伊那を訪れていた。

「・・・松川町の松下主事との出会いは私たちにとって公民館活動に対する夢と希望を与え、恵まれない条件の中でも、「やらなければ」という気持ちを起こさせ、公連活動とともに各自の実践を活性化させる原動力となった…特に「実践をもたずして理屈を言うな」という下伊那の主事たちの鉄則は、その後の研修活動のあり方を決定づける原点となった」（「入間公連 30 年の歩みと課題」入間公連紀要第 9 集『明日をめざして』1992）

入間公連の職員部会には意欲的な職員が集まっていて、私も職員研修に参加することが仕事への励みになっていた。初めて宿泊研修に参加した時、口角泡を飛ばし、公民館とは何かを熱

く論じる先輩職員たちを見て、早く私も実践を語れる職員になりたいと思っていた。入間公連のこの気風が下伊那の主事たちとの交流から生まれたことを当時の私には知る由もないが、下伊那テーゼは入間地区の公民館に確かに生きていた。

2 松下拡さんに学ぶ保健師たち

1980年頃に私は入間公連の県外研修で松川町を訪ねた。公民館職員として住民から依頼されればどんな学習会にも出席するという松下拡さんの話にとっても感動した。「学習会」という言葉がくらしのなかに息づいている下伊那の地域を知ったのは驚きでもあった。

所沢市の保健婦（現在は「保健師」）のなかに、保健婦学校時代に松下さんの健康学習を学んだ人たちがいて、彼女たちは公民館職員に協同の学習会を呼びかけた。そしてその学びは脳卒中などで中途障害をもつ人たちの健康を回復する「地域リハビリ交流会」の実践（山本昌江「地域の関係をつくる学び『リハビリ交流会』『月刊社会教育』2002年8月号」につながった。私たち公民館職員は保健師を介して松下さんに再び出会ったことになる。

松下さんは下伊那テーゼ作成の中心メンバーであったが、その松下さんの学びの場は公民館主事会という集団にあった。

「私にとっての学習の場は、下伊那の公民館主事会であった。主事会は毎月一回開かれ婦人や青年の実態把握とその学習の問題や地域課題を探り出し、そのテーマに基づいて考えあう場であり、主事たちにとって唯一の研修の場であると同時に、民主的な社会教育確立のための条件整備や、主事の身分保障の要求を確認する場であり、日常のうつぶんをはらしあう人間的な連帯の場であった。」松下拡『住民の学習と公民館』（勁草書房、1983）

3 社会教育・生涯学習研究所は実践研究の場

下伊那テーゼの原案作成者が島田修一さんであることを知ったのは、私が社会教育・生涯学習研究所（島田修一所長、以下「研究所」とする。）に参加してからだった。研究所への関わりのきっかけは「実践者こそが真の研究者になる」という研究所の理念に共感したからであり、その後、事務局長を引き受け、2012年からは島田さんの後を受け所長になった。私の社会教育活動のなかで研究所運動は大きな柱になっていた。

その島田さんはかつて喬木村の主事としてその時代の公民館の実践的課題として「生活現実を拓く学習活動を住民とともにつくる」「さまざまな学習運動に学んで公民館の課題を深める」「公民館職員がきちんとした見識と力量をつける」（2012.8 研究所自由研究会での島田報告）ことであると見据えていた。下伊那テーゼは下伊那の公民館主事たちがそれぞれの公民館実践をもちよって学びあい、築きあげた実践理論なのである。

4 阿智村で下伊那テーゼを検証する

阿智村の村長であった岡庭一雄さんは役場職員として36年、そして村長として4期16年、その間一貫して民主的な村づくりに取り組んできた。村長時代に岡庭さんは村づくりと下伊那テーゼとの関連を村議会で話したことがある。

「下伊那テーゼは…「公民館」を、民主的な社会教育を守るものと位置づけ、「民主的な社会教育」とは、『人間らしく生きる権利は、自分（住民）も持っているのだという自覚を呼び起こし、人間らしく生きる実践の力を身につけていく働きかけが民主的な社会教育の基礎になくはない』と定義づけています。…具体的には、公民館とそれに係わる職員等は、住民の暮らしにかかわる地域課題を学習課題に高め、学習を通じてそれを解決する実践の力をつけ

ていくと同時に、その環境を整備していくことであるということです。／この考えを創造的に実践してきたのが阿智村公民館の取り組みであり、それを発展させてきた住民の実践であります。この考えを発展させて、公民館を「阿智村」に、民主的な社会教育を「民主的な地方自治」に、主事を「職員」に置き換えて進めているのが、阿智村における村づくりであります。」（2009年9月 阿智村定例議会における村長あいさつ）

研究所では阿智村に入り 2012 年に阿智村調査報告「地域自治を担う力が育つ村」をまとめた。話しあいと学びが岡庭村政の基本にあり、阿智村をつくる「自治」と「協働」に下伊那テーゼが生きていた。しかし、「社会教育の村」の住民自治と協働が本物になるかどうか、阿智村の住民の実践としての下伊那テーゼの検証は、岡庭さんが村長退任した 2014 年 2 月から始まる。私は 2013 年に阿智村に移住し、こうして改めて下伊那テーゼに向き合うことになった。

下伊那テーゼ 50 周年記念フォーラムを終えて

松下 拓

1. 若い主事の感想から

（1）下伊那テーゼは難しい

何とか読みとって、そこから具体的な実践を切り拓くにどうするのかが見えてこない。テーゼ作成の頃は地域での活動が多様に動いており、人びとは青年会や婦人会、若妻会などに入って何らかの組織やグループ等で自主的自発的に活動していた。そこに公民館主事として関わり活動の活性化を考えることができ、テーゼはそのような状態の中での理論であったと思う。

しかし今は、地域や人びとの関係が乏しくなっており声をかけても反応してくれない。人びとの労働や生活行動が地域から離れて、「地域」としての人間関係がつかめず対象者が捉えられなくて地域課題がつかめないままに公民館事業が表面的、行事的に行われるようになっていく。住民や主事自身も組織活動の体験が無いので住民活動へのイメージが持てないままに、より多くの人が集まり賑やかになればとの思いからイベント的発想に頼る傾向を生んでいる。

そのような状態の中で「民主的な社会教育」とは具体的にどのように実践的にイメージしたらよいのが難しい。地域が見えない地域課題を「学習課題」として捉えられずに「理念的な考え方」と「実践」が結びつかないという悩みがあると。

（2）この思いをどのように乗り越えるのか、テーゼをどう理解するのか

理論そのものへの理解にこだわるのではなく、当時の主事たちが理論化した過程、その理論的整理と提起を必要とした時代状況と、主事達は日頃どんな行動をしながら公民館活動をしていたのか、その過程でどのように地域を捉え、国の動向を捉えながら生活や地域課題を据えて活動しようとしていたのか。そのことを主事仲間としての「主事会」でどんな議論を重ねていたのかに視点を置いて、テーゼの持つ意味を考えなくてはならないのではないかと気づいた。そのような視点を据えることで、地域の捉え方、課題の据え方が見えて来て、テーゼのもつ意味と内容が理解できるのではないかと。

2. 公民館主事の立場に立って地域の現実をどうみるのか

テーゼの時代（1960年代）は農業国から工業国への転換を図りながらその政策に基づいて経済の高度成長をはかり、アメリカとの軍事関係を強化させながら国の歩みの流れを変えようとする大きな節目の時期であった。そのような動きの中での学習課題について、主事たちは議論を重ね「地域開発」への政策や労働者の組合運動に視点を据えながら、自分たち自身の生活課題をも出し合い、社会教育の本質を地域の現実から確認しようとした主事たちの「学び」への取り組みがあった。そこから「地域課題」を住民と共に「学習課題」に据えようとした。

今日の状況は当時の内容と異なるが大きな流れの「節目」として酷似していると言えないだろうか、しかも農村はTPPの動きをも含め深刻な問題を孕んでいるのである。あらためて今の時代を、人びとの生活現実の立場でとらえ返して国政との関係を見ることが公民館主事としての基本的な学習課題となってくる。その学習に取り組もうとするような主事仲間の形成を図りつつ、テーゼの提起した課題を考えてみることを期待したいと思う。

当時主事たちは、地域組織の活動からのみでなく時間をつくって、積極的に地域に出て住民を訪ね個々人の話を聞いて回り、住民の声から地域を理解しようとした。

（フォーラムの当日岡庭さんの語った主事時代の体験を想起して、次のことを確認したい。）

（学習とは本来個人の意識変革である。と言う原理に立てば具体的に個人の考え方に触れることは、学習の条件を考えそれを支援しようとする専門職である主事としての基本的な教育労働なのである。）

（個人の意識変革は個々人の学習とその学習を支え合う相互の関係で成り立つところに地域活動の教育的な意味があり「社会教育が組織的な活動」として考えられる所以があるのだといえる。そして公民館は「实际生活に則して文化的教養を身に付ける活動を公的に保障する機関であり、その活動の場である」として位置付けられている。）

「地域課題が見えない」ということは「地域が見えない」ということであり、地域が見えないのは「見ようとしていない」のではないか。見ようとする行動は地域に出て住民と話し合うことである。地域に出るとは自動車ではなく「自分の足で歩くこと」である。当たり前のことであるがそれをしていない。自動車での移動は道を見ているだけで、「地域」を見てはいない。ましてや「住民」とその「暮らし」など見える筈がない。今すべきことは、地域を歩くことである。歩いて住民と話し合うことである。頻繁には無理であろうが、時には集中して住民の思いを具体的に聞き出して考えてみることも必要である。

（訪問して個々の生活実態を把握しようとしている地区担当の保健師と話し合ってみるのも地域の実態把握となり、同時に自治体職員としての協働を生むことにもなる）

職員は皆「多忙である」と言う、何が何の為に多忙なのか。事務やコンピューターへの関わりはあくまでも手段である。手段や方法に振りまわられて肝心の「生の現実」を自分の目で見ていない。（これでは住民との協働は生まれない）

結果的により早く成果を求める発想は、一定の価値観を定着させて（させられて）方法論やマニュアルに依存する傾向を生み、非主体的（非学習的）状況を創る。それに堕してはいないか。一方的に理想論を住民に当てはめ、押し付けようとしてはいないか。

現実（住民の人たちの仕事や生活やその中での思いや考え方）を具体的に自分の目で（体全

体で) 見つめるところから「住民、地域」を捉え、住民と共に生活や地域を見つめ考えて何が問題なのかと確認し合って課題を据える。そこに社会教育実践がある。(活動の主体は住民なのだから住民自身が「課題である」と思わなければ主体的な活動は成り立たない。地域の＜そのことに関する＞人びとがそれぞれの思いを出し合い共感共有することで「地域課題」が据えられて住民活動となる。あるいは問題を提起して関心を引き起こし、実態を確認したくなるような積極的な働きかけをすることも必要である。いずれにしてもそのような取組の過程で住民自身の「自己教育力」が形成される。そのような取組みの体験を重ねることによって、地域住民の自律的、自発的活動は発展する。

そこに見られる「学び」の原理や地域や職場における人びとの取組みから学びとって「民主的社会教育」を公的に据えようとしたのであった。

実態を見て課題を据えるには、見る視点の的確さが必要となる。当日、手塚さん＜松本＞は「例えば介護保険の条例などを読み取ることによって実態を見る＜視点＞が据えられるのではないか」と発言された。それは保険事業の実施に協力するということではなく、現実を見る視点の持ち方についての提起であった。

(上記の発言とは関係なく、例えば福祉現場の職員の仕事が個人の具体的状態を理解することを土台として成り立っているように、公民館主事は「地域の実態の具体的に把握していること」が仕事を進めるうえでの前提であると考えすることは厳しすぎるのであろうか?)

以上のような基本的な考え方に基づいて、地域活動は高まり継続化されて「地域づくり」となる。このような取組みが、「地域創生」の取組みであると言える。(今各地で取組みを始めている「地域づくり」や「地域創生」を行政はどのようにイメージし、具体的に取組もうとしているのであろうか。公民館活動との関係はどうなっているのか。

公民館活動のねらいは、「地域づくりの創造的主体者としての＜人づくり＞」を地域の住民自身が主体的に生み出すような「人間関係づくり」を実現することであると考え。

今政府は「一億総○○」という表現を使い始めて国民をその気にさせようとしている。我々(80代)の世代は「一億一心」とか「一億総決起」と言う言葉にあおられて、「国家権力」を批判することなく(それを禁じられて)非民主的に教育され、そのこと(教育)が取り返しのつかぬ悲劇を生んだのだということを体験をとおして感じ、そこに厳しい視点を置いている現憲法の理念(立憲主義)をあらためて学び合い、その理念を守らなくてはと思っている。(投票年齢低下の状況の中で)

以上で考えたような取組みの中での「学び」の意味、＜民主的社会教育の意味＞を確認し合うような主事仲間(主事集団)を形成し、そこでの組織的な学びの体験を積むことが「下伊那テーゼの視点」からの基本的な課題ではないかと考える。とりあげる内容は誰でも自分のこととしてその気になれるような素朴な意見を大事にしながら。島田さんの提起された「学び創り」について私は以上のように考える。

下伊那テーゼ 50 周年記念フォーラムに参加して

向井 健（松本大学）

今回、下伊那テーゼ 50 周年記念フォーラムに参加して、当時の下伊那テーゼに関わった世代のお話を聴く貴重な機会となった。いくつか記念フォーラムを通して印象に残った点について書き記してみることにしたい。

まず、第 1 としては、フォーラムを通して下伊那テーゼが大事にしてきた公民館主事の果たしていくべき役割について確認できたことである。今回のフォーラムの話の中では、住民の切実な課題を顕在化させ、個別的な課題から全村的な課題へと学習を通じて引き上げていく当時の公民館主事の姿が非常に印象的であった。

第 2 としては、下伊那テーゼの設立された経緯について、当時の関係者の方から詳しく話を聴くことができたことが有意義であった。下伊那テーゼは、現実を拓き、歴史を創る力量をもった「学びの創り手」をつくろうとする研究と運動の中から生み出されたものであった。さらには、そのような能動的な意識を持った労働組合青年部や公民館主事会といった集団性に支えられながら、一人ひとりの物の見方や考え方が鍛えられていたことを知ることができた。これからは、そのような物の見方や考え方を高めあう集団性をいかに地域の中に埋め戻していくのが課題となってくるといえよう。

そして第 3 として、このフォーラムが、下伊那テーゼの思想の「次世代への発展・継承」が一貫して意識されていたことである。下伊那テーゼ 50 周年記念フォーラムは、阿智村公民館の 2 人の若手の主事（大石真紀子氏、櫻井拓巳氏）の発案によって実行委員会が発足され、3 回に渡る学習会を経て、フォーラムの開催に至ったという。このような若手メンバーからの発案によって、50 周年の記念フォーラムの開催をすることができたこと、そして飯田・下伊那地域においても下伊那テーゼについて知らない世代の公民館主事が増えている中で、学習会の積み重ねを通して、各地域の主事同士が学び合いつながらあえたことは、これからの飯田・下伊那の公民館実践において貴重な機会となったのではないかと思われる。

確かに、何人かの若手の公民館主事から語られたように、下伊那テーゼができて 50 年が経過した現在において当時とは大きく時代状況が変わってきていることも多いといえるだろう。しかしながら、私たちに求められていることは、50 年前当時の状況に内在して何故ゆえに下伊那テーゼが生み出されたのかを学んでいくこと、そして、当時とは何が変わってきていて、逆に、何が変わらずにあるのか、といったことを見極めていくことなのではないだろうか。本フォーラム終了後における懇親会では、参加者から「50 年後、下伊那テーゼの 100 周年の記念事業をしたい」という“夢”も語られた。それを現実のものとしていくためにも、これからを担う若い公民館主事とともに、下伊那テーゼで大事にされてきた理念を深く学びあいながら、飯田・下伊那の公民館の可能性を一層豊かなものへと拓いていきたいと感じたフォーラムであった。

下伊那テーゼ 50 周年記念フォーラムに寄せて

上村公民館 主事 村澤 勝弘

先日、特に公民館に関わりのない地域の方から「書道教室をやりたい。公民館で募集してくれんかなあ。」というお話をいただいた。その話を聞いた時、最初は「個々のサークル活動だし、

私的な部分も含めて考えると公民館として募集するはどうか。」「仮に募集したところで人が集まるのだろうか。」程度に感じながら聞いていた。しかし話を聞いていくうちに、実はこの話をしてくれた方自身が書道教室をやりたいのではなく、近所の当時参加していた方からの声だったこと。昔は希望者を募り「上村書道クラブ」として定期的に講師を招いて活動していたが、参加者、講師が高齢になり、体力的・金銭的な部分も含めて廃部したこと。当時参加した方が、「私はもちろん、孫にも教えてあげたい。孫と一緒にもう一度書道をやりたい。」といった声があったこと。その窓口に来た方は、「なんとかしたい。」それを伝えるためにわざわざ足を運んで相談に来てくれたことがわかった。

「全市的な課題や地域全体の課題をどう捉えるかは直接住民の声を聞かなければならない」というのを頭だけ理解し、わかったつもりでいなかっただろうか。地域から出た多くの意見がその地域の課題ややるべきことだと決めつけていなかっただろうか。実際にその方に成り代わることはできないが、その話の背景にはどんな実態があるのか、同じ目線で一緒に考えていただろうか。今回の件で「まだまだ地域にどっぷり浸かっていないな」と深く反省する機会となった。

「少子高齢化・人口流出⇒若者対策」は決して間違っていない。現に当地区でも若者に対する取り組みに行政やまちづくり委員会、公民館が力を注いできた。しかし地域全体で抱える大きな課題に対し、直接的な解決だけを考えていたら周りも見渡しづらくなり、客観的に物事を見る事を怠ってしまう。「高齢化」の見方を変えれば、「この地域の歴史を知っている方が多いこと。昼間もこの地域に滞在している割合がどの地域よりも多い。」ということ。この地域に住む方は若者だけではなく、赤ちゃんからお年寄りまで色んな世代の方が生活している。ここに住む高齢者や子ども達がどんな生活課題を持っているのか。どんな地域になってほしいのか。その課題に対しどんな学習ができるのかを考え、主事自らも当事者になりきり、実際に主事も学び、次の展開を住民と一緒に考えていく、ひとつひとつ確実に実践にむすびつけていくこと。それが公民館の役割のひとつではないかと今回この書道の件で気づくことができた。

「日常の何気ない地域住民との会話の中に見えなかった課題や、地域が今やらなければいけない事、解決のヒントが見えてくる。」当時の下伊那テーゼに関わられた先輩主事のみなさん、先生方からそんな言葉を聞いた。今回の書道の話聞いた実体験を通し、下伊那テーゼ学習会で聞いた言葉がより深く胸に落ちた。「地域の声を拾う」とは、まちづくり委員会や公民館に関わる方にこだわらず、子どもからお年寄り、子育て世代のお母さんまで、公民館にあまり関わりのない方だからこそ会話をする。それがいかに大切なのかを今さらながら知ることができた。今回の下伊那テーゼ学習会・フォーラムに参加し、当初は「今と昔は違うのではないか」という疑問を心のどこかで抱いていた。もちろん社会情勢や地域を取り巻く環境は大きく変化している。しかし、根本である「住民との対話から見える課題」は今も昔もこれからも不可欠であり、先輩主事のみなさんが積み上げてきた下伊那テーゼが現代の公民館でも活きている、今後伝えていかなければならないものだとは再確認することができた。また、当事者であった方達の生の声を聞けたことはとても貴重な経験であり、その機会をいただいたことに心から感謝したい。

地域があるから主事がいられること、主事は地域に育てられ、活かされていることのありがたさを今一度噛みしめながら今後も地域の方と腹を割って寄り添っていきたい。来月、地区の広報に「上村書道クラブで学ばまいか！」という募集を掲載する予定だ。そこに公民館だからできる、公民館しかできない役割があるのだから。

下伊那テーゼ 50 周年記念フォーラムから再発見、再発進

松川町公民館 主事 望月貴生

昨年 10 月の下伊那テーゼ 50 周年記念フォーラムでは、事例発表者として参加させていただきました。松下氏から事例に対して直接ご意見をいただき、また先輩の皆様のお話を聞きながら、主事の役割やスタンスについて多くのことを学ぶことができました。

中でも心に留まったのは、「住民活動の中に積極的に入り、住民の声を 1 人の人間としてとらえていくことが大切である」「生活と地域課題の結びつきにどう着目するか。そして主事として地域に腰を据え、地域課題と向き合わなければならない」という言葉です。一聴すると主事として当たり前にするべきことのように聞こえますが、わかっているようでわかっておらず、またわかっているにもかかわらず行動に移せていないのが現状です。

私は、若者の公民館活動への積極的な参画を目指して展開している事業を発表しました。若者が何を思っているのか。どんなことをやりたいのか。声を聞きながら第 1 回の活動内容を決めているところでしたが、悩んでいました。若者にやりたいことを問うと確かに答は返ってくるのですが、実現するには難しいものであったり意見がまとまらなかったりと、内容の決定にはなかなか至りませんでした。とりあえずスポーツ交流会と懇親会を行うことになりましたが、この時はこちらから改まって若者に問いかけ、それに対しての答えを待つというような状態で、自分と若者が相対していたのではないかと思います。「地域に入り、腰を据える」そしてそこで「住民の声に耳を傾ける」ということを考えたとき、“相対する”というよりは、“同じ輪に入る”または“同じ方を向く”というのがそれに近いのではないかと、フォーラムを経て再発見しました。

第 1 回事業では、若者と同じ参加者の目線で耳を傾け、できるだけ懇親もしました。雑談の中から得るものは思った以上に多く、若者がどんな気持ちで地元にいるのか、今後どんな方向に行きたいのか知ることができました。この後、第 2 回の活動に続いていくわけですが、そんな雑談の中から出た意見を基に活動につなげました。この回では一歩踏み込み、座談会も行いました。この回の感想から始まり、最終的には地元のことをもっとよく知ることの大切さや進学で県外へ出た友人が戻ってくるにはどうしたらいいか。また「戻ってきたくなくなるような地元にしたい」というような意見がたくさん飛び出し、若者の地元をもっと楽しくしたいという思いを知ることができました。

この座談会の中で多くの意見を聞いたことは大変な収穫であったわけですが、この座談会が主事の進行を全く必要とせず、若者により進行され、盛んに意見交換されたことにこの日一番感激しました。いい意味で主事は蚊帳の外でした。

さて、フォーラムの感想のつもりがその後の経過報告になってしまいました。

情報交換会の折にも申しましたが、私はこの地域が好きで、居心地がいいと感じています。それは、地域自体の居心地がどうかということだけではなく、“この地域を居心地がいいと感じることのできる自分がある”ということが大きな要因であると感じています。地域を磨くことも大切ですが、自分もしっかりと磨くことができ、それが仲間伝いに広がれば若者も集まる公民館になるのではと感じています。

地域の中に入り、そんな公民館の存在が若者に広がる一助となるのが、現時点で私が一番身近に感じる一つの主事の役割というか居場所であると考えています。

下伊那テーゼ50周年記念フォーラム 感想

阿南町公民館 主事 安野 涼介

すごいフォーラムだったなあと数ヶ月たった今でも印象に残っています。それほど、自分の中ではインパクトがあったものでした。事例発表をやらせていただいた事は、大変光栄に思っています。だからこそ、もう少し考えて発表ができていればなあと反省しています。

今回のフォーラムを思い返してみても、まず一番記憶に残っているのは、冒頭でもお話ししましたが、自分が出させていただいた、事例発表です。飯田市と下伊那郡から合わせて4名の主事が集まり発表をさせてもらい、各公民館の主事の立場から現在、活動中の講座に関する事柄をそれぞれ披露しました。それに対して、ファシリテーターであり、下伊那テーゼ作成に携わった1人である、松下拓先生にまとめていただき、意見をお聞きしました。印象的だった発表は羽場公民館主事の鈴木さんからいただいた「イクメン講座」についての発表でした。自分がパパということもあり、学びたいことを講座し実践してみたところをお話いただき、最初はまず、集まって何を学びたいか、自分も分からないため、参加者の中でキーとなる方と相談をし、講座の内容を決めて進めていくというものでした。内容は公民館の活動として「主事は自分が好きなことをやっていく」というスタイルだなあと感じ、さらに中身が自己満足にならないよう、参加者と相談しながら進めたりなど、良いスタンスで出来ているなあと感じました。

他にも下久堅公民館主事の下岡さんや、松川町中央公民館主事の望月さんからも、活動内容や進めていく上での問題や悩みなどの発表があり、1人1人の発表の間で、松下先生が意見をまとめ、それに対して提案をいただきました。自分も「地区の公民館の今後」というテーマで発表をさせていただき、つたない発表でしたが、奇麗にまとめていただき、問題点についての的確なアドバイスをいただきました。

また、初めに行われた対談では、前阿智村村長、岡庭一雄さんと東北大学大学院教育学研究科准教授、石井山竜平先生との対談をお聞きし、保険師と住民との話の中で不満や問題点を聞いて回ったというお話をお聞きして、やはり「公民館の中にいるだけでは本当に必要な情報は入ってこない。足を使って聞いて回ることで、初めてその地域の問題が見えてくる」ということを学ばせていただきました。

そして最後に中央大学の名誉教授である島田修一先生から、喬木村で社会教育主事で働いていた頃の話から、経験談をお話いただきました。「当時は公民館という仕組みが出来たばかりで、何をしていけばいいか分からない。そんな状況の中、やはり足で動いて問題定義を行い、それを解決するために何を学べばいいか模索した」とお話いただき、そして「学習は能動的でなくてはならない、そして社会教育は能動的な学びの場を作る場である」とお話いただき、なるほど、と思わずうなずいてしまいました。社会教育は強制的なものはいけないという認識はありましたが、足で動いて問題を調べ、問題が分かった所で住民が学びたいことを主事が認識し、それから、学ぶ場を作るということをお話を岡庭さん、石井山先生、そして島田先生から学ばせて頂きました。

そして今回のフォーラムで一番得たものは、全国から来られた公民館にかかわっている人と、関わりを持つことができたことだと思います。このような機会がなければ会えない方がたくさんいました。企画・立案してくださった阿智村公民館主事の2人には大変感謝しています。ありがとうございました。

下伊那テーゼ 50 周年記念フォーラムを振り返って

松本市中央公民館 横山 史 樹

下伊那テーゼが出来てから 50 年、今回は元阿智村村長である岡庭氏などから、下伊那テーゼを制作した方々から当時の話を聞くという貴重な機会となった。

戦後の寺中構想からでは、文部行政の主導のもとに、公民館施設の建設や公民館活動が始まった。また、職員体制では「公民館職員には専門職員を置くこととし、主事と呼ぶ。」とした。すなわち、主事という専門職員（学習支援者）が、公務員としての任命あるいは嘱託を受ける体制をめざしている。

下伊那テーゼは、当時の公民館主事たちが、飯田市主事会・下伊那主事会の研修の積み重ねからそれまでの実践分析の蓄積から職員の役割を明らかにしようとした試みから生まれたものであった。

教育とは人間の認識能力を全面的に発展させていく営みである。教育の中立について、権力支配を排除しようとする努力であり、教育の本来的な役割を守ろうとする国民の要請である。この原則を貫くことが、国民の人権を守ることに繋がるとしている。

したがって主事の仕事は、系統的・科学的な教育・学習の組織と内容が整えられなくてはならない。それは、具体的には、国民の教育・学習活動の大量な実践から学びながら、何が教育の内容として準備されるべきかをとらえることであり、地域の現実を、民族的な課題を解決する視点でとらえ、住民の様々な要求を掘り起こし、学習活動へ組織していく仕事であるとしている。

同時に主事は、その労働の場を自治体に持っている労働者であり、権力に

よる住民支配の末端に座を占めながら、自らは地方自治を住民の手で確立す

ることを課題とする自治体労働者である。と労働者である側面もあるとしている。

このように、下伊那テーゼは、教育の中立や反逆性を説き、公民館主事が、地域や住民の課題を公民館の学習として展開していく力の重要性を指摘し、住民による民主的な自治の必要性を説いている。

そして、常に住民の生活課題に寄り添いながら、住民の様々な学習への要求を掘り起こし、系統的・科学的な教育・学習の組織と内容が整えることが主事の仕事だとしている。

この記念フォーラムでは、時代背景が当時とは違っても、公民館主事の役割として普遍的なことが、この下伊那テーゼを読み解くことによって改めて見えてきたのではないだろうか。

本市では、地域づくりセンターができ、地域包括ケアシステムの松本モデルが全市的に展開されようとしている。

これからも、住民の方が普段から感じている地域での生活の問題、課題などに寄り添うことを意識し、教育の中立性を守り、学習を展開していく公民館主事がどのような役割を担うべきなのか常に問いながら、日々の業務を行っていききたい。

寄稿「下伊那テーゼに学ぶ公民館のあり方」

出典 東京大学教育学部社会教育学演習 2015 年度飯田市社会教育調査実習報告“飯田”というつながり

東京大学教育学部教育学実践・政策学コース 4 年 福森敏也

1.1 はじめに

1.1.1 課題意識

私が本報告書の作成に参加するのは、昨年度に引き続き 2 回目となる。昨年度は「飯田で飲食店を営む人々の暮らし」と題して、飯田で暮らす人々の〈こころ〉の有り様を明らかにした。一方今年度は、何度足を運んでも感じさせられる飯田の「すごさ」の恐らく根幹をなしていると思われる、公民館活動の核心にふれてみたいと感じた。

飯田に限らず長野県全体が、戦前の自由大学運動などにも見られるように高い学習意識をもった地域であるが、飯田下伊那地域に関しては、いわゆる「下伊那テーゼ」が、盛んな活動のひとつ大きな原点となっているといえる。昨夏のフィールドスタディでは、飯田の公民館活動について再び学んでいた折、資料の中に含まれていた「下伊那テーゼ 50 周年記念フォーラム『いま、改めて公民館の役割を考える』」という案内の紙が目にとまった。少子高齢・人口減少時代に突入し、課題山積の現代において、古きをたずね新しきを知ることは重要な意義を持つと思われる。そういった関心から、今年度の報告書では、下伊那テーゼを検討の中心に据えつつ、飯田の公民館活動の姿を描き出そうと思うに至った。

1.1.2 本章の概要

本章の目的は、昭和 40（1965）年に発表された「公民館主事の性格と役割」（いわゆる「下伊那テーゼ」）が、発表から 50 年を経た今、その内容が現在にどう活かされようとしているのかを明らかにすることである。より具体的には、下伊那テーゼの作成当時の時代背景と今日の飯田下伊那地域をとりまく背景、その共通点と相違点を明らかにし、下伊那テーゼのこういった点が現在にも適用できる、あるいは適用されようとしているのか、そして下伊那テーゼの上に成り立つ飯田型の公民館活動が、今後こういった形で波及されようとしているのかについて、明らかにすることを目的とした。この目的のため、平成 28（2016）年 1 月某日に飯田市民館の木下巨一副館長にお話を伺うとともに、いくつかの資料をいただいた。加えて、下伊那テーゼに関連するいくつかの文献にあたった。木下氏の話や関連資料・文献から明らかになった内容を、以下整理してゆく。

1.2 下伊那テーゼとは

昭和 40（1965）年、飯田下伊那主事会は、日本社会教育学会年報『現代の公民館』の中で、「公民館主事の性格と役割」と題した文章を公にした。飯田下伊那地域の公民館活動の方針を示すものとして提示されたこの文章は、戦後社会教育の大きな支柱となるものとして全国的にも有名になり、「下伊那テーゼ」と呼ばれた。下伊那テーゼは、昭和 38（1963）年の大阪府枚方市における「枚方テーゼ」、昭和 48（1973）年の東京都三多摩地域における「三多摩テーゼ」とともに、公民館活動の指針を示した社会教育史上重要な意義をもつ文書として並び称される。

下伊那テーゼは、公民館主事の性格を社会教育専門職と自治体労働者の二面において捉えるとともに、その役割を「働く国民大衆の運動から学んで学習内容を編成する仕事」「社会教育行政の民主化を住民とともにかちとっていく仕事」とした。ここには、共同学習運動¹の中で培われた地域・生活台に立つ学習観や教育観、社会教育思想がひきつがれている²。このテーゼの内容を受けて、例えば下伊那の松川町では、公民館研究集会や婦人集会を土台に地域・生活課題を学習課題化し、学習の成果を実践につないでいく活動、中でも公民館主事と保健婦が協働して健康づくりの主体形成をめざす健康学習など、地域生活に根ざす公民館実践を自治的につくりだす取り組みが、1960年代以降行われるようになった³。

平成 27（2015）年は下伊那テーゼの発表から 50 年という節目の年にあたり、下伊那テーゼは今ふたたび注目を浴びている。

1.3 下伊那テーゼ作成の背景

1.3.1 産業構造の変化

下伊那テーゼが発表された 1960 年代は、終戦後 20 年が経ち、日本社会が高度経済成長により空前の好景気に沸いていた時代であった。その華々しい成長の陰で、これまで社会が経験したことのない新たな問題も数多く現出していた。

高度経済成長がもたらした最たる変化は、産業構造の変化である。大規模な工業化・二次産業化が進み、東京・大阪・名古屋の三大都市圏への人口集中が始まるとともに、全国で公害問題が表面化した。一方で農村地域からは、それまで一次産業を生業としていた層、中でも青壮年期の男性層が、労働力として都市に吸い上げられるといったことが起こるようになった。農山村に残ったのは、女性や高齢層ばかりであり、ここから農村地域の長期にわたる人口流出・過疎化の道のりが始まった。人々の暮らしにおいても、それまで農村部において食と住とは切っても切れない関係にあったが、そういった農村部にまでも貨幣経済が一部浸透し、都市労働の賃金をもって食糧などを購入する、すなわち食と住とが分離した、従来とは異なる生活のあり方への大きな変化が起こることとなった。

1.3.2 当時の飯田下伊那地域

当時飯田下伊那農村地域が抱えていた、人々の生活の地平の具体的でリアルな問題は、当時の公民館報に詳しくみられる。喬木村公民館報「たかぎ」を例として、その一部を抜粋する⁴。

昭和 39 年 8 月 1 日（土曜日）たかぎ 第 55 号「農家の主婦は疲れている」

…「婦人が積極的に農業経営に参加してきた」というのでなく、うちつゞく農産物価格不安定の波が、男子を農外収入の道へおいやり婦人を農業経営の中心に据えたのである。▼婦人

¹ 昭和 28（1953）年の青年学級振興法を受けて日本青年団協議会が展開した、学習の自由と自主性を基調とする運動。

² 長澤成次「社会教育職員と専門職問題」、小林文人・伊藤長和・李正連『日本の社会教育・生涯学習』第 6 章，大学教育出版，2013，p.47.

³ 松下祐『住民の学習と公民館』，勁草書房，1983，pp.1-15.

⁴ 館報「たかぎ」縮刷版編集委員会編『たかぎ 公民館報縮刷版』，1979.（飯田市中央図書館 蔵）.

の訴えるいろいろな病状もなれない耕運機の運転と無関係ではあるまい。常識的にみても母体保護によいはずはない。▼忙しさは、はっきり健康をむしばんでいる。…

昭和 39 年 12 月 15 日（火曜日）たかぎ 第 57 号「町や村の政治を住民の手に」

…町村にとっては、地方交付税は充分くれない。国の仕事なのに町村におしつける。災害復旧や開発事業にも地元負担の金額が多い、等、仕事の面や予算の面のやりくりがむずかしくなっているのは事実である。このため村独自の仕事ができない、村民のためになる仕事が仲々できないということになってくる。▼しかし、そうした中でも、理事者がもつと考えなくてはならないこと、職員がもつと研究しなくてはならないことがあるのではないかな。…

昭和 40 年 4 月 15 日（木曜日）たかぎ 第 58 号「公民館建設の気運高まる」

「喬木村にふさわしい公民館を建ててほしい」「設備、備品のととのった公民館で学習がしたい」「村民が気軽にはいれて自由に本を読んだり、レクリエーションの出来る部屋がほしい」集会の席上で、立ち話の中でこうした声が出されるようになってからもう何年にもなる。三年程前、公民館運営審議会、分館長主事会ではこの問題を取りあげて、村理事者あてに公民館建設促進の陳述書を提出したことがあった。これに対し、村側では、公民館施設の重要さはよくわかるが、村財政の苦しいおりでもあり、あらためて考えたいとの解答があった。その後公民館では、各町村の様子をききながら、わが村にふさわしい公民館の青写真をえがきつつけてきた。…

昭和 40 年 4 月 15 日（木曜日）たかぎ 第 58 号「農業だけでは食べられない」

…木炭の売行不振、こんにゃくの価格変動、家畜飼料の値上り、乳価、農産物価格の値下り等、農業だけでは村内のほとんどの農家が食べられない現状が大勢の人たちから話された。そうした中でこれからどうしたらよいのかという深刻な問題が出され、ある人は工場誘致をして現金収入を得る道を考えたとか、農業だけで食べていかれるような政策を考えるべきだとか、さまざまの意見が出された。▼…赤石林道と阿島橋の進捗状況とか龍東一貫水路と弁天発電所の関係とそれに対する反対運動の問題などが出された。その他出稼ぎがだんだん遠くへ行かなければ働き場所がなくなってきたが、何とか村内か近くで働けるように村会で相談してもらいたいという切実な訴えも出された。…

これらの文章から、高度経済成長の荒波の中で、農業を中心とした従来の生活への危機感や疲労感のようなものが感じられ、他方でそういった事態を自分たちの力でなんとか乗り切っていかなばならないという気概、あるいは焦燥感も感じられる。そんな中で住民自治の中心となる公民館への大いなる期待が寄せられ、また自治体職員が村民に寄り添い、村民のために汗水を流すべきことが期されていたことも読み取れる。

当時まだ旧来の封建的な性格をととどめていた農村社会において、公民館を拠点として民主的・自治的な地域に変えて行きたいという思いは、青年層や婦人層の中で強かった。しかし、1960 年代の急激な産業構造の変化の中で、青年層の都市労働者化や婦人層の農業の負担増加などから、青年団や婦人会などの組織は力を失いつつあった。当時までにある程度公民館の活動が根付いた地域であっても、従来と同じような事業を行ってみたいところで、事業そのものへの参加者数が減少し、地域で暮らす人々に公民館が寄り添ってゆくことができず、地域の要としての公民館は求心力を失い始めていた。このような状況を憂えた当時の飯田下伊那の公民館主

事たちが、これからの時代の公民館の職員がどういった考え方や仕事を行っていけばよいのか、議論を重ね結実したのが下伊那テーゼである。

1960年代は高度経済成長の時代であるとともに安保闘争の時代でもあり、政府や社会を批判的な目で捉え、対峙してゆく風潮が全国を席卷していた。その雰囲気の中で、飯田下伊那地域にも自らを取り巻く社会を自らの力で変えてゆくエネルギーに満ちた有力な存在が数多くいた。特に東京大学の宮原誠一教授のもとで理論的かつ実践的に社会教育を学んだ人材の多くが長野県内に就職し、飯田下伊那においては喬木村の島田修一社会教育主事が強いリーダーシップを発揮して、下伊那テーゼの作成における多大な功績を示した。他にも強い熱意をもった多くの有力な人材が、欠かすことのできない存在として転換期にあたる公民館活動を支える役割を果たしていた。

1.4 下伊那テーゼの見つめ直し

1.4.1 現在の飯田下伊那地域

下伊那テーゼの発表から50年を経た現在は、日本社会が少子高齢化・人口減少という未曾有の事態をむかえた時代である。人口10万人の地方都市・飯田、およびその周辺の町村も、全国の他の地方都市や町村と変わらない過疎化の波の中にあり、域内の一部でいわゆる「限界集落」と呼ばれるような地域も現れてきている。平成26(2014)年には日本創成会議が、全国896の市町村を過疎化の進行により「消滅する可能性のある自治体」として指摘し、大きな波紋を呼んだが、下伊那郡の13町村の中でも、阿智村、根羽村、天龍村、豊丘村の4村が消滅可能性自治体のリストに挙げられている⁵。そのような中で、過疎化の進行を食い止めて活気を取り戻し、自分たちの町や村をどう次の世代へ繋げてゆくかが喫緊の課題とされている。

1.4.2 学習会と記念フォーラムを通じて

眼前の新たな課題を前に、公民館のあり方を今再び問い直すために、下伊那テーゼ発表後50年を迎えた平成27(2015)年の7月より、「下伊那テーゼを学ぶ」という学習会が飯田・下伊那の主事会たちの間で行われるようになった。木下氏によると、阿智村の公民館主事の下伊那テーゼ50周年に関する些細な会話を皮切りに、飯田下伊那地域の公民館相互のつながりがありなくなっている現状や、主事会であまり得るものがなくなっている現状なども打開する、ひとつのきっかけにできればということもあって、学習会が始まったのだという。木下氏は、学習会を行った感想として「主事たちが学習会を重ねていく中で、50年前の話とはいえ全く他人事ではなく、現在に通じる部分は多々あることが共通認識として出来てきた」ということを述べていた。しかし、やはり現代との共通点よりも相違点の方が圧倒的に多いことから、その文章を落としこんでゆくことになかなか困難を感じたことにもじませていた。

同年10月には「下伊那テーゼ50周年記念フォーラム『いま、改めて公民館の役割を考える』」と題したフォーラムが開催され、社会教育職員・研究者など、長野県内外から62名が参加した。フォーラムは3部構成で行われ、第1部「下伊那テーゼを現代に生かす～地方創生時代と公民館～」では、岡庭一雄氏（前阿智村村長）と石井山竜平氏（東北大学）の対談、第2部「今日の公民館実践における主事の悩みと役割」では、松下拓氏（元松川町公民館主事）のコーディネートによる飯田市・松川町・阿南町の若手公民館主事の実践報告、第3部「下伊那テーゼ—50年のいま、その実践理念をどう生かすか」では、島田修一氏（元喬木村社会教育主

⁵ 増田寛也『地方消滅 東京一極集中が招く人口急減』，中公新書，2014。

事・中央大学名誉教授)の総括講演が行われた。このフォーラムを通じて改めて確認されたのは、住民の切実な課題を顕在化させ、全村的な課題として共有し、「生活欲求にねざした学習欲求をほりおこしていく」公民館主事の役割であった⁶。フォーラムの参加者からは、

今回のフォーラムは、自分自身と向き合う時間になりました。お話をしてくださった皆さんの話を聞いている間、私がこれまで出会ってきた地域の人たちの顔を思い浮かべていました。主事として関わらせてもらった自分は、その人たちにとってどんな存在だったのか。一体、何ができたのか。

うれしいことや小恥ずかしいこともたくさん思い出しましたが、数名の顔を思い浮かべたとき、強烈に後悔の念がわいてきました。それは、その人たちが抱く不安や悩みに気付きながら、静観してしまった自分や、そうするしかなかった自分の力のなさに対しての後悔です。同時に、今からでも遅くない、会いに行きたいという思いでいっぱいになりました。

地域で出会う人たちが人生の中、生活の中で抱かれている気持、どれだけ寄り添うことができるのか。主事として、そこに触れられるだけの覚悟があるのか。

下伊那テーゼから 50 年、時代背景や社会状況は明らかに違います。しかし、そんな違いを超えて大切にしていかなければいけないものが見つかった気がしました。

といった感想が挙げられ、下伊那テーゼおよびこのフォーラムが、現在の公民館主事にとって、自らの仕事を俯瞰し問い直す、ひとつの重要な契機となったことがうかがえる。特に、ここに見られる「後悔の念」からは、下伊那テーゼの掲げた理想が現在の公民館主事の活動に十分通じるものであることが見てとれる。他の参加者の感想からも、地域課題への向き合い方についての再考や、自らの無力さの自覚といった内容が散見された。ひとりひとりの参加者にとって、下伊那テーゼを中心として公民館活動のあり方を考えることは大変意義深いことであったようである。

1.4.3 当時と現在の共通点・相違点

木下氏によると、下伊那テーゼが発表された 1960 年代と現在とで共通しているのは、ともに地域社会が未曾有の変化の最中、いわば「時代の節目」にあるという点である。上述のように、当時は高度経済成長による産業構造の変化、現在は過疎化と少子高齢化による地域存続の危機という大きな壁に直面しており、従来の活動ではその危機に対応しえないかもしれない状況にあって、公民館は大きな転換の局面に立たされているといえる。現代を生きる我々が、そういった局面を乗り越えた 50 年前の飯田下伊那の公民館主事に学ぶ意義は大きい。幸い、飯田下伊那地域においては、住民の公民館活動への参加は量的に見て当時も今も変わらない高い水準にあるという。具体的には、人口約 10 万人の飯田市で常時約 5000 人、すなわち約 5% が、地区公民館の専門委員会への所属や分館の運営といった形で、公民館活動に従事している。その中で「公民館を運営するのは自分たちだ」という意識を持った住民層も、変わらず確かに存在している。また、住民の中で学習や活動が活発化するためには、何かしらの危機感や、その危機を問題だと感じる人たちがいることが必要不可欠な出発点となるが、長きにわたって声高に叫ばれてきた過疎化や少子高齢化という問題に対して、ある程度の共通認識もできている。した

⁶ 向井健「下伊那テーゼ 50 周年記念フォーラム いま、改めて公民館の役割を考える」、『所報 社会教育・生涯学習の研究』第 30 号, 社会教育・生涯学習研究所, 2015, pp.3-4

がって、「時代の節目」の中で、飯田下伊那はまだまだ可能性を秘めた地域であるということが出来る。

他方、当時と今とで大きく変わった部分といえば、地域や社会のありように対して批判的な目で捉える気風が社会全体で失われてしまったこと、加えて、公民館職員の力量形成が昔に比べて行われにくい環境となってしまった部分があるという。当時は批判的精神をもって熱い議論をかわし、だからこそ強いリーダーシップを発揮できた存在が数多くいた。現在はよりやわらかい目で世間をとらえ議論をしており、地域や社会の変化の状況を受け止めてそれを作り直すという地域の機能については、昔に比べて弱くなったと言わざるをえない。職員の力量に関して、公民館の活動を住民の側から支えてきた青年団や婦人会の後ろ盾もなくなってしまい、力量を規定する背景の部分も脆弱となってしまった。飯田市では昔も今も、5年前後の公民館主事期間を自治体職員としての基本的な力量形成の場として位置づけているため、制度面での変化はほとんどないが、下伊那の他の町村については、3年程度公民館主事として置かれたのちにすぐ人事異動が行われてしまい、また主事会における共同学習もほとんど機能していない現状にあるため、制度的な面において力量形成の土壌がかなり失われてしまったということもある。

下伊那テーゼが発表された当時と現在では、社会が転換点にあるという点では共通しているが、その他の点では異なっている部分の方が圧倒的に多く、特に当時に比べて、現在では失われてしまったものや弱くなってしまったものが多くあるため、下伊那テーゼから何らかの具体内容、方法論を学ぶというよりは、その精神や当時の主事たちの姿、あり方の面を学ぶことが行われようとしていることがわかった。

1.5 飯田型公民館活動の伝播

本書の作成をめぐる議論の中で、私たち学生は、飯田を「同心円」のイメージで捉えた。飯田にはその中心で核となり活動をしている人たちがおり、その周辺には彼らを支える行政がある。しかしその外側には、飯田で暮らしながらもそういった活動に参加していない人・できない人の存在があるかもしれない、また飯田市外という地理的な外側も広がっていて、中心核から周縁へのエネルギーがどのように伝わっているのか、あるいはそもそも伝わっているのかどうか、それを捉えてみたいということが、本書を作成する上でのある程度の共通認識として私たちの出発点となった。

今回私が関心をもった下伊那テーゼは、飯田の公民館活動の根幹をなすもの、いわばひとつの原点たるものである。私たちの同心円のイメージでいうと、円の中心にある活動の、さらに中心の部分の規定しているものに他ならない。では、この上に立って展開されている「飯田型」の公民館活動が、飯田市内外の「外側」部分へどう伝播している／しようとしているのか、下伊那テーゼに関する調査の中でも少しわかってきたことがあった。

1.5.1 「マージナル」な人々へ

まずは、飯田市内で周縁に位置する人たち、つまり中心的な活動に参加していない人・できない人について、下伊那テーゼ50周年記念フォーラムでは、テーゼを作成した当時の公民館主事から、現在の若手公民館主事に対して「住民の姿が本当に見えているのか」との厳しい指摘があったという。飯田市内の公民館で以前行われた人気セミナー事業の実践報告に対して、そのセミナーでは掬いきれなかった人々へ、主事の目が行き届いていないのではないかという指摘である。確かに、公民館の活動に自ら率先して参加してくれる人というのは、高い興味感心

を持っていたり、比較的悩みが少なかったりする人たちであると考えられる。その一方で、例えば介護を要する人など、本当に暮らしの中に悩みや困難があつて、それこそ手を差し伸べられることを必要としている、マイノリティやマージナルな人たちの存在があり、そういったところにまで目を届かせることはなかなか難しい。しかし、むしろここが公民館の担うべき役割に他ならず、木下氏も、暮らしの中で課題を抱えた人たちへ届く仕事を行う力が、かつての先輩主事たちに比べて、現在の公民館主事たちは弱くなっているのではないかと、課題を感じている様子であった。

しかし、飯田市内でそういった「マージナル」な人々を巻き込む動きが少なからずあるのも事実である。例えば、鼎地区の上茶屋分館では、公民館に集う女性たちが、昼間ひとりで家に取り残されているお年寄りや独居をしているお年寄りのことを気にかけて、お弁当を届ける活動を始めた。また、飯田の各公民館の中核である飯田市公民館でも、「平和と人権」を守る取り組みの一環で、外国籍市民へのアプローチを行い、足元からの国際化を実現する事業を展開している。飯田市公民館と外国人集住傾向のある地区公民館との連携のもとに、入り口としてまず日本語教室を開催し、そこから外国籍市民と地域の人々の共生に向けての歩みを進めている。さらに、飯田市公民館が所管している勤労青少年ホームは、3年前から、いわゆるひきこもりやニートの状態にある若者たちの居場所づくりを行ってきた。飯田下伊那15万人圏域の中で、ひきこもりやニートは約700人いると推定され、こうした人たちのために、まずは公民館が主導し、少しずつ地域の草の根へ軸足を移していくことを進めている。このように、地域に暮らす元気な住民の立場から、あるいは公民館としての立場から、マージナルな人々へのアプローチが着実に行われている。

1.5.2 飯田から他地域へ

次に、飯田型公民館活動の飯田市外への波及について、2年前から始まった「解体新書塾」という事業がある。飯田の公民館には、ひとつには、公民館を「やる」風土⁷、もうひとつには、住民に「巻き込まれる」職員⁸、というふたつの大きな特徴がある。しかし、全国的な公民館から見て、飯田型の公民館のこのような特徴はスタンダードではない、いわばガラパゴス化した状態である。これを他地域にも広げていくことを目的とした取り組みが解体新書塾であり、平成26年10月に第1回が行われ、平成28年2月には第2回が行われる。

解体新書塾を通じた飯田型公民館の第一の輸出先は兵庫県尼崎市である。尼崎市は人口が過去10年で55万人から45万人に激減しており、その現状に対する危機意識が強くある一方で、阪神淡路大震災の被災経験から、住民自治を大切にする市民性も持っている。そこで解体新書塾をきっかけに、尼崎市は飯田型の自治形態のどのような点なら転用可能かを考え、一方で飯田市は尼崎がこれから住民自治の土台を作っていくプロセスを見て、飯田で蓄積されてきたものを改めて捉えなおす、といった相互通行の長期的な関係が出来上がっている。尼崎市の動向

⁷ 第1回解体新書塾記録より“(飯田では)住民自身が仕事や暮らしの傍ら公民館を運営することを通して、地域の人材育成を進めている。このことを裏付けているのは、公民館に関わる人たちの多くが「公民館をやる」という言葉遣いをされることに表れている。”(東京大学牧野篤教授)

⁸ 第1回解体新書塾記録より“飯田市の公民館主事の共通点として重要なことは、住民を巻き込む力というよりは、住民に巻き込まれる力にあるのではないかと。皆が集まっている面白いところはどこか、そこに自分がどのように巻き込まれればよいかを把握し、行動に移す力と言えるかもしれない。それはまずは現場に出ることから始まるのではないかと。”(九州大学八木信一准教授)

に、あるいは飯田型公民館・自治形態のさらなる波及に、今後注目していきたい。

1.6 おわりに

全国的な公民館最盛期時代に出された下伊那テーゼは、50年の歳月を経て、それを生み出した飯田下伊那の人々の間でも、意識の水面下に追いやられてしまっているような状況にあった。しかしこのたび、下伊那テーゼは節目の年にあって再度注目を浴びることとなり、その精神に習おうという動きが生まれてきた。ここに至るまでに多少の風化があったことは否めないのかもしれないが、それが完全に過去の遺物となる前に、まだ当時の主事たちから激励を受けられるうちにテーゼが再び日の目を浴びたのは、非常に意義のあることだったのではないかと、今回の調査を通じて感じた。記念フォーラムでは「次世代への発展・継承」が一貫して意識されていたというが、下伊那テーゼが規定した公民館主事の「性格」そして「役割」と、当時の主事たちのエネルギッシュな姿とが、飯田下伊那の誇りとして、次の世代へ、あるいは他の地域へ、脈々と受け継がれていくことを切に願う。

参考文献

- 館報「たかぎ」縮刷版編集委員会編『たかぎ 公民館報縮刷版』、1979。
長澤成次「社会教育職員と専門職問題」、小林文人・伊藤長和・李正連『日本の社会教育・生涯学習』第6章、大学教育出版、2013、p.47。
増田寛也『地方消滅 東京一極集中が招く人口急減』、中公新書、2014。
松下拡『住民の学習と公民館』、勁草書房、1983、pp.1-15。
向井健「下伊那テーゼ 50周年記念フォーラム いま、改めて公民館の役割を考える」、『所報 社会教育・生涯学習の研究』第30号、社会教育・生涯学習研究所、2015、pp.3-4

謝辞

飯田市公民館の木下巨一副館長を始め、調査にご協力いただきました飯田市の方々に、この場を借りて深く御礼申し上げます。ありがとうございました。

編集後記

編集にあたり、フォーラムの記録、参加者の皆さんから寄せられた感想を読み返すたびに多くのことを考えさせられます。事務局でなければこんなにしっかり読まなかったし、深く考えなかったと思うので、事務局をやって良かったと思います。この報告集の発行をもって下伊那テーゼ 50 周年フォーラムは一区切りです。しかしこのフォーラムにおいて、それぞれの形で下伊那テーゼを受け取った私たちが紡ぐ未来に、下伊那テーゼは織り込まれていきます。下伊那テーゼ 100 周年を迎える 2065 年がより良い社会であるよう、自分の、そして自分たちのできることを着実にやっていきたいと思います。(大石)

この一年間、下伊那テーゼと一緒に学んだ方々とのつながりも自身にとって大変重要でした。特に同じ飯伊の主事の方々と、取り組みや意見を交流できたことはとても有意義な経験でした。公民館活動を充実させるには、主事同士の学び合いを続けていくことも大切であると感じました。今後もそうした活動が続いていくと良いなと思います。(櫻井)

下伊那テーゼ 50 周年記念事業にご協力いただいた全ての皆様に心より感謝申し上げます。

下伊那テーゼ 50 周年記念事業実行委員会事務局
大石真紀子 櫻井拓巳

